禪門寶訓講義

坤

1857
2
204

禪門寶訓集下

雪堂行和尚住薦福。一日問暫到僧。甚處來。僧云。福州來。雪堂云。沿路見好長老麼。僧云。近過信州博山住持本和尚。雖不曾拜識。安得知其爲好長老也。雪堂曰。殿堂香燈不絕。晨昏鐘鼓分明。二時粥飯精潔。僧行見人有禮。以此知其爲好長老。雪堂咲曰。本固賢矣。然爾亦具眼也。直以斯言達于郡守吳公傳朋。曰。這僧持論頗類范延齡薦張希顏事。而閣下之賢。不減張忠定公。老僧年邁。乞請本住持。庶幾爲林下盛事。吳公大喜。本即日遷薦福。（東湖集。范延齡事未詳。所出）

△大意　德人叢林に在れば、則ち內外盡く淸肅なるを明す。

（字釋）雪堂行は衢州烏巨山の雪堂道行禪師なり、法を佛眼淸遠禪師に嗣ぐ。◎暫到は暫時某寺に到て當に久しからずして去るべきの謂なり。◎沿路は道中筋なり、沿はソフともシタガフとも訓す、音義に「流れに從ふて下るなり、今は一路に從ふを謂ふ也」とあり。◎博山本は饒州薦福、梧本禪師なり、法を大慧宗杲に嗣ぐ、前に博山に住し後に薦福に遷る。◎廊廡廊は細殿とも歩殿とも云ふ、宮殿などの周圍

に人の通路に當てたる細長く折れ曲れる屋なり、廻廊廊下などゝ稱す、廣韻に『殿下の外屋也』と註したるは是なり、又玉篇に『廡下也』とあり、廡は庇と云ふ即ち日鎖の義なり、凡そ家の四方の軒下の家より別に差し出でたる小屋根を稱す、說文に『堂下の周屋』と註したるは是なり、前漢書賓嬰傳に『賜ふ所の金を廊廡の下に陳す』師古、註に『廊は堂下の周屋、廡は門屋也』といへるは又一說とすべし、◎持論は一家の說を立てゝ己が議論を執持するを云ふ、◎顏は偏顏の義より轉じて少き方にも多き方にも傾くべき辭なり、故にチトとヨホドとの二義ありて或は十中の二三分となるべき所あり或は十中の七八分となるべき所あり、此には後說に從ふべし、又ヨクとも訓す金剛經疏に『顏は能なり』と見えたり、◎范延齡は皇朝類苑萬姓統譜並に范延貴に作る、◎薦は元來祖廟に物を獻ずる字なり、夫より轉じて人を薦め擧げて立身せしむることに用ふ、推薦薦擧などゝ通用す、◎閣下は貴顯其の他すべて身分高き人の尊稱として用ふる辭なり、音義に『稱呼の辭、又語錄に云く宰相三公郡守俱に閣下と稱す』とあり、凡そ稱呼の類は尊敬ずるの辭にて名を直ちに指さず其の人の近處を唱へて名を呼びたる代りにするものなり、左れども各〻其の身分に應じたる稱呼あれば固より濫用すべき非らず、西陽雜俎に秦漢より以來、天子に於て陛下と云ひ、皇太子に殿下と云ひ、二千石の長吏に閣下と云ひ、使者に節下と云ひ、通類相呼びて足下と云ふ、是れ心得べし、◎張忠定公は張詠字は

復之自ら乖崖と號す、忠定は其の謚號なり、宋の太宗より眞宗に歷仕して能く賢を擧げ忠を盡す、安國公に封せられたり、◎過は過なり行なり又老なり、老過と續きて年の寄りたることに用ふ。

（講解）佛眼清遠の法嗣なる雪堂道行和尙が饒州府下の薦福に住して居られた、一日に暫到の僧として暫く來て居る衲僧があつたので、其の者にお前は甚所から來たかと問はれければ、其の僧は福州より來ましたと申した、雪堂和尙重ねて仰せらるゝやう、其の路筋に好い長老を見たかどうじや、僧の申すやう、段々參る中に此間廣信府の信州を過ぎましたが、該地博山の住持に大慈の法子なる悟本和尙といふが御座る、未だ曾て拜顏を得たことはあらねども、慥に好長老なることを識りました、雪堂の仰せに、汗は安して其の好たることを知り得たるかと、僧の云く其の寺に入て見まするに、大路や小徑の能く開き闢いて通行自由なるのは居處の好いのである、廻廊や廡廊までが能く修繕整理の行屆きたるのは建立の好いのである、佛殿法堂に線香燈火の絕間ないのは報恩の好いのである、晨や昏の大鐘法鼓の遲速なく分明なるのは法令の好いのである、朝晝二時の粥座齋座の純粹潔白なるのは恩衆の好いのである僧の經行する者が人を見て能く禮義

あるのは規矩の好いのである、凡そ吾が外見する所にても先づ此の六條の好い事がある、謂ゆる居を見て其の人を知り形を見て人の心を知るものなれば、此を以て其の好長老なることを知るとを申し上げゝる。雪堂時に後席を得むとする の折柄であつたから、ソコで喚て仰せらるゝやう、悟本和尚は固に賢達の稍子じや、然して爾も亦能く人を見る底の眼を具して居る、近ごろ感心の至りなりとて、直ちに所の僧の言を以て該の郡長の姓は吳氏名は傅朋といふに傳へて更めて官上せらるゝやう、這の僧が申す所の持論は、頗る當時（宋朝眞宗の景德年間）の殿直の官に居し范延齡が汗鄉縣の知たる張希顏の好官員たるを知て之を朝に薦めし事實に類して居る（四到の僧を以て范延齡に比し、悟本和尚を以て張希顏に比す、而して郡守吳公を以て張公に當つるなり）而して閣下の賢は張忠定公に減らぬ事であるから、賢者を薦舉するに躊躇せられまい、殊に老僧は最早年寄つて教化も出來ないほどに、乞ぞ彼の悟本を請聘して後席の住持と命て下されよ、左すれば是より庶ぞ叢林門下の盛事たるに幾うとて、其の取斗方を願出でた、吳公之を聞て大に喜び、善は急げとて早速請聘の手續を爲したりしかば、悟本和尚乃ち辭するに由なくて即日に薦福へ遷られた事じや。（東湖集は本講義三百四十八頁に見ゆ、范延齡の四字なし、而して出二皇朝類苑一の五字あり、正に藏本に考ふる所の如し。）

因に云ふ、張希顏の故事は皇朝類苑高姓統譜に出たり其の載する所、事同じくして語稍異なり、而して統譜の文は之を頭書に出だしつれば亦此に掲ぐるの要なし依て今類苑の文を左に錄して參照とはなしぬ。

皇朝類苑卷二十二曰。宋時張希顏爲莘鄉邑宰。范延貴爲殿直。押兵過金陵。張詠上命知金陵事。問曰。詠問於延貴天使殿直也沿路見好官員麼。曰。昨過莘鄉邑宰張希顏。好官員也。詠曰。焉得知其爲好。答曰。自入其境。橋路完美。田園闢。野無惰農。市無賭博。夜聞更鼓分明。必知有美政者。詠大笑曰。希顏固善矣。天使亦好官員也。即日同薦於朝。希顏後爲發運使。延貴亦閤門祗候。皆號能吏也。

雪堂曰。金隄千里。潰於蟻壤。白璧之美。離於瑕玷。況無上妙道。非特金隄白璧也。而貪慾瞋恚。非特蟻壤瑕玷也。要在志之端謹。行之精進。守之堅確。修之完美。然後可以自利而利他也。（與三王十朋書）

△大意、心を治めむことは、未發の中に在るを明す。

（字釋）金隄は漢書子虛賦、註に「言ふは水の隄塘堅きこと金の如き也」西京賦、註に「石を以て遮隊とす、故に其の堅きを喩へて金隄とす」とあり、◎蟻壤は蟻が穴を掘て其の口に軟かなる土を高く積みたるを云ふ、此には蟻穴といふ程の義と見る

べし、韓非子説林篇に、齊の桓公孤竹を伐つ山中水なし、隰朋が曰く蟻壤一寸なれば仭にして水ありと、乃ち地を掘り遂に水を得たり云云、是より蟻壤を飛穴と云ふ◎離は支離の義なり、◎無上妙道は外法の諸道に對して無上と言ふ、即ち諸世間に於て上なきの義なり、妙とは精微なり、永嘉集、註に「用ふること無くして常に足る者は妙道に非ること莫し、而して能く深く三諦に徹し廣く千如に亙り、心言蹤を絶する之を妙道と謂ふ」とあり、◎貪慾瞋恚は並に十惡の一なり、本講義三百五十頁に釋す、◎自利利他は同二百三十六頁に釋あり。

（講解）雪堂行和尚の仰せに金隄とて格別に手堅い所の千里の長き隄も、僅かな蟻の穴より水の洩れ出でゝ潰れるものゞ白璧とて暗夜を照らす明白な美はしき璧も、聊かな瑕珐より次第々々に響き離れるものゞ故に之を防がむには何でも未發の時にせむければならぬのである。況て斯の無上の妙道は其の大切珍重なること、特に千里の金隄や連城の白璧の如き段ではない、然るを之に大害を與へむとする貪慾瞋恚の賊は、特に蟻の穴や璧の瑕位に比すべき段では無い、時々刻々法身の慧命を害せむとするもので、イヤハヤ何とも油斷のならぬ事である。學覺するに唯、學者が志操の端正戒護にし、行力の勇猛精進にし、守ることの堅固確實にし、修することの完全好美にするに在るのみじや。斯く貪慾瞋恚の賊を未

萌に防ぎつゝ妙道場裡に穩坐して然る後に以て自分を利して廣く他を利濟すべき事である。與王十朋書（雪堂和尚より宋の温州樂清の人なる王十朋字は龜齡に與ふる所の書なり、朋の字、和刊本に鵬に作るは非なり。）

雪堂日。予在龍門一時。昺鐵面住太平。有言。昺行脚離鄉未久。聞受業一夕遺火悉爲煨燼。昺得書。嘲之於地。乃曰。徒亂人意耳。（東湖集）

△大意、行脚の人、其の心を操ること專一なるべきを明す。

（字釋）受業得度して教を受くるの處を受業寺と云ひ、其の師を受業師と名く、又親教師と稱す、要覽師資類に「鄔波陀耶此には親教と云ふ、能く世を離出するの業を教ふるに由ての故に受業和尚と稱す」とあり、受業の字外典にも見えたり、孟子告子上に願くは留て業を門に受けむ、又史記孟子傳に孟柯業を子思の門に受く云云、◎遺火は失火と云ふに同じ、誤りて惹起したる火災を云ふ、◎煨燼は音隈盡なり、煨はウヅミビと訓ず火を蓄ふなり、又盆中の火なり、燼はモエグヒと訓ず火の餘りなり、是れ大火の後に至り僅に火の氣の殘りたるを言ふなり。

（講解）雪堂和尚の仰せに、予れ舒州の龍門に在りし時、佛鑑の子の知昺禪師が同州の太平寺に住して居た、昺が太平に住せしことは星身の長老として本講義三百二十頁に見ゆ、昺は嚴格な實で物に撓まぬ人であつたから世に之を鐵面と綽號したのじや。サテ昺鐵面が言はれし

事がある、昺が行脚して故郷を離るゝこと未だ幾らも經なかつたに、我が受業寺の常住より一夕火を失して殘らず焼盡と爲つたと云ふことを聞いたが、何分修行の身として心に隱くべき事でないゆゑ實は打捨つて置いた、適〻受業寺よりの書簡を得たが、這は火災の事を云ふて致したと云ふのを知つて、其の封をも切らずに之を地に擲つけて、ソコで斯く申した、徒らに人の意を亂す耳であると、是れは道に遥むの勇氣を摧くものゞとの意味にてありけるが、實に昺鐵面が工夫純一の樣の見にて、却々常人の眞似し得べき所の事では無い。

雪堂謂二晦菴光和尚一曰。予弱冠之年。見獨居士。言。中無主不立。外不正不行。此語宜終身踐之。聖賢事業備矣。予佩其語。在家修身。出家學道。以至率身臨衆。如衡石之定重輕。規矩之成方圓。捨此則事事失準矣。

△大意　古人の格言を服膺して、常に之を法則と爲すべきを明す。

（字釋）晦菴光は信州鵝峰の晦菴慧光禪師なり、法を雪堂道行に嗣ぐ。◎弱冠は曲禮に「二十を弱と曰ふ冠す」とあるより二十歳の異名とす、疏に「體猶は未だ壯ならず故に弱と曰ふ也」釋名に「二十を弱と曰ふ柔弱なるを言ふ也」とあり、和語に若者を冠者と稱す、蓋し曲禮に若く、光源氏の君をば元服の後、冠者の君と云ふが如き是なり、◎見獨居士は雪堂の父なり、普燈錄卷十六、雪堂傳に「師は括蒼の人、族は葉氏、父仲諶二千石に仕へ心を祖道に樓しむ、見獨居士と號す云云」とあり、居士とは世間に居て出世間の教を信じ行する士の稱謂なり、畢竟すれば外儀內德兼備の號とす、祖庭事苑に「凡そ四德を具すれば乃ち居士と稱す、一には任官を求めず、二には寡欲にして德を蘊む、三には財に居て大富四には道を守て自ら悟る」又「財に居るの士、家に居るの士、法に居るの士、朝に居り山に居るの士あり、通じて居士と名く」とあり、凡そ居士の義に就ては諸說紛々たり、象器箋稱呼類に詳なれば往て檢せよ、◎佩はオブと訓ず音義に「大帶なり、又凡そ帶には必ず佩あり、佩は佩物なり、支那にて昔し用ひたる飾の一にて玉を綬に貫きたるも物紀原などの書に見えたり、古人凡そ善行嘉言に遇ふときは卽ち佩に書す、此に謂ゆる佩は紳の義なり、其の不忘を示す也」とあり、◎率は率先とて人に先だちて人を引き立つることの謂なり、◎衡石は秤の竿、俗に天秤と云ふ、石は秤の錘、俗に分銅と云ふ、禮月令仲春の條に「衡石を鈞くす」鄭氏の註に「稱の上を衡と曰ひ、百二十斤を石と曰ふ」とあり、又前漢書律歷志に「石とは大なり權の大なる者」と見ゆ、◎準はノリと訓ず水準とて水を以て平を爲すの器なり、此に法則の義とす。

(講解)雪堂和尚が其の法嗣なる晦菴、慧光に謂て申さるゝやう、予れ弱冠の年頃に、父の見獨居士より示された格言がある、曰は中即ち心内に主宰の無いときは必ず自立することが出來ない、外即ち容儀の端正で無いときは必ず事を行ふことが出來ないとの二句じや、何でも此の語を我物として身を終るまで之を實地に踐で行くが宜い聖人賢者が生涯の事業も全く此の二語に備つてある、予れ此の語を書き附け腰に佩びて忘れぬやうにし、家に居るときは之に由て身を修め、家を出づるときは之を思ふて道を學ひた、夫より以來出世の今日に至るまで、已れ先づ身を率ねて大衆に臨むにも、皆此の語を以て鑑戒と致すことなるが、丁度衡石の能く物の重い輕いを定めたり、規や矩の能く事の方い圓いを仕揚げるやうなものじや、苟且にも此の語を捨てゝは則ち事々物々何も蚊も之が法則を失する事である。(藏本を檢するに、本文出處を示したる廣錄の下に見獨居士者即雪堂父也の十字あり。)

雪堂曰。高菴臨衆必曰。衆中須知有識者。予因問其故。高菴曰。不見。潙山道。學措看他上流。莫謾隨於庸鄙。平生在衆。不況於下愚者。皆出此語。稠人廣衆中。鄙者多。識者少。鄙者易習。識者難親。果能自奮志於其間。如一人與萬人敵。庸鄙之習力盡。眞挺特沒量漢也。予終身踐其言。始得不負出家之志矣。(廣錄)

△大意、眼を上流に注ぎ、奮志一番以て沒量の漢たるべきを明す。

(字釋)學措二句は潙山警策の文なり、但し警策には設を撰に作る。道藏夾註に論語里仁篇の「賢を見ては齊しからむことを思ふ、不賢を見ては而も内に自ら省る」の語を引けり、是れは賢云云を上流の句に當て、不賢云云を庸鄙の句に當てしなり。◎挺特は音義に「超越して獨立する也」とあり、挺は〆クと訓す獨り高く拔き出づることにて超挺と連用す、特はコトニともヒトリともと訓す特別すぐれて一人立つことにて特立と連用す、潙山警策に「形儀挺特」の句あり。◎沒量漢沒は無なり量は測なり、言ふは人の能く其の器量を測ること無きなり、漢は輟耕錄に「今人、賤丈夫を謂て漢子と爲す」事物紀原卷十に「今の俗人を罵りて漢と曰ふ、蓋し晉の末、胡中原を亂る、故に胡人、中國を罵りて漢と曰ふ、南人、北人を罵りて胡と爲し、虜と爲すより起る云云」とありて多く罵り卑めたる辭に用ひたり、左れども禪語には卑ひるに似て揚るの言句多ければ此には即ち好漢の義に見るべし。

(講解)雪堂和尚の仰せに、我が高菴師兄が(高菴雪堂共に佛眼の法嗣、故に法に於て兄弟たり)、大衆に臨では必ず曰ふ、大衆の中には須らく一見識を具したる者の有ることを知らねばなら

ぬと、予因て衆中の識者を知るには何して判るかと問ひければ、高菴の申しやうに、潙山警策を見たことはないが、潙山禪師は百丈の法嗣なり、學者の懈怠し漸く流弊を成すを見て乃ち警策一篇を著す、其の語に斯く道ふてある、一擧一措の起居動作に於て他の上流を看て之を手本とし、己れも亦之に齊しからむことを思ふて、設に凡庸鄙劣なる下流の者に隨ふてはならぬぞと、予れ平生大衆の中に居て、下愚の流輩に沉まぬことは、皆此の警策の語より出たるのである。サテ稠人廣衆とて多人數寄り合ふ廣い中にても、自分より鄙い者は多くて見識のある者は少ない、殊に鄙い者には何となく習れ易うて見識ある者には却々就き難いものじゃ、何でも豫ての通りに能く齋然自ら志を擧措の間に奮ふて、己れ一人と他萬人と相敵對せるやうにするので、是れは擧覺勁せざる一個の願心を以て、無始劫來の習氣なる八萬四千の妄想を打ち破るの比喩である、若し能く此の大勇猛心の發出したらむには、彼の庸常鄙劣なる下流の熏習力は跡方もなく盡き果てゝ、眞の挺特と立ち超に過れて、人の能く量ることと沒き乾坤獨歩底の漢ならむと申されき。予（雪堂自稱す）身を終るまで高菴老兄の言を實地に躋みて始めて出家の素志に負かぬことを得た。

雪堂謂且菴曰。執事須權重輕。發言要先思慮。務合中道。勿使偏

頗。若倉卒暴用。鮮克有濟。就使得成。而終不能萬全。予在衆中。備見利病。惟有德者。以寬服人。常願後來有志者。審而行之。方爲美利。靈源嘗曰。凡人平居。內照多能。曉了及涉事外馳。便乖混融。喪其法體。必欲思紹佛祖之任。啓迪後昆。不可不常自檢責也。廣錄

△大意、學者用意周到にし。寬容以て事を成すべきを明す。

（字釋）偏●頗は史記の註に『偏は平ならず頗は正からず』とあり、◎就●使●はタトヒと訓す、就はツクともモシとも云ふ字なれば、若し彼に就て然う使せて見たらばと云ふ意なり、◎利●病●は猶は利害の如し、人に益あるを利といひ、人に損あるを病と云ふ、◎平●居●は常不斷と云ふ事にて平生に同じ、◎啓●迪●は開き導くなり、啓は門戸を開て人を入れ、迪は道筋を明けて導くなり、字面は書、太甲上篇に出づ、◎後●昆●は後世後學の如し、昆亦後なり、字面は書、仲虺之誥に見ゆ、頗書に偏倚なし、◎檢●責●は檢制勉責なり、檢はカムガフ、又ケミスと訓す、吟味することにて書に『身を檢する』と及ばざるが若くす』とあるが如き是なり、責は自らセメ正すことにて法華譬喩品に『終日竟夜每に自ら勉責す』とあるが如き是なり。

（講解）雪堂和尚が其の法嗣なる且菴守仁に謂て申さるゝやう、凡そ事を執り行

はむには須らく其の重い輕いを權るべきぞ、言を發し出さむには心に思慮を廻らすことを先とするのが肝要ぞ、斯の如くにして其の行ふ事も言ふ事も、務めて過不及なき中道に合せしめて、片寄りたる偏頗のないやうに致さねばならぬ。若し何の思慮を廻らさずして倉卒に手暴く用ふるときは、何事も克く成就する有ることは鮮ない、就使斯樣にさせて成就することを得ても、終は悉く完全無闕なることは出來ない。予れ大衆の中に居て備さに其の所行の利害損益を見るに、惟道德ある者は寬量の處置を以て人を歸服させるがゆゑ、常に後來學者の志操氣力ある者が、彼の德者の寬典なる處置の斯々の次第であると、一々其の理を審にして之を行はむことを願ふ、斯の如き處置は方に是れ全美なる利益と爲すべきものぞ、蘊源惟清禪師（晦堂祖心の法子）が嘗て申されしやう、凡そ衲僧が平居無事の際、攝心して內に照して多くは能く曉了するとて、卽ち見理明白であるかなれども偶〻不意に出たる事に干涉して卒然外に馳するに及では、其の事と理とが別々になるので、便ち混合融通の眞理に乖て遂に其の自性の法體を喪ふ事となる、左れば是非に佛祖敎化の大任を紹いで後來の學者を啓き迪いて行かうと欲し思へば常に將自ら吟味し克く黃めて事理不二の當體にならむければならぬものしやと

云はれきとぞ、

應菴華和尙住明果雪堂未嘗一日不過從間有竊議者雪堂曰華姪爲人不悅利近名不先譽後毀不阿容苟合不佞色巧言加以見道明白去住翛然衲子中難得予固重之（旦菴逸亦）

△大意、道德は長幼を擇ばざるを明す。

（字釋）應菴華は明州天童、應菴曇華禪師なり、蘄州江氏の子、法を虎丘紹隆に嗣ぐ、◎明果は和刊本に妙果に作るは非なり、今藏本に據て改むること爾り、應菴語錄及び正燈錄、師傳を檢するに「衢州桐山明果禪院に住す」とあり、◎華姪、姪は甥にて兄弟の子を云ふ、雪堂の

五祖演
- 佛眼—雪堂
- 佛果—虎丘—應菴

は虎丘の子たり、故に雪堂、應菴を稱して華姪と云ふ、卽ち圖を以て示すこと上の如し、◎翛然は本講義三百三十一頁に釋を下せり。

（講解）虎丘紹隆の法嗣なる應菴曇華和尙が衢州桐山の明果院に住して居た、雪堂和尙は應菴の法叔であるが、ソレにも拘らず未だ嘗て一日だも明果へ過ぎ從はぬことがなかつた、ソコで間、竊議すと申して、彼の雪堂和尙は姪の曇華許へ行

かるゝが、アレは丁度彼方此方でないかと云つて嘲かに議る者があつたのよゾレをば雪堂が聞て申されけるやう、法姪の曇華が人と爲りは、利欲を悅び名聞に近づかない、人前で譽めて後にて毀らない、己れを曲げて苟且にも合はない、顏色を佞はしうし言葉を巧みにはせない、併し此等の如きはホムの華姪が世間底の一端であるが、却々是式の事では無い、彼が見道の一變眼は烱々と明白であつて、行住坐臥悉く儼然自如たるものじや、今日衲子の中に於て實に多くは得難い、其れ故予れ固に之を重むずるのであるとて、益〻尊を屈して愛重せられた。

雪堂曰。學者氣勝志。則爲小人。志勝氣。則爲端人正士。氣與志齊。爲得道賢聖。有人剛狠不受規諫。氣使然也。端正之士。雖強使爲不善。寧死不二。志使然也。

△大意、志氣の二者相助け相齊うして、而して後に能く德を成ずるを明す。

（字釋）志・氣は音義に「上は心志なり下は血氣なり、理を以て心を養へば志昏からず、志を以て氣を帥ゆれば氣墮せず云云」順硃に「氣は稟氣なり志は心の之く所なり、季而が謂く氣は卽ち力の用なり、志は卽ち道の體なり、學者力用ありて道體に乏しきは、是れ用ありて體なき也」とあり、◎剛・狠は剛强狠戾なり、狠はモトルと訓ず、字書に「聽從せざるなり」と註して人の言を聽き入れず何事も人と反對するを云ふ、俗に云ふ意地惡きことなり。

（講解）雪堂和尙の仰せに、學者よ、氣とて形に充て動く所の血氣が、心の向ふ所の志に勝つときは小人庸輩である、之に反して心志が血氣に勝つときは端人正士である、サテ氣は卽ち力の用であつて志は卽ち道の體であれば、何方が聊か缺乏してもいけないので、此の血氣と心志とは過不及の無いやうに相齊うして始めて得道の賢人聖者たるのじや、例へば茲に人あり、剛狠として强い意地惡にして規則や諫言を受附ぬは、是れ血氣が心志に勝つの然らしむるものである、又端正の人に向つて强に善からぬ事を使爲やうとしても、彼れ徹頭徹尾狂い了簡がないから、寧ろ死に至るべくとも決して其の心を二ッにせない、是れは心志が血氣に勝つの然らしむるものである。

雪堂曰。高菴住雲居。普雲圓爲首座。一村僧爲書記。白楊順爲藏主。通烏頭爲知客。賢眞牧爲維那。華姪爲副寺。用姪爲監寺。皆是有德業者。用姪尋常廉約不點。常住油。華姪因戲之曰。異時做長老。須是鼻孔端正始得。豈可以此爲得耶。用姪不對。用姪處己雖

儉。與人甚豐。接納四來。略無倦色。高菴一日見之曰。監寺用心固難得。更須照管常住勿令疎失。用姪曰。在某失爲小過。在和尚尊賢待士。海納山容。不問細微。誠爲大德。高菴咲而已。故叢林有用大碗之稱。逸一事

△大意、　執役は常住物を護惜すべきを明す。

（字釋）普雲圓は南康軍雲居、普雲自圓禪師なり、法を高菴善悟に嗣ぐ、◎首座は音義に「叢林に表率たり、人天の眼目、分座說法して後昆を開鑿す、故に首座と曰ふ也」とあり、猶ほ本講義七十四頁を參照すべし、◎一村僧は台州萬年、雪巢法一禪師なり、法を草堂善清に嗣ぐ。叢林盛事卷下、雪巢、條に「一和尚自ら村僧と號す云云」又枯崖漫錄にも見ゆ、藏本に村を材に作るは誤刊なるべし、◎書記は音義に「文翰を執掌して凡そ山門の榜疏書簡祈禱の語詞悉く皆之に屬す」とあり、叢器・職位類の上に詳なり、◎白楊順は撫州、白楊法順禪師なり、法を佛眼清遠に嗣ぐ、◎藏主は本講義百五十一頁に釋す、○通烏頭は眞州北山、法通禪師なり、烏頭は別號か綽號か未だ詳にせず、法を長蘆清了に嗣ぐ、◎知客は音義に「賓客を知典す、細白相遇し香茶に應對し迎請して務めて整齊ならしむ」とあり、叢器・職位類の上に詳なり、◎賢眞牧は佛眼の法嗣、本講義三百四十頁に出づ、◎維那は音義に

「僧衆に綱維として曲さに調攝を盡す、僧事の內外之を掌らざるは無し、維那は華梵兼ね學ぐ、卽ち今の悅衆なり」とあり、維那とは漢語に翻ゆる綱維と、梵語の羯磨陀那を省合したるものなり、悅衆とは僧の行事の儀式次第を辨ずるを悅ばしむる義とす、◎副寺は百五千一頁に詳なり、◎湘姪は婺州雙林、德用禪師なり、法を高菴善悟に嗣ぐ、高菴雪堂其に佛眼の法子、故に雪堂より德用を指して姪と云ふ、卽ち上圖の如し、◎監寺は音義に「梵語に摩監帝、此には寺主と云ふ、卽ち今の監寺なり、此職早暮に勤めて香火を事とす、官員に應接し事を歷て廉能公謹に上下怨み無き者之に充つ」要覽住持類に「監とは總領の稱、寺院主と稱せざる所以は、蓋し長老を推し尊ぶなり」監寺は寺內一切の事を掌り、長老は唯法道を擡起するのみなり、叢器・職位類の中に詳なり、◎鼻孔端正は鼻の孔の端正く付て居ると云ふことにて具眼と云ふに同じ、古人の譬喩に初めて見性したるを王子誕生と稱す、其の王子の鼻が歪むとか眼が歪むとかすれば卽ち不具者なり、見性して後に邪路に走るは王子の不具なるに異ならず、故に鼻孔端正は法身道體の全きを云ふなり、◎某は名を知らぬ人を指す語なれども、此は自稱の代名詞にして吾と云ふに同じ、祖庭事苑二に「某は甘の木上に在るが如く其の實を指すなり、然して猶ほ未だ以て其の名を定むるに足らず云云」とあり、◎海納山

●容は音義に「量、大海の如し、水として納れざること無し、心山谷に似たり、物として容れざること無し」とあり、◎用大碗は虛堂錄卷七、謝知事上堂に「用都寺常住の油を點せず、大碗を買ふて食を造つて大衆に供養す云云」とあり。（都寺は監寺なり、職位相同じ、ぎょが如し、往て衆僧職位類都寺の條下を檢せよ。）

（講解）雪堂和尚の仰せに、我が高菴師兄が江西の名山なる雲居に住した、時に普雲、首座は首座でゐた首座は師家に代て衆を接得するの任じや、法一、村僧は書記でゐた、書記は山門の文翰一切を掌る職じや、白楊、法順は藏主でゐた藏主は經藏聖典を主るの役じや、法通、烏頭は知客でゐた知客は尊宿檀越等を取扱ふ任じや、眞牧、正賢は維那でゐた維那は威儀作法を監して事を處辨するの職じや、法姪の叠華は副寺でゐた副寺は米穀金帛等の出納を掌る役じや、又姪の德用は監寺で居た、監寺は總管の如きもので山内を總べ領するの職じや、尤も此の任は清廉公謹にして衆の服する者を以て之に當るのよ、以上の執役は皆是れ他日一方に宗匠たるべき道德行業ある俊衲許りである、實に高菴師兄が人を得たること盛なりといひつべきじや。サテ監寺の用姪は尊常清廉儉約であつて常住の油をも點燈せない、ソコで副寺の華姪が之に戲れて云ふやう、異時貴公が出世して長

老と做らば、須らく是れ鼻孔端正底の圓滿な者となつて、始めて得たり顏に跨るべきぞ、豈とて常住の油を消費せぬ位な事を以て得たり賢しと爲す可けむやと、て戲談せしが、用姪は之を爭ふは大人氣なしとや思ひけむ、何とも對へ得なむだ。却說用姪己を處理することは儉約なりしかども、人の與めにすることは甚だ十分に致した、日々四來の衆を接待納領して大概倦める色なかりき、師の高菴和尚、一日之を見そなはれて、用監寺が用意周到なることは固に得難い程じやが、更に須らく常住大小の事物を照らし合せ管べて、疎漏損失せしめぬ樣に致さねば叶はぬぞと申されければ、用姪は之に對へて用菜に在ては假ひ疎失があつても、開は一己の小しき過である唯、和尚に在ては賢者を尊敬し衲士を接得せられ、其の量を廣大にして大海の如くに納れ山谷の如くに容れて些細微小なる常住邊の事には容喙し給はぬこそ誠に大德と爲すなれと申上げた、如何にも說き得て諦當と云ふべきである、ソコで高菴は最う何にも云ふに及ばないから唯、咲はれた而已じや。サテ用監寺は嘗て大碗を買ひ食物を盛つて大衆に供養せしことがあつた故に叢林之を稱して用大碗とぞ名けたりけるが、畢竟用が器量のいと大なるを賞したのである。

雪堂曰。學者不知道之所向。則尋師友以參扣之。善知識不可以道之獨化。故假學者贊祐之。是以主招提有道德之師。而成法社。必有賢智之衲子。是爲虎嘯風烈龍驤雲起。昔江西馬祖。因百丈南泉。而顯其大機大用。南嶽石頭。得藥山天皇。而著其大智大能。所以千載一合。論說無疑。翼然若鴻毛之遇風。沛乎似巨魚之縱壑。皆自然之勢也。遂致建叢林功勛。增佛祖光耀。先師住龍門。一夕謂予曰。我無德業。不能浩歸湖海。衲子終愧老東山也。言畢瀟然。予嘗思之。今爲人師法者。與古人相去倍萬矣。（興三竹菴書）

（三百九十六）

△大意、法門の興盛は、師學相遇ふに賴るを明す。

（字釋）招提は寺院の異名とす、故高僧傳二、遠磨笈多章に「寺は此土の公院の名、謂ゆる司なり廷なり、又招提と云ふ者は亦訛略なり、世字解に依て招は謂く、招引提は提攜と、並に浪語なり、此は乃ち西言のみ、正音には招闍提奢と云ふ、此に四方と云ふ、謂く處所四方衆僧の依住する所たる也」衆經音義十七に「招此に四と云ひ提此に方と云ふ、謂く四方の僧なり、一に云ふ招提とは訛なり、正には拓闍提奢と言ふ、譯人闍を去り奢を去り、拓を以て招に作る、拓招相似たるを以て遂に期の誤

あり」と見ゆ、◎社は音義に「席なり會なり」とあり、◎虎嘯云云は文選聖主得賢臣頌に「世必ず聖智の君ありて而して後に賢明の臣あり、故に虎嘯て風列じ、龍興て雲を致す云云」淮南子天文訓に「虎嘯て谷風至り龍擧て景雲屬る」（註に虎は土物なり、水は土より生ず故に虎嘯て谷風至るなり、龍は水なり、雲は水を生ず故に龍擧て景雲屬るなり、風は會なり、）◎嘯はウソブクと訓ず、吹氣の譯として口を窄めて氣を吐くなり、和刊本に咲に作るは誤刊なり、◎驤はアガルと訓ず騰躍して遠く擧るの貌、◎大機大用人境一如の境界を得て一心見開くを大機と云ひ、其を我物にして自由三昧に振る舞ふを大用と云ふ、仰山云「百丈大機を得、黄檗大用を得」と（會元百丈の章）是なり、◎藥山は澧州藥山惟儼禪師なり、法を石頭希遷に嗣ぐ、◎天皇は荆州天皇道悟禪師なり、法を石頭に嗣ぐ、◎論說無疑は文選六臣註に（水文は頭に見ゆ）「向曰君臣の道疑はされば左右其非を論說すと雖も信せず」とあり、◎翼然二句は同註に「銑曰、言ふは君臣の道合すれば鴻毛の風に遇ふて一擧千里なるが如く、大魚の大川に游縱して其の性を得るが如きなり、翼は飛疾の貌、沛は大水の貌」とあり、◎鴻毛鴻はヒシクヒと云ふ水鳥なり雁よりは大きく好みて菱の實を食ふ故に此の名あり俗に大雁と云ふに同じ、毛は羽の義にて羽毛鱗介と分つ毛の字に見るべからず、戰國策卷六、下、趙、孝成王、篇に「鴻毛は至輕なり、而も自

ら擧ること能はず、夫れ清風に飄れば則ち四海に横行す」とあり、◎堅は文選、註に「大川」と爲し增韻に「大堅は海也」と註せり、◎功勛は其にイサヲと訓す其功の成就して身に光ある氣味なり、元來國家に就て云ふ事にて今君臣の字義を假るより斯る字を用ひしなり、勛は勳と同字とす、◎浩はオホイニと訓す、盛大流行の貌にて湖海の字に應ず、◎潸然は落涙して泣く體の形容なり潸は音山和刊本に潸に作るは誤なり。

（講解）雪堂和尚の仰せに、學者、初發心して道の趣き向ふ所を知らぬときは、道案内者たる嚴師良友を尋ねて、ソコで篤と參究叩問するのよ、能化の善知識も一人にて其の道の弘通敎化が出來ない、故に所化の學者を假りて之を贊成祐助させるのである。是を以て招提とて十方住持の寺院を主るには道德の師家があり、法社とて大法を務ひる社會を成すには必ず賢智の稍子がある、是れは丁度陰精の虎が陽地に居て嘯けば陰陽相感じて風が源烈と凄じく、陽精の龍が陰地に起て躍り騰れば陰陽相扶けて雲が勃然と起るのと一般じや。昔し江西の馬祖道一禪師は江西にて盛むに法幢を樹てたる大宗匠なるが、其の會下に百丈懷海の如き、南泉普願の如きの俊稍が有つたので、乃ち其の殺活自在底の大機大用を顯はし

たのじや、又南嶽の石頭希遷禪師は、湖南にて大に宗旨を立したる善知識なるが其の門下に藥山惟儼の如き、天皇道悟の如きの英士を得たので、乃ち其の般若無礙底の大智大能を著はしたのじや。劉玄德の諸葛孔明に於けるが如きも亦一類の話頭なりけり、所以に師學千年に一たび會合しても、雙方の論說することが言下に疑ふ所は無い、ソコで學者の知見を增長することは、翼然として鳥の毛の順風に遇ふて勢ひ高く飛び擧るが如く、師家の材用を發出することは、沛乎として大魚の大川に在つて游泳自在なるに似たもので、是れ皆自然の勢にして此に至るのじや、斯く師學の機々投合して遂に能く叢林の功勛を建て佛祖の光輝を增すことを致すのである。サテ我が佛眼先師が舒州の龍門に住して居られしが、或夜に予に聞ての仰せに、我れ何の德業も無うて浩に湖海の稍子を蹈入することが出來ない、是では終ぞ先師の東山老法演五祖に對し、不面目で誠に慚愧の至りに堪へぬと言ひ擧つて潸然と泣かれた、予嘗て之を思ふに、今世の人の師表法則たる者は愈〻衰へて、古人なる彼の馬祖や石頭は申すも愚か東山なぞゝ相去ることが萬倍となつたじや。與竹菴士珪禪師は雪堂より同門の竹菴士珪禪師に與ふる所の書なり。

雪堂曰。予在龍門時。靈源住太平。有司以非意擾之。靈源與先師

書曰。直可以行道。殆不可爲。枉可以住持。誠非我志。不如放意於千巖萬壑之間。日飽芻粟。以遂餘生。復何惓惓乎。不旬浹間。有黃龍之命。乃乘興歸江西。（聽首座記聞）

△大意、古人、去住の自由にして進止の脫洒なるを述ぶ。

（字釋）有司は役人と云ふことなり、各、司る所有るを以て之を有司と稱す、◎千巖萬壑は山水の至高至深を形容して云ふ、圓機活法地理門（山水事實）に「晉の顧愷之、會稽に遊ぶ、人、山水の美を問ふ、答て曰く、千巖秀を競ひ萬壑流を爭ふ」とあり、◎芻粟は音義に「草子の飯也」とあり、芻はクサと訓ず牛馬を飼ふの草を芻と云ふ（藏本仲冠を附して芻に作る、俗なり）、粟は米の甲あるもの至て麁末の食物を云ふ、◎惓惓は顧念の義、又憂悶なり、◎旬浹旬は十日にて浹は十二日なり、左傳宣公九年、註に「浹辰は子より亥に至り周匝十二日なり」とあり。

（講解）雪堂和尙の仰せに、予、舒州の龍門に居た時、靈源惟清禪師（黃龍晦堂の嗣）が同州太平の住持であり、或時地方官が思ひ懸け無い事を以て援亂させたッコで靈源禪師は太平の住持が五月蠅なりしと見て、先師佛眼許へ遣る書翰に曰ふやう、志を直うして道を行ふと思ふべけれども、大抵世の情は枉れるを好て直を惡

ひからドウモ行ふことが仕難い、左りとて道を枉げて懇々として住持するのは、誠に我が本志に違ふ譯である、夫よりは意を千巖萬壑なる無塵廣闊の間に放縱にして、日に山中の馳走に飽て以て餘命を全うせむこそ愛に勝れたれ、復た何ぞ惓惓と太平の住持たるを慕ふて心配せうぞやとの文言であつた。サテ夫より十日も經ない內に其の師の黃龍晦堂老漢より繼席すべきの命の有りしかば、乃ち靈源は其の機會に乘じて黃龍所在の江西へ歸錫せられきとぞ。（聽首座記聞は、晦堂の孫にして晦翁の子なる叢林聽首座の自ら見聞を錄記せしものなり。）

雪堂曰。靈源好比類納子。曰。古人有言。爲土木偶人者。耳鼻先欲大。口目先欲小。此言雖小。可以喩大。夫爲土木偶人。而耳鼻先小。口目先大。人或非之。不可改也。耳鼻大則可以小。口目小則可以大。學者臨事取捨。亦宜如是。不厭三思。可以爲忠厚之人也。（記聞）

△大意、學者、事を取捨せむには、宜しく三思して行ふべきを明す。

（字釋）土木偶人は土を用て人の形體に擬造するを土偶人といひ、（本文土の字ありて文意通ト謂し、故に□を脫して其の所なるを示す、猶ほ後に之を辨ず、）木を用てするを木偶人と云ふ、偶とは偶類とて其の形象に似たるの謂なり、史記孟嘗君傳に「蘇代謂て曰く今日外より來る、木偶人と土偶

人と相與に語るを見る」索隱に「偶音遇、土木を以て之を爲るに人に偶類するを謂ふ也」又前漢書公孫賀傳、註に「師古云、木を刻して人と爲し人の形に象る、之を偶人と謂ふ（謂ふ偶人なり木偶は並なり對なり）」とあり、◎此言雖小云云史記李將軍傳、太史公贊續文章軌範司馬相如諫獵書並に此の八字見えたり、但し喻を諭に作る◎三思は再三再四思慮を廻らすを云ふ、即ち念に念を入れ注意に注意を加ふるの義なり。

（講解）雪堂和尚の仰せに、靈源清和尚は善く近く比類を取て喻子を接化せらるゝことを好れた其の申されやうに、古人言へることが有る、因木にて人形を爲くらうとする者は、其の着手の時に耳と鼻とを先づ大きくせうと思ひ、口と目とを先づ小さくせうと思ふが宜いと、此の言は些小なる人形造りの上の事なれども、コレで至大なる道理の上に喩へて違つた事は無い。扨て因木偶人を爲つて而も右に反して、耳と鼻とが先づ小さく口と目とが先づ大きくならむに、人の或は之が不釣合なるを非難しても、到底改め直すことが出來ない、ナゼと云ふに耳と鼻との大き過ぐるときは外を削り除けて小さうすべけれども、其の物の先づ小さきときは之を大きう出來ないからである、又口と目との小さうあるときは中を割り取て大きうすべけれども、其の物の先づ大きいときは之を小さう出來ない

からである。サテ學者が事に臨で大小取捨せむにも、亦是の通りにするが宜いぞ、何でも取り返しの出來ない事は、幾度となく前以て注意を厭はねば、コレで忠實篤厚の人と爲られるのじゃ。

私に案するに、本篇爲土木偶人といひて其の說く所の如きは唯木偶人のみ、故に土の字を削らざれば反て文意を害するに似たり、何となれば土偶人を爲らひに先づ其の耳鼻口目の大小如何は全く木偶人と異なればなり、且つ頭書所引の韓非子說林篇の文の如きも亦木偶人の事たり、今藏本を檢するに土木偶人を併載す、其の說甚だ明けし、當に藏本を以て正とすべし、依て其の全文を左に揭げつ。

雪堂曰。靈源好比類喻子。曰。古人有言。譬爲土木偶人。相似。爲木偶人。耳鼻先欲大。口目先欲小。人或非之。耳鼻大可以小。口自小可以大。爲土偶人。耳鼻先欲小。口目先欲大。人或非之。耳鼻小可以大。口目大可以小。夫此言雖小。可以喻大矣。學者臨事取捨。不厭三思。可以爲忠厚之人也。聞

雪堂曰。萬菴送高菴過天台回。謂予言。有德貫首座。隱景星巖三十載。影不出山。龍學耿公爲郡。特以瑞巖迎之。貫辭以偈。曰。三十年來獨掩關。使符那得到青山。休將麟末人間事。換我一生林下

閑。使命再至。終不就。耿公嘆曰。今日隱山之流也。萬菴曰。彼有老宿能記其語者。乃曰。不體道本。沒溺死生。觸境生心。隨情動念。狼心狐意。諂行誑人。附勢阿容。徇名苟利。乖眞逐妄。背覺合塵。林下道人終不爲也。予曰。買亦僧中間氣也。

△大意、古人長養の日は、容易に用を發せざるを明す。

(字釋)萬菴は江州東林、萬菴道顔禪師なり、法を大慧宗杲に嗣ぐ、師は高菴及び雪堂の法姪たり、即ち上の圖の如し景星巖は一統志四十七、台州府下に景星巖を載せず、而して太平巖、摘星巖、壽星巖等あり蓋し、此等の中を云ふ乎。◎影は猶は身のごとし、◎使符使は、使命の使にて去聲なり、使人は命ぜられたる口上を申し入るる者なり故に之を使命と云ふ 符はワリフと訓す漢の制に竹の長さ六寸のものを以て中より兩邊に分ち右は君上の許に留め左は臣下に與へ疑はしきことある時は兩邊相合して其の虛實を證するものとす、即ち符信是なり、後世詐僞百出し竹は得易き物にして之を防ぎ難きに因り、銅鐵金銀玉等を以て物象を鑄造し文字を篆刻して容易に僞造の出來ぬやうにして之を用ふる事となれり、其の品は時代に因りて異なれども其の用法は一なり、前漢書文帝紀に「初て郡守に與へて銅虎符竹使符を爲らしむ」師古、註に「郡守に與へて符を爲らしむとは、謂く各其の半を分て

右は京師に留め左は以て之に與ふ」とあり、此に謂ゆる使符は郡守耿公を指すなり、或は云ふ借て郡守の使命と爲す、◎類は音鎖、說文に「小麥屑の麤」麤は恨碣切、麤ノ麤と同ト、ムギノ、の破れざるもの 玉篇に「麄麥の屑」とあり、但し藏本には麤に作る、麤は麤に同じ、麤のクダ〳〵しきなり、◎隱山は一に龍山と稱す、一統志六十三、長沙府山川部に「龍山は湘鄉縣の西百十里に在り、山頂に龍湫あり山下に池あり、世に傳ふ龍神の居る所と、故に一名は龍王山、唐の開元中僧あり洞山和尚价入て茅菴を見る、老僧出でゝ問難すること久し、頭書に明日老僧其の菴を燒て遁れ去る、詩を石壁に留めて云く、三間茅屋從來住、一道神光萬境閑、莫作是非來辯我、浮生穿鑿不相關、と、故に隱山と名く」とあり、◎狼心狼の性は貪なり、故に狼貪と連用す、音義に「多く物を貪り害するを狼と曰ふ」左傳昭公二十八年傳に「狼子は野心あり」の語あり、◎狐意、狐は猜疑多し、故に狐疑と熟字せり、說文に「狐は妖獸なり性淫にして疑ひ多し、河を渡る毎に必ず氷の聲なきを待て乃ち渡る」とあり、◎間氣は不世出の義にて世間常に此人を生み出さゞるを謂ふ、音義に不世にして出るを間氣と曰ふ、伊尹周公の類の如し、又謂ふは出格の人、世と干ること無きを也」とあり、又佛祖統紀六に「間生の聖人」とあるも語勢相同じ。

(講解)雪堂和尚の仰せに、我が法姪の萬菴道顔が其の法叔に當る我が高菴師兄

の雲居を退き行くを見送り天台山を過ぎて同つた（高菴雲居を退き天台を過る時の事は上卷師の條下に出づ）時に萬菴予に謂て言ふには彼の地に德貫首座と申す高德がある、台州地の景星巖に隱れて聖胎長養すること已に三十年なるが其の身未だ曾て其の山を出ない、適龍學耿公（耿延禧を云ふ、百十一頁に詳なり）が台州の邵改を支配して居たので特に請して同地の瑞巖寺へ迎へひとした、然るに貫首座辭するに一偈を以てして云ふ、我れ三十年來此の景星巖に隱れて獨深く關門を掩ひ世を謝絶して居る、ソレに使符が那とて斯の別天地の青山に到ることを得るぞ、類末とて小麥糟の如きコザ〳〵敗い人間の事を將て、我が生涯遊優として林下の閑日月を樂むに取換させ禁とすることは休めて呉れよとの言句を以てした、其の後も使者が命を帶びて兩三度至つたなれども終ぞ就任せなかつた、ソコで耿公は嘆美して像末の今日隱山和尚の流なりと云つたとの事じや、萬菴重ねて予に云ふやう、彼の地方に一老宿の能く貫首座の言句を記憶し居る者が有つて乃ち曰ふ、斯道の本源をばッック！我物にし得せねば永く生死の海に沒溺して浮ぶ瀕がない、且つ外境に觸れて取捨の心を生じ情欲に隨つて人我の念を動かし、狼の如くに貪り害し狐の如くに惡る疑を爲し、諂曲の行もて人を誑かし勢位の人に附て己を曲げ道の害たる名

聞に徇ひ德の賊たる利養を苟め（苟の字和刊本に苟に作るは誤刊なり）、無漏の眞智に乖て有漏の妄業を逐ひ、本有の覺照に背て煩惱の汚塵に合す、此の如き事は叢林門下の道人は、如何なる境遇に迫るとも終に爲すまじきじやと。予（雪堂自ら稱す）此の言を聞いて、貫首座も亦僧中の閒氣なりと云つた、閒氣とは閒生の哲人と云ふ事で卽ち出格の人を云ふのである。（過事は旦過なり。）

雪堂生富貴之室。無驕倨之態。處卵節儉。雅不事物。住烏巨山。有獻鐵鏡者。雪堂曰。溪流清泚。毛髮可鑑。蓄此何爲。終却之。（行實）

△大意、古人、外物を以て懷と爲さいることを明す。

（字釋）富貴は財足るを富といひ位尊きを貴といふ、普燈錄十六に「雪堂の父仲諶（見獨居士にて前に出づ、二千石は太守の官にて今の千石とある、卽ち地方の長官なり、書官故事に「太守秩二千石」とあり、仲諶は知事に當る）に任す云云」とあり。驕倨は本勝義八十三頁に釋あり。◎雅はッチニ又モトと訓す常也素也と註して平素平日の義とす、又マサコと訓じて正也との註あり。◎鏡は景を取るの器なり、漢書に「清水明鏡は形を以て逃る可らず」とあり。◎泚は音此、スムともキヨシとも訓す字書に「水の清ひ也」とあり。◎鑑は物を照らし見るを云ふ、淮南子に「人、泳雨に鑑みること莫く澄水に鑑る」とあり。

（講解）雪堂和尚は富貴の室に生立つたなれども、驕り高ぶるやうの樣態は聊かも無い、其の躬を處理することは至極節儉であつて、平素外物を事とし愛せられぬ、嘗て衢州府下の烏巨山に住して居られし時、或る劇子の見事なる鐵鏡を獻上する者のありしかば、雪堂和尚の仰せに、鏡は形を照らす所以のもので人自ら見るに短きものなれば、必ず之を假つて其の妍醜を知るの用あるべけれども、予に於ては溪流れの能く清冽たる天然の寶鏡があるから、毛髮はチヤンと夫れにて明かに鑑みることの出來るであるゾレに斯樣な鐵鏡を置へ置て何にか爲さむ、やとて、終に之を受付られずとなり。（行實は雪堂行實なり。）

雪堂。仁慈忠恕。尊賢敬能。戲咲俚言。罕出于口。無峻阻不暴怒。至於去就之際。極爲介潔。嘗曰。古人學道。於外物澹然。無所嗜好。以至忘勢位。去聲色。似不勉而能。今之學者。做盡伎倆。終不奈何。其故何哉。志不堅。事不一。把作匹似閑耳。（行實）

△大意　古人、鄭重純眞にして外緣に渉らざるを明す。

（字釋）忠恕は本心を傾け盡して推し廣めて物に及ぼすを云ふ、音義に「己を盡す之を忠と謂ひ、人に譲る之を恕と謂ふ」とあり、◎介潔は清介廉潔なり、所守の節堅

正にして移らざるを介と云ふ、◎澹然は恬靜無爲の貌、◎伎倆は智慮を盡して計較を區々にすることを云ふ伎は藝なり倆は巧なり、音義に「能巧多藝なるを伎倆と曰ふ」とあり、◎把は トル と訓ず此の字の本義は手に握り持つことなれども此には俗に云ふ十束一把の意に見るべし、◎匹似閑は事義に「是れ方語、猶は沒緊要指す、沒緊要といひ不要緊と云ふ何れも緊要ならざるの義、」とあり、方語とは其の國地方の俗語なり、此には淡土を四似とは彼此相匹べて似るなり閑とはムダと訓して物の用に立たざるなり、言ふは閑事に匹似となり、碧巖不二抄に「猶は閑に等しと言ふが如し」とあり。

（講解）雪堂和尚は仁愛慈悲に能く思ひ遣りが有つて、賢人を尊び能者を敬はれた、常に戲れの咲や俚しい言の葉は口より出されたことは罕にや、左ればとて人を待するに語氣の峻阻して角立つことなく、手荒く怒らるゝやうな事もない、殊に進退去就の際に至つては、極めて介潔とサッパリした處置を致された、嘗て仰せらるゝやう、古人の學道に在ては、外物一切に於て澹然無欲で、是れぞと嗜好する所は無い、其の他權勢名位を忘れ六塵諸法を去る等に至るまで、故々勉めて能すると云ふのでなく、天然に能く出來て行たものである、今の學者は之に反して伎

倆才覺のあらむ限りを做し盡しても、終に奈何とも成し得せぬである、其の故何した事であらうかと云ふに、今の學者は志操が堅固ならず行事が純一ならで幾等數多く伎倆を盡したとて一把に役にも立たぬ閑事を作す耳の事であるからじやとなり。

雪堂曰。死心住雲巖。室中好怒罵。衲子皆望崖而退。方侍者曰。夫爲善知識。行佛祖之道。號令人天。當視學者如赤子。今不能施慘怛之憂。垂撫循之恩。用中和之教。奈何如仇讎。見則詬罵。豈善知識用心乎。死心拽杖趁之曰。爾見解如此。他日諂奉勢位。苟媚權豪。賤賣佛法。欺罔聾俗。定矣。予不忍故以重言激之。安有他哉。欲其知耻改過。懷慕不忘。異日做好人耳。（聽首座記聞）

△大意、古人格外の示衆は、唐流の及ぶ可きに非るを明す。

（字釋）望崖而退、此四字は傳心法要卷上に見ゆ崖はキリキシと訓ず高岸峻き處を云ふ。◎方侍者は吉州禾山の超宗惠方禪師なり、法を黃龍死心悟新に嗣ぐ、◎慘怛は共にイタムと訓ず、音義に「慈悲の容、惻隱の貌」前漢書元帝紀に「民に菜色あり心に慘怛す」師古、註に「慘は痛色怛は悼也」文選宋玉風賦に「中心慘怛す」善、註に「憂勞也」又禮記表記、中に「心に憯怛するは人を愛するの仁なり」の語あり、憯は慘と同字とす、◎撫循は音義に「上は安なり下は順なり、乃ち尊を屈して卑に就くの義也」前漢書蓋寬饒、傳に「疾病の者あれば身自ら撫循臨問す」とあり、◎中和は理として偏頗なく事として緩急なきを云ふ、又性の具する所を中と云ひ性に率ふの道を和と云ふ、是れ中庸に謂ゆる中和なり、◎詬は音后、怒なり又詈なり、◎拄杖は梵に刺闍節又糯竭節と云ふ、此に譯して杖と云ふ、毘奈耶に「佛拄杖を蓄ふることを聽す、二因緣あり一には老瘦無力の爲め二には病苦嬰身の爲めの故に」とあり、（要略道具類、器物類の資身器具に詳出せり）、◎趁は逐なり、◎權豪は音義に「位に當て勢あるを權と曰ひ財力俱に勝るを豪と曰ふ」とあり、◎罔は無なり、◎激は、ハゲマスと訓ず、水の石に觸れ當りて頓に波の生ずるを云ふ、孟子告子、上篇に「今夫れ水搏て之を躍らせば顙を過さしむ可し激して之を行らば山にも在らしむ可し云云」の如き是なり、夫より人に腹を立たせて精を出さする意にて激勵などゝ連用す。

（講解）雪堂和尚の仰せに、死心悟新禪師が（雪堂祖心の法嗣、二百四十九頁に出ぜす、）潭州の雲巖寺に住しつゝ、其の室內好で衲子を怒り罵られた、如何にも惡辣手段が甚しいのである、ソコで衲子は皆その僅に崖畔の峻しきを望み見て得攀ぢ登らずに退くので、是れ

は死心老漢が家風の高きを見て其の心底を得探る者の無い事を申したのである。或時に侍者の惠方と云ふのが老漢に云ひけるやう、夫れ善知識と爲つては佛祖の妙道を流行して人間天衆に號令するのである、左れば當に學者を視ること慈母の赤子を愛するが如くすべき筈よ、ソレに今老師は慘怛と痛悼の憂心を施し、撫循と撫で安ずるの恩惠を垂れ、中道和悅の敎誨を用ひられし、奈何ぞ仇讎者の寃を懷いて報ゆるが如くにして寬大の所置といふものなく、大衆を見るときは詬り罵ることを致さるゝ、コレが豈とて善知識の用心であらうぞやとて、其の惡辣の餘りに甚しきをお諫め申した。然るに死心老漢は拄杖を拽摺出して方僧を趁ふて云はるゝに、爾が見解此の如きである、他日勢位の門に諂ひ仕へて權豪の家に媚び苟め、無價の佛法を安賣して聖同然の俗物を欺き罔することは必定である。予斯る有樣を見るに忍びぬので、故と嚴重なる言語を以て其の志を激發させるのじや、安して他に惡意が有つて然うしやうぞや、唯、學者の其の之に由て恥辱を知り過失を改め、之を懷ひ慕ふて忘却せぬやうにして、異日好人物と做さうと欲するのみの事じやとて、嚴しく叱り付けられさとぞ。

死心新和尙曰。秀圓通嘗言。自不能正。而欲正他人者。謂之失德。自不能恭。而欲恭他人者。謂之悖禮。夫爲善知識。失德悖禮。將何以垂範後乎。與三聖源一雲

△大意、己れに有して而して後に人に求むる底の親切を明す。

（字釋）秀圓通は汴梁法雲寺の圓通法秀禪師なり、法を天衣義懷に嗣ぐ、◎悖は音孛、モトルと訓す、字書に「亂也逆也又戾也」と註す、戾逆の義にて强く反對になりて逆ふことなり。

（講解）晦堂の法嗣なる死心悟新和尙の仰せに、圓通法秀禪師が嘗て申された事がある、躬自ら己が心を正し直うすることの出來ずして他人の曲邪を直うさせむと欲する者、之をば本有の道德を取り失ふと云ふものである、躬自ら己が身を肅み恭うすることの出來ずして、他人の行儀を恭うさせむと思ふ者、之をば天性の禮法に悖り逆ふと云ふものである、以下死心の言句　扨て身曰に能化の善知識と爲つて居ながら、若し過て斯樣に道德を失ひ禮法に悖る事あらば、將何の手段を以てか法範を後世に垂れらりやうか、垂るゝことは出來まいとなり。與三聖源一雲は死心和尙より同門の靈源惟清禪師に與ふる所の書なり。

死心謂陳瑩中曰。欲求大道。先正其心。少有忿疐。音帝。礙也。則不得其

正少有嗜欲亦不得其正然自非聖賢應世安得無愛惡喜怒直須不置之於前以害其正是爲得矣。廣錄

△大意、學者道に入らむと要せば、先づ須らく其の心を正しくすべきを明す。

（字釋）忿懥は音義に『下は本と懥の字に作る、上は怒の甚しきなり、下は怒の帶なり』とあり、和刊本に懥を疐の字の如く作りたれども、本文の註に音帝とあれば定めて懥の字の誤刊なるべし、左れども懥はハナヒルと云ふ字なれば義に於て通じ難し、蓋し懥に又致の音あれば懥の字に通はせて用ひたるもの乎、藏本には忿懥に作りて『音帝氣也』の註なし、殊に本文、大學の語勢より出たれば當に藏本の如くするを是とすべし。忿懥は共にイカルと訓す、忿は荒ら腹を立つることにて、懥は怒りすねることなり、大學朱註に『忿懥は怒也』とある是なり。

（講解）死心新和尚が延平の陳瑩中陳瑩字は瑩中、百四十七頁に出づに謂て申さるゝやう、無上の大道を求めむと欲せば、其の能求の主なる本心を歪まぬやうにせよ、逆境に觸れて少しにても忿怒の氣色あるときは、早や忿懥の爲めに累はされて、心の用その正しきことを遂げ得られぬ、順境に緣て少しにても嗜好の慾念あるといふと、亦嗜慾の爲めに惱まされて、心の用その正しきことを遂げ得られぬものじや。去りながら聖賢とて佛祖などの出世應化し玉ふに於ては兎もあれ、苟も斯樣な聖賢

に非るよりは、安してマア心一偏に愛したり惡むだり喜むだり怒つたりすることの無くする事が出來やうや、唯順逆の二境に於て斯る愛惡喜怒の妄念が一寸でも起つた時には、其の儘取擧げぬやう滯直に須らく之を面前卽ち下に打遣つて置いて、そして本有の心正を害せぬ樣にせねば叶はぬぞ、是をば眞に得策と爲すのである。

死心曰。節儉放下。最爲人道捷徑。多見學者。心憤憤口悱悱。誰不欲繼踵古人。及觀其放下節儉。萬中無一。恰似庶俗之家子弟。不肯讀書。要做官人。雖三尺孺子。知其必不能爲也。廣錄

△大意、人道の要は節儉放下に在ることを明す。

（字釋）節儉放下は順硃に『節儉心現前すれば、貪求心自然に放下す』とあり放下とは下に置きて心頭に着けざるの義なり、趙州が一物不將來の答へに放下着せよ、又云放不下ならば擔荷し去れなどの如し。◎捷徑は路の小くして近き者を云ふ、捷は疾なり旁出を捷と爲す、徑は細道なり、◎憤悱憤は學を勤むること歲月久しけれども、其の心に會得し難きを無念なる事かなと憤るを云ふ、悱は斯くと心得て口に乘せて爽かに言ひ解くことを得ず口を捫る許りにするを云ふ、論語述而

篤、朱註に「憤は心に通せむことを求めて未だ得ざるの意悱は口に言はむと欲して未だ能はざるの貌」とあり、◎繼踵、踵はキビスと訓す、跡なり、前漢書公孫弘傳に『公孫賀劉屈氂踵を繼で丞相と爲る』師古、註に『踵を繼ぐとは言ふは相躡む也』とあり、◎三尺は七歳以下を云ふ、五尺の童子といへば十二三歳なり、是れ成人を丈夫とか丈人とか云へるより起りたるものにて周尺に就て云へり、周尺には種々の說あれども先づ其の一尺は我が六寸餘と心得べし、◎孺子は幼少の稱、孺はイトケナシと訓す、此の字需に從ひ子に從ふ、需は物を求むる義なれば、孱弱子供の父母を慕ひ需むる意あり。

（講解）死心和尚の仰せに、節儉として何事も約かにせば心自ら麁動せず、放下として何事も取合はねば心自ら執着せず、斯の心の麁動せぬと執着せぬとの二ッは之が最も大道に這入るべき捷徑である、多く今の學者を見るに、心憤々と悱りを發し口悱々と言ひ得ぬ迄に精神を込入れて勢ひ能く修行して、孰れか古人の踵を躡まむことを欲せぬであらうぞや、而して古人が境界に得至らぬのは外では無い、其の捷徑なる放下節儉を覩るに及では、萬人が中に一人も無い程であるからとや、ソレでは丁度庶俗として無位無官の家の子弟が背て書物を讀むことを合點せずして、官人と做らむことを要むるやうなものぞ、斯くては六ッ七ッの孺子も其の必ず爲すことの出來ましきを知るである。左れば官人たらむことを欲せば先づ書を讀み事を辨へ置かねばならず、踵を故人に繼がむことを欲せば節儉放下の捷徑より入らねばならぬものにこそ。

死心謂湛堂曰。學者有才識忠信節義者上也。其才雖不高。謹而有量者次也。其或懷邪觀望。隨勢改易。此眞小人也。若置之於人前。必壞叢林。而汚瀆法門也。（寶錄）

△大意、學者の三根を擧げ以て後昆を曉すことを明す。

（字釋）量はハカルと訓す、桝目の義より轉じて廣く物を受け入るゝ程を云ふ、嚴先生祠堂記に『光武の量は天地の外を包たり』とあるが如き是なり、尙は本講義百方進傳に『且つ以て觀望す云云』師古、註に『言ふは漸くに天人心を試む』とあり、△死心の湛堂に於ける從兄弟（父母同胞の子）たり、卽ち上圖に示すが如し。

黃龍惠南
- 晦堂—死心　五十二頁を參見すべし。
- 眞淨—湛堂　下の人心を試む

（講解）死心和尚が泐潭の湛堂文準禪師に謂て申さるゝやう、學者に在て才學見

誠や忠誠信實や節操義氣ある者は上根である、其の才學は高尚ならずとも能く氣を付けて度量ある者は其の次である、サテ其の或は邪心を懷いて世間を觀望し、勝敗の勢に隨つて其の心を改め易ふるが如きは此れ眞の小人じや、若し斯る小人を以て之を人前即ち世間へ出して一寺の主とせば、必ず大切な叢林を壞つて貴重な法門を汚し瀆すことを致すものぞとなり。

死心謂二草堂一曰。凡住持之職。發言行事。要在二誠信一。言誠而信。所感必深。言不二誠信一。所感必淺。不誠之言。不信之事。雖平居庶俗。猶不忍行。恐見欺于鄉黨。況爲叢林主。代佛祖宣化。發言行事。苟無誠信。則湖海衲子。孰相從焉。（黃龍實錄）

△大意、凡そ學者の感服することは、主者が言行の誠信に由るを明す。

（字釋）鄉黨は邑の仲間と云ふに同じ、萬二千五百家を鄉と爲し五百家を黨と爲すことと漢土の古制なり、又鄉は管子に「五家を軌と爲し六軌を邑と爲し十邑を率と爲し十率を鄉と爲す」とあるは三千家なり、鶡冠子に「五家を伍と爲し十伍を里と爲し四里を酮と爲し十酮を鄉と爲す」とあるは二千家なり、又黨は周禮疏に「五家を比と爲し五比を閭と爲し五閭を族と爲し五族を黨と爲す」とあるは六百二十五家なり、其の鄉は字書に「向なり衆の向ふ所なり」とあれば人の寄り集る處にして邑を總べたる大括の名なり、黨は論語に「宗族に孝を稱し鄉黨に弟を稱す」と云ふの文意を察すれば唯邑里の人を黨と云ふ乎、鄉黨は必ずしも其の戶數に拘らず、近鄉近在の意に見るべし。

（講解）死心和尙が同門の草堂善清禪師に謂て申さるゝやう、全體住持の職分としては、一言を發し一事を行ずる上に於て、其の肝要とすべきは僞りなきの誠實ふことなきの信に在るよ、故に言語誠にして信あるときは學人の感服する所が屹度深い、即ち心底より有り難く思ふのである、之に反して言語が誠信なら無ければ、其の感ずる所が屹度淺い、即ち上面許りで吹けば失せる樣なものである。サテ誠の無い、言語や信の無い事業は、平居庶俗の者と云ふても猶は之を行ふに忍ばれ無い、之を行へば恐くは其の鄉黨に欺かれるでおらう、然るを況てや叢林の主と爲つて佛陀祖師方に成代つて遍く敎化を宣說せひとする者に於ては猶更の事よ、故に前にも云ふ通り一事を發し一事を行ずるに苟にも誠信ないときは湖海の衲子孰れか相從ひ付くであらうぞ、皆嫌がつて歸服せぬことなり。

死心曰。求利者不可與道。求道者不可與利。古人非不能兼之。蓋其勢不可也。使利與道兼行。則商賈屠沽閭閻負販之者。皆能求之矣。何必古人棄富貴忘功名。灰心泯智。於空山大澤之中。澗飲

木食。而終其身哉。必謂利與道行之不相違礙。譬如捧漏巵而灌焦釜。則終莫能漑濟矣。（與韓子蒼書）

△大意、辭利道德の二者は水火の器を同くせざるが如くなるを明す。

（字釋）商賈は共にアキナフと訓す。商は行商にて四方に物を通じて賣り行くを云ふ、賈は音古、坐販にて住所を定めて坐ら賣り販ぐを云ふ。◎屠沽屠はホフルと訓す、牛や豕を殺して肉を割くを云ふ、沽はウルと訓す酒を賣るを云ふ。◎閭閻は里巷の門なり、此には猶は閭巷といへるが如く賤者の居住する所を言ふ。◎負販はオヒヒサグと訓す、物を背に負ふて賣り歩く者を云ふ、負は擔荷なり、販は賤く買ふて貴く賣るなり。◎灰心泯智は自己の主人公寂然として千思萬慮の波浪起らざるを云ふ、灰心は莊子齊物論に謂ゆる「心、死灰の如し云云」より出たる字なり、死灰とは冷灰にて毛頭も煙焔なきの義にして即ち心起らざるに譬ふ、無盡永安院僧堂記に「古の學道の士灰心泯智云云」の語あり。◎漏巵は底のぬけたる酒器なり、四升を受くるを巵と云ふ四升は我が四合はどなり、淮南子氾論訓に「江河漏巵を實ること能はず」とあり。◎漑濟藏本に漑の字なし。

（講解）死心和尚の仰せに、凡そ利を專ら求ひる者には道を與に求ひることはいけぬ、道を純ら求むる者には利を求ひることはいけぬ、畢竟すれば兩方を一ッに求むることの出來難いのである、サテ古人は斯の道と利との二ッを兼ね求むることを得せぬといふのでは無いが、蓋し道と利とは水火の器を同うせざるが如きもので、到底其の勢の兼ね行ふことの不可なるからである。若し利と道とを兼ね行はせることの出來るものとするときは、第一利を爭ふ所の彼の商賈や飲食店や閭閻の小人や負ひ販ぐ小商人の徒輩の如きも皆能く道を求むることを得る譯となるじや、なぜで古聖人が道を求めひが爲めに、富貴の身を棄て功名の分を忘れ、心を死灰にし智を泯滅して、空山大澤の中に於て澗水を飲み木實を食ひ千辛萬苦して其の身を終ることを致されやうぞや。必ず利と道とを兼ね行ふて雙方にも遮背障礙せないと謂ふならば、譬へば水の漏れる些細な巵を捧げて焦付く大釜へ水を灌ぎ入れむとするやうなもので、幾等精出しても終に能く水を漑ぎ入れて之を濟ふことは出來ないのである。（與韓子蒼書は死心和尚より宋朝仙經の韓駒字は子蒼といへるに與ふる所の書なり、子蒼は仕へて尚書の官に至る道を山堂道藏禪師に問ふ。）

死心曰。晦堂先師。昔遊東吳。見圓照赴淨慈請。蘇杭道俗。爭之不已。一曰。此我師也。汝何奪之。一曰。今我師也。汝何有焉。（林間錄）

△大意、古人道德の人を感ずること、寔に赤子の慈母に於けるが如きを明す。

（講解）死心和尚の仰せに、我が晦堂先師が昔し蘇州の東吳に遊方して、圓照宗本禪師の（師は密州無錫宿氏の子、法を天衣義懷禪師に嗣ぐ、師が蘇杭道俗の爲めに仰慕せられし事は頭書に出せるをもて今此に贅せず）蘇州より杭州南屏山淨慈寺の請待に赴くのを見られた、サテ此の圓照禪師は有德の衲子で道俗の之を思慕すること大旱の雲霓に於けると一般であつたから、ソコで蘇州杭州の道俗が取らう還らじと互に之を爭ふて已ま無い、一方蘇州の者は已に此れ我が師である、汝等何とて之を奪ひ取らひとするやといへば、又一方杭州の者は師を借ること三年せむとて其の承諾を得れば、今現に我が師である、汝等何とて之を專有し得ひやといひて、何れも其の德を慕ひしこと右の有樣でありきとなり。（一本見林間錄とあれど、今我れに傳ふる林間錄には此の記事を載せず、林間錄に異本ありやと云ひしが是れ亦其の類乎。）

死心住翠巖、聞覺範鼠逐海外、道過南昌、邀歸山中、迎待連日、厚禮津送。或謂死心喜怒不常。死心曰、覺範有德、衲子鄉者極言去其圭角、今羅橫逆、是其素分、予以平日叢林道義處之、識者謂死心無私於人、故如此。（西山記聞）

△大意、古人有道の士を尊び寵益も私心なきを明す。

（字釋）鄉者は先時を指し云ふ辭なり、鄉は向嚮の字に同じ、前漢書張耳傳贊、鄉者、註に「鄉讀で嚮と曰ふ嚮は曩昔を謂ふ也」とあり、者は指す辭にて曩日を曩者と云ふが如し。◎圭角はタマノカドと訓ず、圭は上の三角に尖りたる玉なり、禮記儒行、註疏に「方を毀て瓦合すとは、方は謂く物の方正にして圭角鋒鋩あるなり、瓦合は謂く瓦器破て相合ふなり、言ふは儒者、身方正なりと雖も、己が方を毀屈して天下瓦細に同じきこと、圭角を破り去て瓦器と相合ふが如きなり」楊龜山、言に「物圭角おれば多く人の眼目を刺し亦玷缺し易し、故に君子の世に處るは、當に渾然天成なるべし、然るときは人厭忌せず」とあり。

（講解）死心和尚南昌府下洪州の翠巖に住して居た、適覺範洪禪師が（師は眞淨克文の法嗣なり、死心の師に於ける從兄弟たり、師が寂逐の事は本講義二百七十一頁に見ゆ、）海外即ち外國へ放逐せられて道南昌府を通る趣を聞かれつ、依て其の道筋へ出で遮へて翠巖の山內へ遠れ歸り、待遇すること二三日に及び遂に臨儀の禮を手厚うして渡場まで送り遣られた、或人の聞ふやう、死心和尚は平生覺範の事を惡く言ひ居るに今迎待禮を盡すは、是れ喜怒常ならずとて之を非難しげれば、（死心の曰て覺範を焉るは怒なり、今迎待の厚きは喜なり、是れ喜怒の一に居らざるを言ふ、）死心の仰せに覺範は有德の衲子である、鄉きに痛く惡口雜言したのは、彼を抑へて其

の圭角あるのを去らせ以て禍を免れしめむが爲めである、今彼が無理非道なる流罪に罹ることは、時の非運とは云ふものゝ是れ其の圭角なる性質の自ら招く所の素分で、致方のないものと見ゐる、予今日に至つて斯く待遇せしも平日叢林の道義宗盟を以て之に處置したので、何とて喜怒の心あらむやとぞ申されける。ソコで世の識者は謂へり、死心和尚は人に對して一點の私といふものが無い、ソレじやから右の如き次第であるとて、其の行ひ方の清々しきを稱揚したりきとぞ。

死心謂草堂曰。晦堂先師言。人之寬厚。得於天性。若強之以猛。必不悠久。猛而不久。則返爲小人侮慢。然邪正善惡。亦得於天性。皆不可移。惟中人之性。易上易下。可從而化之。（寶錄）

△大意、上智と下愚とは、移さゞるの意を明す。

（講解）死心和尚、同門の草堂善清禪師に謂て申さるゝやう、晦堂先師の言に、人の心の寬大として物事に手厚のは天性に得たるものじや若し斯る寬厚な生れ付の者に強に勸めて猛き事を令せ樣としても、汗は必ず悠久持ち負ふせることが出來ぬ、猛き事をさせて久しく出來ぬときは、返て小人の爲めに侮り慢らるゝ事

となると。（以下死心の語）左りながら邪正といひ善惡といふも亦天性に得たもので、皆容易に移し易へることの出來難いが、唯中人の性は上智と爲し易く又下愚とも爲し易い、其の性に從ふて之を敎化せらるべき事である。（季而謂く此れ亦人に因て施すの說なり、一闡提を除き、能く化す可らざるの人あらむや、昔し天魔百計を以て世尊を惱亂す、世尊軟硬二種の語を以て之を敎化す云云）（愚私に案ずるに、晦堂の言は孟子を主とす猶ほ可なり、死心之に附語するに極雄以下廣闊の妄言を以てす、甚だ怪むべきなり、天稟資性に善惡混合する抔さは假りに善方便の除に出づるとするも、愚再び本篇を讀むに忍び難き、併せて死心の道價を損する無きを得むや、世の遠人幸くは道の爲めに人の爲めに敢て此の一篇を削る如何、姑らく記して之を問ふ。）

草堂清和尚曰。燎原之火。生於熒熒。懷山之水。漏於涓涓。夫水之微也。捧土可塞。及其盛也。漂木石沒丘陵。火之微也。勺水可滅。及其盛也。焦都邑燔山林。與夫愛溺之水。瞋恚之火。曷常異乎。古之人治其心也。防其念之未生。情之未起。所以用力甚微。收功甚大。及其情性相亂。愛惡交攻。自則傷其生。他則傷其人。殆乎危矣。不可救也。（興二韓子書二書）

△大意、大修行底の人は、第二念なきの大要を明す。

（字釋）熒熒は小火の貌、音營又螢なり、◎懷はカヌと訓ず、包と同義にて包み括り

て殘さぬ意なり、藏本に壞に作る、壞は崩敗の義なれば文意通せざるに非ざれども、此文本と宋朝文鑑に出たる語にて同書に懷に作りたれば宜しく懷を以て正とすべし、◎丘陵は共にチカと訓ず、丘は地の段を爲して高く上りて其の上の平なるを云ひ、陵は大阜とて即ち阜の大なるものを云ふ、阜は丘の如くに段を爲さず、爪先上りに高くなりて上の平なるをいふ、◎勺はクムと訓ず、手を窪めて之を受るを言ふなり、◎愛溺之水は楞嚴卷八に諸の愛染に因て妄情を發起す、情積で休まざれば能く愛水を生ず」又涅槃經に愛河洄渡して衆生を沒す」とあり、◎瞋恚之火は大莊嚴論に「身は乾薪の如く瞋恚は火の如し未だ能く他を燒かず先づ自ら身を焦す」とあり、◎攻は元來城を攻め討つことなり、夫より轉じて心性の上に用ふ、◎殆乎危矣は殆危共にホトムドとも訓ず、故に殆乎危矣と讀ひも亦可なり。

（講解）晦堂祖心の嗣なる草堂善清和尚の仰せに廣い野原を燒き盡す位の火も、其の初めは熒々と些細な螢火より起るのである、高い山岳を引つ懷む程の水も、其の初めは涓々と流れ出たる小水より漏るゝのである、以上、欲レ原云云より涓涓至るの十六字は、宋朝文鑑卷四十八司馬光が五規を進むる狀中の語なり、扨て水の涓々と微なるものは、手に捧ぐる位な土もて譯なく塞き止めらるゝが、其の水の益盛なるに及ては、木石をも漂はし丘陵をも沒

する事じや、火の熒々と微なるものは、手に勺み入るゝ程な水もて無造作に滅さるゝが、其の火の愈盛なるに及ては、都邑をも焦し山林をも燔く事じや、以上、夫水之微也云云云より燔ニ山林一に至るの三十七字は、司馬光五規の第四重微の語にて亦文鑑に出たり、左れば總じて幾微の初を愼で心に油斷してはいけぬぞ。夫の愛着に溺るゝの水や瞋恚に燒かるゝの火も、亦之と常に異ふ所は無い、古の人が其の心を治ひることは、其の一念の未だ生せず其の寸情の未だ起らざるに豫防せらるゝぞ、所以に力を用ふること甚だ微にして功を收むること甚だ大なるのじや、彼の一捧の土や一勺の水を以て能く其の功を奏するのと一般である、然るに其の情性の相亂れて愛水惡火の交ゝ胸中に攻むるに及ては、自は則ち其の己が生命を傷り他は則ち其の人の形體を傷る、殆乎危ない事の限りである、斯くては彼の水や火のいと盛なるに及ひたのと同じ事で到底之を救ふことの出來ぬものぞ。

草堂曰。住持無他。要在審察人情。周知上下。夫人情審則中外和。上下通則百事理。此住持所以安也。人情不能審察下情不能上通上下乖戾百事矛盾。此住持所以廢也。其或主者自恃聰明之資好執偏見不通物情捨僉議而重己權廢公論而行私惠致使

進善之途漸隘。任衆之道益微。毀其未見未聞。安其所習所蔽。欲其住持經大傳遠。是猶却行而求前。終不可及。與山堂書

△大意、住持は常に我意我見を挾まず、衆議公論を待て行事すべきを明す。

(字釋)矛盾●は本講義百五十四頁に釋あり、◎僉●は音仙ヨナと訓す、字書に『皆なり咸なり衆共に之を言ふなり』とあり、多く人の上にのみ用ふる字なり。

(講解)草堂清和尚の仰せに、住持に別意は入ら無い、唯其の要とすべきは衆の人情を審かに察し院の上下を周く知るに在るじや。扨て人情審かにするときは中も外も中は弟子なり外は四來の衆なり、共に和悅し、上下相通ずるときは百事悉く整理す、此れ住持の其の道の流通して衆の安ずる所以じや、若し之に反して人情をば審かに察することを得せず、下の情が上に通ずることの出來やらで、上も下も乖き戻つて百事矛盾と喰違ふのは、此れ住持の其の道の塞がれて叢林の廢する所以じや。其れ或は住持たる者謙恭の德なうして自ら聰明の天資を心恃とし、好で偏頗の私見を固執して物理人情に通せず、僉の評議を捨てゝ己が權柄を重じ、公の論議を廢てゝ私の小惠を行ふときは、善に進むるの途が漸々隘くなり、衆に任ずるの道が段々微ならしむるを致す事となる。殊に己が未だ見ず聞かずの事は、悉く不

可なりとして之を毀つて聽入れず、己が習たる所蔽はれたる所の事は、皆美事なりとして之に安じて改め無い、斯樣にして其の住持たるの行事を廣大に經營せむとし其の法道を久遠に傳へむと欲するならば、是れ猶却行しながら前の方へ出でむことを求むるやうなもので、幾等急つても終に前人に及ぶことは出來ないのである。與山堂書(黃龍の山堂道震禪師に與ふる所の書なり。其の法嗣なる隆興府草堂和尚が)

草堂曰。學者立身。須要正當。勿使人竊議。一涉異論。則終身不可立矣。昔大陽平侍者。道學爲叢林。推重。以處心不正。識者非之。遂致終身坎坷。逮死無歸。然豈獨學者而已。爲一方主人。尤宜祗畏。與二一書記一書

△大意、衲子、心行正しからざれば、世に立つこと能はざるを明す。

(字釋)大陽平●●は事實頭書に詳出せるを以て此に略せず、◎坎坷●●は不平の貌、說文に『凡そ人行て不利なるを坎坷と曰ふ』とあり、又通じて轗軻に作る、廣韻に『轗軻は遇はざるなり車行て利ならざるを轗軻と曰ふ、故に人志を得ざるを亦之を轗軻と謂ふ』と見ゆ、轗は車の平ならざるなり、軻は折軸の車なり、是れ車を窪き地に挽かげて前にも後にも進り難き如く世事意の如くならで不平なるを云ふ、◎祗畏●●祗は音脂ッ、シムと訓す肅敬の義なり、神祇の祇と混用すべからず、畏は恐

るゝことの甚しきにて氣味の惡く思ふことなり。

（講解）草堂和尚の仰せに、學者その身を立ひとするには、端正的當なるやうに須むるが肝要で、人をして、竊かに非議せしむることの勿いやうにせよ若し過て一たび他の異論に渉ることとて卽ち惡評を受くるときは一生涯立身出世することは出來ない。昔し鄂州大陽山の平僧と云ふは、明安和尚明安は大陽主の醫主禪師の侍なり、法を梁山觀に嗣ぐ、の侍者と爲つて盡く其の宗旨を得た、ソコで道學は隨分勝れたと見て叢林の爲めに推し重せられしが、ドウモ腹の善ない人で兎角生滅を以て己が任としたりき、生滅は俗語の惡口すること、人を惡く云ふて疵を附るの類、開は卽ち同門の其の右に出る者を惡むで之を陷いれ、或は云ふも忌はしき程なる先師明安の靈塔を發いて殘刻を極めた頭容所引の大慈武庫を參見すべし、斯く其の心を處理することの常も正う無つたから、世の識者は皆深く之を非難した事である、遂に官より其不幸を罰して還俗させられたので、乃ち生涯志を得ずして不平に終り、死に遂ぶまで歸省處の無いことを致した、殊に其の死に樣の如きは大蟲に食はれて敢無最期をしたと申すが、實に因果覿面怖るる可きの限りである。然し此等の事は豈とて獨り學者の上のみでわらうや、一方の主人と爲つて接化の任に在る者は、猶更宜しく祇み畏るべき事じや。（奥一容記容は草堂和尚が其の法嗣なる雪巢法一禪師に與ふる所の書なり、前記雪堂の條下に一村僧爲二洛記一とあるは卽ち其の人なり。）

草堂謂如和尚曰。先師晦堂言。稠人廣衆中。賢不肖接踵。以化門廣大。不容親疎。於其間也。惟在少加精選。苟才德合人望者。不可以己之所怒而疎之。苟見識庸常。衆人所惡者。亦不可以己之所愛而親之。如此則賢者自進。不肖者自退。叢林安矣。若夫主者好逞私心。專己喜怒。而進退於人。則賢者緘嘿。不肖者競進。紀綱紊亂。叢林廢矣。此二者實住持之大體。誠能審而踐之。則近者悅遠者傳。則何慮道之不行。衲子不來慕乎。（疎山石刻）

△大意　叢林最も抱道の衲子を尊ぶべきを明す。

（字釋）如和尚は頭書に「未だ詳ならず佛眼遠の法嗣、雲居、法如禪師歟」とあり、私に案ずるに草堂清の法嗣なる疎山了如禪師に非る歟、姑らく併せ記して博雅の指示を待つ、◎親疎は愛して之を近づくるを親と曰ひ、惡みて之を遠くるを疎と曰ふ、◎緘嘿緘はトヅと訓ず、本と絲にて口を閉ぢ塞ぐことなり封緘と連用す、家語に「孔子周廟を觀るに金人あり三たび其の口を緘づ」とあるが如し、嘿はモダスと訓ず通じて默に作る口を閉て言はざるなり。

（講解）草堂和尚が如和尚に謂て申さるゝやう、先師晦堂老漢の言に、稠人廣衆として多人數寄り合ふ廣い中には、賢者も不肖者も踵を接けて一ッになつて居る、元來師家が教化の門口に至つて廣大に出入自在なもので、素より愛憎の念が無いから親疎の別を其の間に容れ無い、惟少しく精選を致すに在るのみじや。サテ其の精選は如何にするぞと云ふに、苟も才德むつて人の望みに合ふ者ならば、己が常に憎む所の者じやからとて私心を以て之を疎にしてはならぬ、苟も見識が庸常であつて衆人の惡む所の者ならば、亦己が愛する所の者じやからとて我意を以て之を親ではならぬ、斯樣にして精選を加ふるときは、賢者は自から進み不肖者は自から退いて叢林安く盛に至る事である。若し夫れ之に反して主者が好で私心を存分にし己が喜怒を我儘にして、而して人を進退するときは、賢者は皆口を緘て言はず、不肖者は競ひ進で先へ出で、大小の規律が紊れ亂れて叢林廢亡に歸する事である。左れば此の安廢の二ッの者は實に住持の心得べき大體であつて、決して輕々に附すべき事で無い、誠に能く此の道理を審に辨へて之を實地に踐み行へば、近き四衆の者は打とけて悅び、遠き江湖の者は傳へ稱して感化し來るやうになる、果して然るときは何ぞ斯道の行はれず稍子の來り慕はぬことを心配しやうぞや、然う云ふ懸念は何にも入つた事で有るまい。（疎山石刻、疎山は頭陀に徳山の師、疎山の師は本禪師歟とあり或は船子和尚に謂ゆる疎山了如禪師歟。）

草堂謂空首座曰。自有叢林已來。得人之盛無如石頭馬祖雪峰雲門。近代唯黃龍五祖二老。誠能收拾四方英俊納子。隨其器度淺深。才性能否。發而用之。譬如乘輕車駕駿駟。總其六轡。奮其鞭策。抑縱在其顧眄之間。則何往而不達哉。（廣錄）

△大意、叢林は有道の稍子を得るを貴ぶべきを明す。

（字釋）空首座は福州雪峰、東山慧空禪師なり、本郡陳氏の子、法を草堂清に嗣ぐ、東山外集は師の著書なり。◎雪峰は福州雪峰義存禪師なり、南安魯氏の子、法を德山宣鑑に嗣ぐ。◎雲門は廣東韶州雲門山文偃禪師なり、嘉興張氏の子、法を雪峰義存に嗣ぐ。◎駕駿駟は車に馬を具ふるを駕と云ひ、俊馬を駿といひ一乘四馬を駟と云ふ。◎六轡は音祕なり、手綱とて鹿に掛けて馬を御する綱を云ふ、（俗に轡の字を誤りて多くクツワとするは非なり、轡の字德は中央に車あり左右に糸あり下に皮あり、是れ即ち車に馬に駕して馬の口に手綱を付けたるの意なり、）凡そ一車に四馬ありて內の兩馬を服といひ外の兩馬を驂といふ、一馬各兩轡にして共に八轡たり、而して驂馬の內の兩轡を以て軾（軾は車の前の橫木にして敬する所あるときは之に凭て禮を爲すものなり、）に繫ぎ

置き、驂馬の外の兩轡と轅ばナカエとて車の前に出たる長き柄を云ふ、を夾び兩服馬の四轡とを以て分て兩手に置く、故に之を六轡と云ふ、◎鞭策は共にムチと訓ず馬を厮ますに用ふる具なり、分て云へば鞭は革作りのムチにて策は竹ムチなり、◎顧眄は共にカヘリミルと訓ず、左顧右眄と連用す、眄は音面、舊本盼に作るは非なり、前漢書班固敘傳に『虞卿顧眄を以てす』後漢馬援傳に『援甲を被り馬に上り鞍に據り顧眄して以て用ふ可きを示す』とあるが如し。

（講解）草堂和尚が其の會下の慧空首座に謂て申さるゝやう、天下に叢林の有つてより已來遠く百丈以前より總括して云ふ、衲子を得たことの盛なるは、石頭希遷傳燈錄載する所の法嗣二十八人雲門文偃同錄法嗣一人の四師に越ゆる者は一馬祖道一同錄法嗣八十四人雪峰義存同錄法嗣四十二人雲居傳燈錄所載法嗣二十四人五祖法演同書法嗣二十二人の二老の無い、近代草堂の時に至つては唯黃龍惠南同傳法嗣一人のみあつて、誠に能く四方の英傑たる衲子を收拾はれたに黃龍下に於ては臨堂祖心華なるものなり、五祖下に在ては三佛の如き開悟道眼の如きは其の冠たるものなり、其の器能度量の淺い深いに應じ、其の才識心性の能否に隨つて、自由に開發して之を用ひられたのじや、其の殺活與奪の活手段は、譬へば輕い車に乘り之を四頭の駿馬に引かせて、其の六筋の轡を總べ持ち其の鞭策を打ち奪ふやうなもので、乃ち馬を抑止やうと走縱やうと其の顧

（四百三十四）

眄する一寸の間に在つて甚と自由自在である、然うなるときは何くに往くとしてか達せられぬと云ふことがあらうやとなり。

草堂曰。住持無他。要在戒謹其偏聽自專之弊。不主乎先入之言。則小人諂佞迎合之讒。不可得而惑矣。蓋衆人之情不一。至公之論難見。須是察其利病。審其可否。然後行之可也。碛山實錄

△大意　主者衆と心を一にすれば、叢林必ず興るべきを明す。

（字釋）偏聽は片聽とて雙方の言を聽かざるを云ふ、史記鄒陽傳に『偏聽は姦を生じ獨任は亂を成す』とあり、◎自專は人と謀らず我れ獨り私智を逞くして事を行ふを云ふ、◎先入云云は前漢書息夫躬傳に『唯陛下古戒を觀覽し反覆參考して先入の語を以て主と爲すこと無れ』とあり、◎迎合は斯々言へば其の人の氣に入るか、又斯々すれば其の人の氣に入らぬかと先の心を迎へ料りて其の氣に合はせると言ふ、綱鑑二十二、唐、玄宗紀に『林甫左右に媚事し上意に迎合して以て其の寵を固くす』註に『逆め其の情を知りて逢迎して以て之に合す』とあり。

（講解）草堂和尚の仰せに、住持接衆の事は何にも別意は入らない、要は唯其の偏聽して自ら專らにするの弊を戒め謹むに在るのじや、諺に『片口聞て理を付けなに』といひしは犬に味ひあり、

（四百三十五）

凡そ人は前に其の心に入つた事は、善惡共にソレが主の位置を占めて、後より道理を聞ても矢張り前に聞たのを本當とするもので、之を先入主と爲るとは申すぞかし、斯る先入の言葉を主とすることの無いやうにするときは、縱や小人共が此方の氣に入らむとしての諂佞事も、我が心を迎へ合せむとしての讒言も、之を以て兎ても住持を得惑はすことは出來ぬである。蓋し衆人の性情と云ふものは固より一樣に揃は無い、至公の論議と申すものは誠に一見して知れ難い、故に須らく是れ其の利と病との在る所を察にし、人に益あるを利といひ、人に損あるを病といふ、其の可と否との存する所を審にせよ、然して後に衆に對して事を行ふて初て可いのじや。

草堂謂山堂曰。天下之事。是非未明。不得不慎。是非既明。以理決之。惟道所在。斷之勿疑。如此則姦佞不能惑。强辯不能移矣。（清泉記聞）

△大意、叢林の取舍、輕しく定む可らざるを明す。

（講解）草堂和尚が其の法嗣の山堂道震に謂て申さるゝやう、天下一切の事に於て、是と非との未だ判明せざれば、屹度氣を付け慎まねばならぬ、是非の既に判明したらば、當然の理を以て之を決斷せよ、惟道理の在る所の儘にして之を裁斷して疑ふてはならぬぞ。斯樣にして萬事に對するときは、惡姦便佞の徒も此方を惑

はすことは出來ない、烏を鷺に言ひ曲ぐるの强辯も、强辯は如車を横に推さむとする、黑白相同じからざるを强て同じとするの類、是非の地を易へることは出來ないとなり。（清泉記聞は具には清泉オ菴主記聞と云ふ、次篇に見ゆ。）

山堂震和尚。初却曹山之命。郡守移文勉之。山堂辭之曰。若使飯粱嚼肥作貪名之納子。不若草衣木食。爲隱山之野人。（清泉オ菴主記聞）

△大意、道を守るの士は、妄に名利の爲めに移す可らざるを明す。

（字釋）移文は移書に同じ、移は易なり我が情を以て彼の意に移し易るを謂ふ。◎飯粱嚼肥飯はメシを喰ふことなり、粱は字書に「粟の類、米の善なる者五穀の長」とあり、嚼は咀みて味ふことなり、肥は肥膩なり、言ふは食する所の者皆佳穀美味の物となり、史記蔡澤傳に「粱を持し肥を刺齒す」の字ありて註に「刺齒の二字は當に嚼に作るべし」と見ゆ。◎野人はイナカモノと訓す、論語先進篇に「先進の禮樂に於ける野人なり」朱註に「野人は郊外の民なり」とあり。

（講解）草堂の法嗣なる山堂道震和尚は、初め撫州府下の曹山より請聘の命あり しを謝絶せられたゾコで其の郡守の某氏が山堂の辭と思ふ心を移し易へさせむとての書狀を遣つて懇ろに之を勉めければ、山堂之を辭して申されけるやう、若し予をして佳粟を飯ひ美物を嚼で名利を貪るの衲子と作さしやうよりは、草

を編で衣、木の實を食ふて居て、彼の山に隱遯するの野人と爲るに越した事は無いとて斷乎として命に應ぜられざりきとなり。

山堂曰。蛇虎非鴟鳶之讎。鴟鳶從而號之何也。以其有異心故。牛豕非鸚鵡之馭。鸚鵡集而乘之何也。以其無異心故。昔趙州訪一菴主。値出生飯。州云。鵶子見人爲甚飛去。主罔然。遂躡前語問州。州對曰。爲我有殺心在。是故疑於人者。人亦疑之。忘於物者。物亦忘之。古人與虵虎爲伍者。善達此理也。老龐曰。鐵牛不怕獅子吼。恰似木人見花鳥。斯言盡之矣。（興周居士語）

△大意。學者專ら修錬して習氣を盡却し、以て物我相忘の理に達す可きを明す。

（字釋）鴟鳶は音脂緣共にトビと稱して鷹の類なり、鴟に鵄といひ又鵶と云ふ皆鷹の小さきものなり、◎鸚鵡は音劬碧鸚鵡八哥並に同じ皆唧唧鳥の異名とす。鵡はカサヽギ又唐鵡と稱す、◎馭は乘なり、◎生飯はサバともサムバとも云ふ、具には衆生生飯と言ふ、卽ち衆生食なり、是れ鬼子母、噉野鬼に僧食を與ふべしとの佛勅に出たるものにて、（鬼子母は訶利帝母なり其の緣は毘奈耶雜瑣經十五に出づ、日食の上分七粒に過ぐべからず、を取りて其の食に充つるものとす、委しくは異俗佛事編

雜記部、及禪林象器箋祭供類に出たり、◎鵶子、鵶は鴉の字に同じ子は附け字にて狗子の例の如し、◎罔然は昏蒙無知の貌、言ふは其の理を知らざるなり、◎古人は嚴陽尊者を指す、雲臥紀談下に「嚴陽山は武寧縣の東南四十里に在り、趙州和尚嗣法の上首諱は善信といふ者あり、山の奇秀なるを樂みて菴を其の間に結ぶ、信は道德を以て崇重せられて世に名いふことを欲せず、故に嚴陽尊者と稱す、二虎一蛇、左右に馴れ繞る」とあり（傳燈會元皆一蛇一虎に作る、之を是とす）、◎伍は伴なり參なり、衆と雜處するを伍と言ふ、◎老龐は襄州の龐蘊字は道玄なり世に龐居士と稱す法を馬祖道一に嗣ぐ、老とは尊稱の辭なり、◎鐵牛は潛確類書百十二に「陝州に鐵牛の廟あり、牛の頭は河南に在り、尾は河北に在り、禹以て河患を鎭す」、又東坡が詩に「誰能如鐵牛、橫身負黃河」とあり。

（講解）山堂震和尚の仰せに彼の蛇や虎は毒惡のものなれども、何にも鴟や鳶の讎ではない、ソレに鴟鳶が逐ひ廻つて之に號び呼ぶことは何故であらうぞ、這は蛇や虎は捕て食ふといふ惡心が有るからの事である、彼の牛や豕は溫柔なものなれども何にも鸚や鵡の馭では無い、ソレに鸚鵡の集ひ來つて之に乘り遊ぶことは何故であらうぞ、牛は牛や豕は捕て食ふと思ふ野心が無いからの事である。

佛、經行に在て住するとき、晡時に經行す、舍利弗、佛に從つて經行す、是の時鷹あり鴿を逐ふ、鴿、佛の邊りに飛び來て住す、佛、經行して之を過ぐ、影、の鴿上を逐へば鴿の身安穩にして怖畏即ち除きて復た聲を作さず、後ち舍利弗の影到れば鴿便ち聲を作して戰怖す、佛、之を見て、舍利弗と我と身俱に三毒なし、何の因緣を以てか佛の影、鴿を覆へば鴿便ち聲なくして復た恐怖せず、我が影、上を逐へば鴿便ち聲を作し、汝ぢ三毒の習氣未だ盡きず、是を以ての故に汝が頭陳ふ時は恐怖除かず、云云大智度論に見えたり、昔し趙州從諗和尚が或る菴主を訪問しけるに、菴主生飯を送り出して鵝子に與へむとするに値ふた、然るに鵝子は見て便ち總に飛び去つたのよ、ソコで趙州は作家の禪を以て直ちに斯く問を發した、鵝子人を見て甚だしてか飛び去りしかと、菴主罔然として何とも對ふべき要領を得ないので、遂に趙州が申されし通りの前語を驟で反問した、趙州代り對へて、我に於て殺さうと思ふ惡心の在る有るから鵝子の飛び去るのじやと申されきとぞ、是の故に人を疑ふ者は人も亦之を疑ひ、物を忘るゝ者は物も亦之を忘るゝものぞ、古人即ち嚴陽尊者が一蛇に逢ひ一虎を左右に隨へて、之と常に仲間を爲して居られしとは、善く此の物我相忘の眞理に達し得たからの事じや、龐居士が偈にも曰ふて、ある鐵製の牛は固と無心なるが故に百獸惱裂すと云ふの獅子、吼をも怕れない、ソレは丁度木偶人が花鳥花の字は付け字なれば鳥のみにかけて見るべし、を見るに似たりとて、木偶人の本體も亦無心なるから禽鳥の之に逢ふとも總に驚かないとの理を示したのじや、誠に僅々たる斯の言句中に於て能く無心の當體を云ひ盡したものである。與二周居士一書は山堂の周居士に與ふる書なるも、居士は大洪老納祖璉の法嗣なる丞相の益國周公か、監丞の成乘周公か、二人の中何れに當るを知らざる由頌書に見えたり、

山堂曰。御下之法。恩不可過。過則驕矣。威不可嚴。嚴則怨矣。欲恩而不驕。威而不怨。恩必施於有功。不可妄加於人。威必加於有罪。不可濫及無辜。故恩雖厚而人無所驕。威雖嚴而人無所怨。功或不足稱而賞之已厚。罪或不足責而罰之至重。遂使小人故生驕怨矣。與二張尚書一書

△大意、賞罰當を失ふ可らざることを明す。本篇は尚書の官に在る者に與ふる書なるを以て、專ら下を御むることを說く、

（字釋）御はチサムと訓す、元來ノルと云ふ字なれば、能く馬を使ふ義より轉じて人を支配することに用ふ、漢書に『長策を振ひて宇內を御む』とあるが如き是なり、

◎罪辜は共にツミと訓す、罪は咎の定りたることなり、辜は咎人に名の付きたることにてこの字よりは輕し、周禮、夏官に『以て無辜を救ひ有罪を伐つ』とあり。

（講解）山堂和尚の御せに、下を御むるの法は、恩惠の甚だ過ぐることは善ない、恩惠の過ぐる時は驕り高ぶるやうになる、威令の餘り嚴いことは善くない、威令の嚴くなるときは怨み、仇とするやうになる。左れば恩あつでも驕り高ぶらぬやう

にし、威あつても怨み仇とせぬやうに致さうと思ふならば、恩は必ず顯然たる功勞ある者に施して妄に無功の人に遣つてはならぬ、威は必ず判然たる罪跡ある者に加へて濫に辜ない者に及ぼしてはならぬ、斯樣にして程能く恩威を並べ行ふて往くのである、故に恩を施すこと手厚いといふても、而も其の功に相應するので人の驕り高ぶる所は無い、威を加ふること手嚴いと云ふても、而も其の罪に相當するので人の怨み仇とする所は無い。然るに右に反して功の或は稱揚するに足らぬのに之を賞むること已に手厚ければ、遂に小人をして故に驕りを生せしむるであり、罪の或は譴責するに足らぬのに之を罰すること至つて重ければ、遂に小人をして故に怨みを生せしむるであるとなり。（與張尚書書は山堂和尚より尚書の官に在る張氏某に與ふる所の書なり、尚書とは尚は主るの義、王命を掌る官なり。）

山堂曰。佛祖之道。不過得中。過中則偏邪。天下之事。不可極意。極意則禍亂。古今之人。不節不謹。殆至危亡者多矣。然則孰無過歟。惟賢達之士。改之勿吝。是稱爲美也。（與超超然書）

△大意、中道は至難なるを說き、兼て過を改むるの美を明す。

（字釋）中は中道とて偏邪を離れたるを云ふ、即ち有に偏せず空に着せざる非有

非空を中道と名く、智論卷四に「佛常に中道に居するが故に兜率は六天及び梵の中に於て上三下三なり、彼天に於て中國に下生し、中夜に神を降し、中夜に迦毘羅婆國を出で中道を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得、中道を以て人の爲めに說法し、中夜に無餘涅槃に入る」とあり。◎吝はチルムとも、ヤブサカとも訓じて改め吝みとすることなり。

（講解）山堂和尚の仰せに、佛祖單傳の道は第一義の中道を得るに過ぎ無い、毛頭でも中道を過ぐるときは早や偏頗邪曲じや、天下一切の事は滿足の意を極むることは行け無い、若し滿足の意を極めむとするときは忽ち禍毀擾亂じや。サテ古今の人が徒らに意を極めむとして肝要なる中道に因らず、即ち中節ならず謹恭ならずして、夫れが爲めに殆ひと危急存亡に至る者が多い。斯く過不及の場合は六ケ敷いものであれば、古人今人に拘らず孰か過失なからうや、惟賢達の士のみは其の過を改むるに於て小人の如くに負吝するやうなことは勿い、即ち惡い事は惡いとして神速に直すである、ソコで是を稱して美事と爲すのじや。（與超超然書は山堂和尚より圓悟の法を得たる超會玲の超然居士に與ふる所の書なり。）

山堂同韓尚書子蒼萬菴顏首座賢眞牧避難于雲門菴韓公因

問萬菴。近聞。被李成兵吏、所執。何計得脫。萬菴曰。昨被執縛。飢凍連日。自度必死矣。偶大雪埋屋。其所繫屋壁。無故崩倒。是夜幸脫者百餘人。公曰。正被所執時如何排遣。萬菴不對。公再詰之。萬菴曰。此何足道。吾輩學道。以義爲質。有死而已。何所懼乎。公頷之。因知前輩涉世。禍害死生。皆有處斷矣。眞牧集

△大意、前輩は禍難生死の際に於て、坦然處斷する所あるを明す。

(字釋)執縛。トラヘシバルと訓す、執は捕なり、縛は繩もて括るなり。◎無故。事の起るべき理由なきを云ふ。◎處斷。は當に然るべき處分決斷。決斷は判決斷行なり、するの義なり。

(講解)山堂和尚が韓尚書子蒼に(山堂の嗣、韓駒字は子蒼、時尚書の官たり、前に出づ)萬菴道顏首座(妙喜の嗣、眞牧正賢(佛眼の嗣、本文單に賢眞牧とのみありて法階稱號を附せざるものは此篇眞牧其の人の集錄なるを以てなり)の一居士二衲子と同しく盜賊李成の兵難を江西の雲門菴に避けられた。(南宋の高宗、紹興元年に江淮の盜李成集し、江淮六七州に據り、自ら李天王と號し、東南を席卷するの勢あり、朝廷之を患へ張俊に命じて之を討たしむ、俊岳飛を請ふて共に之を伐つ、遂に戰連勝、北走するを追ふて遂に蘄州の英梅縣に至て犬に之を敗る、其の衆散亡、成、北走して劉豫に降る豫は光きに帝と稱し國を齊と號するもの、韓公因て萬菴顏首座に問ひけらく、近頃貴僧は李成が兵卒の被めに執はれたと聞きしが、如何樣な計略あ

つて其の難場を脫るゝことを得たるかと、萬菴の申すやう、昨に彼が爲めに執縛はれて飢ゑ凍ゑたることが連日で、最う此の上は自ら必ず死すべきものと覺悟して居た、偶〻大雪が降つて牢屋を埋めたりしが其の繫ぎ止る所の屋壁が何の故も無いに圓らずも崩れ倒れた、ソコで是の夜勿怪の幸に脫るゝ者が百餘人あつたが予も亦其の中に雜づて逃げたのであると、韓公の曰ふ、正に執はれた時には何ぞ心を排遣つて御座つたなどとて其の覺悟の體を尋ねけるに、萬菴は何とも對へ無い、韓公再び之を詰り問ひければ、萬菴對へて斯樣な事は彼是事斷らしく道ふ迄も無いよ、吾輩學道の士は固より節義を以て本質とするから、唯其の時に臨では決然一死ある而已じや、何とて懼るゝ所が有らうぞやと申しければ、韓公了簡が參つたのでソコで頷かれた。(以下眞牧の評手)之に因て前輩が世上の風波を涉り行くには、禍害死生の際に於て、皆程好取捌きの決斷力が有ることを知らるゝである。

山堂退百丈。謂韓子蒼曰。古之進者。有德有命。故三請而行。一辭而退。今之進者。惟勢與力。知進退而不失其正者。可謂賢達矣。(記聞)

△大意、古人進退去就其の正を失はざるを明す。

（講解）山堂和尚は南昌府下の百丈山を退かれつ、時に其の法嗣の幸子蒼に謂て申さるゝやう、古の世に進み出た人は、自己の蹤德が有り檀越の請命が有る、故に三たび請聘せられて初めて行き、一たび辭み申して退院するので、是れは世に出ることは能く前後を考へて輕々にせず、世を退くことは速にして情念に惑かれまじきを云つたのである。今の世に進み出る者は、唯、權勢と財力とに由つて去就の上に常度がないから、ソレで全く古人が出世の樣と反對の勢を爲すものである。左れば三請せられて進み一辭して退くてふことを知つて、其の正理を失はない者は、誠に是れ賢人達者とこそ謂ふべけれとなり。

山堂謂野菴曰。住持存心。要公行事。不必出於己。爲是。以他爲非。則愛惡異同。不生於心。暴慢邪僻之氣。無自而入矣。（幻菴集）

△大意、主者は公論を以て本懷と爲す可きを明す。

（字釋）野菴は隆興府石亭、野菴祖璇禪師なり、法を大慧宗杲に嗣ぐ。◎暴慢は理に戻ることを恐れず恭を密く爲さゝるを暴と云ひ、倨り肆にして事を怠り緩ひを慢と云ふ。◎邪僻は本講義百九十四頁に釋す。

（講解）山堂和尚が妙喜の法嗣なる野菴祖璇禪師に謂て、申さるゝやう、住持が存心として平生の心の持方は、公平にして一切の事を行ふのが肝要で、必ず己から出たるを是と爲し他を以て非と爲すやうの私心なきときは、可愛とか憎惡とか異ふとか同じとかの妄想が其の心に起らない、又暴くして慢り邪にして僻みの惡氣が外からして我が心腑に入ることは無いそとなり。

山堂曰。李商老言。妙喜器度凝遠。節義過人。好學不倦。與老夫相從寶峯。僅四五載。十日不見。必遣人致問。老夫舉家病腫。妙喜過舍。躬自煎煑。如子弟事。父兄禮。既歸。元首座責之。妙喜唯唯受教。識者知其大器。湛堂嘗曰。果侍者再來。人也。山僧惜不及見。湛堂遷化。妙喜蠶足千里。訪無盡居士於渚宮。求塔銘。湛堂末後一段光明。妙喜之力也。（日記）

△大意、古人が情實は、生前死後不二なるを明す。

（字釋）凝遠、凝は孟子の謂ゆる不動心の義に近し、一說に「凝は定なり嚴整の貌」と云へり、唐書宋璟傳に「璟の風度凝遠、人其の量を涯ること莫し」とあり。◎舉はコヅリテと訓す總合して云ふ辭なり。◎元首座は成都府昭覺寺、徹菴道元禪師なり、法を佛果圓悟に嗣ぐ。◎唯唯は應辭の速に順從するなり。文選西都賦、良、註に「應敬の

詞」前漢書龔勝傳、師古、註に「恭應の詞」とあり、◎再來人、世に大慧、妙喜を以て雲峯文悅の後身とす、故に再來の人と云ふ、雲臥紀談上に「大慧老師、大觀丁亥を以て時に年十有九なり、大平州の隱靜を經て二僧と杯渡港に遊ぶ、犬あり、逸怒して吠ゆ、二僧は慄れて返る、大慧は徑ちに前む、犬則ち宿客を迎ふが如し、而して港の主僧、延過特に厚し、大慧曰く、某甲晚生なり、豈に以て盛意に當るに足らむや、主僧、伽藍の土偶を顧みて言て曰く、昨宵將に三鼓ならむとす、夢らく此人告るに今日雲峯悅禪師來らむと云ふを以てす、且つ戒めて其れ待を爲さしむる耳と、大慧不敏なりと謝す、聽靜に同るに及で雲峯を老宿に詢ふ、雲峯の語錄を以て爲めに示すこと有り、卷を開けば恍然たり、目を過せば誦を成して終に忘れず、時より叢林大慧を傳へて雲峯の後身と爲す、圓悟に逮て骨を對盤の文あり、畧に曰く、夢世知雲峯悅老之後身、逢時復南岳、讓公之前號、と、靈山南嶽讓和尚は大慧禪師と謚すと云ふ」とあり、又雲臥莊主が無言首座に問ふの語なり、◎蹠足、蹠は吉典、切蹠の俗字なり、字典引戰國策曰く「足重蹠し日に百にして舍す」同ノ宋ノ景公に「百舍に重蹠す」とあり、蹠は胝なり重蹠は胝を累ぬるを云ふ、增韻に「足胝の起ること蹠の如きを謂ふ」類書纂要九に「重蹠は足皮厚く復起すること蹠の如きなり」と見ゆ、◎渚宮、一統志六十二、荊州府宮室、部に「渚宮は江陵故城の東南に在り、楚に建梁の元帝位に楚宮に即くと、即ち是なり、五代の時高從誨城の西南隅を整り池と爲し亭を起して亦渚と曰ふ」とあり、◎塔銘は後に示す、塔は釋氏要覽送終立塔の條下に「梵語の塔婆、此に高顯と云ふ、今は畧して塔と稱す云云」とあり、名僧集等に詳なり、銘は文の一體にして記なり刻なり、其の人の功德を記銘して後學

を激勵するなり。

（講解）山堂和尚の仰せに、廬山の李商老が言に、李商老は道を湛堂に問ふ、妙喜と友とし善し、本講錄二百十七頁を參見すべし、妙喜禪師は、圓悟の法嗣、大慧と號す、器宇度量が遠大にして動かず節操義氣が人より頭拔て居た、常に學道を好で倦まず無い、老夫と共に寶峯の湛堂老師に相從ふこと僅で四五年の間なりしが、十日も相見せぬと必ず人を差し遣はして音問を致した。

疑きに老夫の家は修造に因り土を動かして土神の怒にや觸れたりけむ、家內殘らず臃物を病むたのである、頭に大慧武庫に之を引て之を明す、妙喜禪師は暫暇を請ひ態々茅舍へ御座つて、躬自ら藥を煎じ物を煮て、懇ろに介抱せられし樣は子弟が父兄に事る禮の通りであり、癒て病氣の平癒したのを見て寶峰へ歸錫せられしかば、道元首座と云ふが僧俗事別なる趣を以て妙喜を責めた、妙喜暫暇を請ふこと三十日、然るに方に四十日に及で歸る、故に元首座責めて云く、師一野了なり無階迅速と、妙喜は少しも逆はず唯々といつて其の敎を受けられし由にて、世の識者は皆妙喜の大器なることを知りぬ。湛堂老師嘗て申されしに、宗杲侍者は宗杲は妙喜の諱なり、湛堂の侍者たり、當時、却々一世の人とは見ないない、定めて應世再來の人であらう、山僧湛堂自稱す最早老年に及で餘命もないから、彼が出世して大法を振ふのを見るまで得居らぬが殘念じやとて、妙喜が大器底の人なるを賞せられ

きと云ふ。サテ其の後程無う湛堂老師は遷化せられた因て火葬して無數の舍利を得たので、山内の老宿が評議して師の舍利塔を建つることゝなつた、ソコで妙喜が千里に顰足すとて、遠い路を歩み足に胝皺らして、張無盡居士を荊州の渚宮に訪ふて（時に張商英、本を言ふを以て被て出でゝ荊南鹽商稅に監たり）問答の末其の塔銘の文を求め得て歸つた。（當時問答の末、頭書に大慧武庫を引くが如し、又妙喜年譜に「湛堂師寂す、師、張公無盡に請て塔の銘を求む、無盡門庭高しして天下に許可すること少れなり、師を見て一言にして契ふ、樹を下して朝夕與に語る、之を號して妙喜と曰ひ之に字して無晦と曰ふ云云」と見ゆ、サテモ湛堂老師が遷化の後に一段の光明を放つたのは、全く妙喜が骨折に由るのじやとて、妙喜が實情の生前死後の不二なるを稱揚したりきと。（湛記は李商老の記錄なり、前に見ゆ。）

因に云ふ無盡居士が筆に係る湛堂が塔銘の全文は、未だ何の書に出たるを詳にせず、但大慧武庫に其の略を記せり、今之を左に錄して參考と爲しぬ。

大慧武庫卷上曰。舍利、孔老之書無聞也。先佛世尊滅度。弟子收舍利。起塔供養。趙州從諗。舍利多。至萬粒。近世隆慶間。百丈庵。煙氣所及。皆成舍利。大抵出家人。本爲生死事大。若生死到來。不知下落。即不如三家村裏省事漢。臨終付囑。一一分明。四大色身。諸緣假合。從本以來。舍利豈有體性。若梵行精潔。白業堅固。靈明廓徹。豫知報謝。不驚不怖。則依正二報。毫釐不差。世間麁心。於本分事上。十二時中。不曾照徹。細管流注生

大我慢。此是業主鬼來借宅。如此而欲舍利流珠。諸根不壞。其可得乎。

妙喜杲和尚曰。湛堂每獲前賢書帖。必焚香開讀。或刊之石。曰。先聖盛德佳名。詎忍棄置。其雅尚如此。故其亡也。無十金之聚。唯唐宋諸賢墨蹟。僅兩竹籠。衲子競相謌唱。得錢捌拾餘千。助茶毘禮。（可菴集）

△大意、古人有道を貴重し、先輩を追慕するを明す。

（字釋）十金、食貨志に「黃金一斤直ひ萬錢」とあり、蓋し金の一寸四方重さ一斤なるものを以て一金と爲す、即ち一金は一萬錢に當れば、十金は金十斤にて錢十萬に當るなり、音義に「十金は即ち十兩也」とあり、今此の說に從ふ。◎唐宋は李唐趙宋なり、唐は古國の名、周の成王の弟叔虞此の地に封せらる漢に太原郡と曰ふ是なり李淵唐王より遂に隋の禪を受けて國を唐と號す、唐二十世、凡て二百九十年、宋は趙匡胤が領する所の歸德軍の宋州に在るを以て遂に天下を有つの號と定む、宋十八世凡て三百二十年。◎墨蹟は筆跡なり、音義に「蹟は跡と同じ即ち書籍字帖なり」とあり、◎謌唱謌當に酬に作るべし、韻會に「言を以て之に答ふるを謌と曰ひ財貨を以てするを酬と曰ふ」とあり、此に謂ゆる酬唱とは亡僧の物を是れ何程と唱賣して幾許と酬價する

を言ふなり。律に唱衣の作法あり、畧して修治規に見ゆ、又衆器箋衾蓐類に詳なり。◎捌拾餘千、捌拾は藏本に八十に作る。官の文書、數目を記するに畳の多き字を取て之に用ふ、一を壹に二を貳に三を參に四を肆に五を伍に六を陸に七を漆に八を捌に九を玖に十を拾に作る是なり。是れ皆僞竄を防ぐ爲めなり、千は顧硃に貫に作れり。◎茶毘は梵語、此には火化とも焚燒とも譯す即ち火葬なり、一に荼毘に作る相同じ。茶の字其の始め茶の字なりしこと、字典茶字の下に出づ、又衆器箋衾蓐類の茶毘の條下に詳なり。

（講解）圓悟の法嗣なる妙喜菴の大慧宗杲和尚の仰せに、泐堂禪師は先進者の書翰墨帖を獲る毎に、必ず香を焚き己を非うして開き讀まれ、或は是ぞと思ふものは特に石に刊り付けて不朽に傳へられた、そして常に申さるゝやう、先聖方の盛德佳名は、詎とて之を打棄て置くに忍びられやうやと、其の意思の雅尚として俗氣なく高尚なること、イッモ此の通りである。故に其の死亡せられた時は、十兩の貯へもない、唯唐宋諸賢の墨跡が僅に二個の竹籠に入つて有つた許りじや、ソコで納子が競ふて其の墨跡を市買して錢八十餘貫を得た夫れを以て漸く火葬の禮を助けて、手厚く供養したりきとぞ。（可菴果は妙喜の法嗣なる雲峯悅禪師の集錄なり。可菴然禪師の集錄なり。）

妙喜曰。佛性住大潙。行者與地客相歐。（於口切。挿也。）佛性欲治行者。祖超然因言。若縱地客。摧辱行者。非爲有失。上下名分。切恐小人乘時侮慢。事不行矣。佛性不聽。未幾果有莊客殺知事者。（可菴）

△大意、主客人の是非を擇て、而して後に行ふ可きを明す。

（字釋）佛性は潙州大潙、佛性法泰禪師なり法を圓悟に嗣ぐ、◎行者は象器箋職位類下に「禪林の行者は盧能を始めとす、爾後凡そ剃度を求めて未だ度牒を買ふを得ず、有髮にして僧寺に依止する者稱して行者と爲す」とあり猶は同書に就て詳にせよ、◎地客は音義に「佃戶なり」象器箋職位類中に「莊佃なり」とあり、莊佃は農夫の莊主に屬する者たり、（佃は和名豆久太と云ふ、即ち作り田の義にて田を治むるなり、居家必用に「佃客は田を治め利を分つの人を謂ふなり」とあり、）◎祖超然は臨安府超然、佛日文祖禪師なり、法を天衣懷に嗣ぐ、◎爲は惟の字に見るべし、藏本には惟に作る、◎上下名分、此には行者は上たり地客は下たるなり、名分の字義は百九十八頁に在り、◎切はシキリニと訓ずシミ〳〵と云ふ程の意なり、又竊の字に通はせてヒソカニと訓じても會すべし◎莊客は象器箋職位類中に「莊客は即ち莊佃なり」とあれば地客と相同じかるべき乎。（一說に莊客と地客とは少し異ふと云ふ、尙ほ後考を俟つ。）

（講解）妙喜杲和尚の仰せに、同門の佛性法泰禪師が長沙府下の大潙山に住して、偶〻行者某が下作の百姓と何厮の言逆より互に杖なども持て鬪き合をしたソコで

佛性住持は行者の罪を糺して下作人を救さうと思はれた、時に超然文祖といふが居て因に申すやう、若し下作人を擯し遣つて行者のみを擢き辱むるやうな事しては、是れ惟上下の名義分限を失ふこと有る許りでなく、切に恐るらくは、下の小人共が時に乘ずして、即ち其の甘口に付揚つて、遂には必ず上を侮り慢つて萬事行はれぬ樣になるであらうとお諫め申上た然るに佛性は之を聽入られざりしが其の後幾等も時日を經ぬのに、超然の案に違はず寺に抱へ、の百姓の中に、無法にも知事役の僧を殺す者の有りきとなり。

妙喜曰。祖超然住仰山。地客盜常住穀。超然素嫌地客意欲遣之。令庫子行者爲彼供狀。行者欲保全地客。察超然意。抑令供起離狀。仍返使叫喚。不肯供責。超然怒行者擅權。二人皆決竹篦而已。蓋超然不知陰爲行者所謀。嗚呼小人狡猾如此。（碧巖）

△大意、小人欺詐の巧なるを說き、以て主者の常に注意せむことを促す。

（字釋）起離狀は蓋し暇狀か、百丈清規住持章、新命辭衆上堂に「茶湯して云起離の日に至り專使諸寮に詣して別る云云」の事あり、◎決竹篦は言ふは笞つに竹篦を以てして其の罪を決斷するなり竹篦は象器箋器物類上に詳なり、◎狡猾は共に

コザカシと訓ず、惡る巧みなることなり、音義に「好顏詐り多き也」とあり、左傳昭公二十六年傳に「天法を奬順して狡猾を助くること無し」の語あり。

（講解）妙喜和尙の仰せに、祖超然禪師が袁州の仰山に住しつ、地客某が常住の穀物を盜み取つた、住持の超然素より地客を忌み嫌ふて居たので、意中に其の者を放逐せうと思はれたが、ソコで庫司に屬する行者に申付て地客が爲めに罪狀を書て進めさしたのよ、然るに其の行者は地客最負であつたから、之を構ふて無事に令て遣らうと思ふ、唯、住持の意中を推察して抑へ過つて起離狀として所拂の狀を供せしめた、是れは內通して置いて故と嚴うして住持を騙す手段である、ソコで行者は大聲で出て行け立退けよと喧けば、地客は其のやうの無理な處置では、ヱ、立退きはせぬと强情に叫び喚はらしめた、行者は肯て住持の申付た通りの口書を取らで、反て我儘に早や笞めて立退きの處分に及ひたのとや超然乃ち行者が斯く權柄を擅にするを怒つて、其の業腹紛れに二人を竹篦で食はして其の罪を決斷したゆゑ、重き罪も僅に竹篦で事濟となつた。蓋し超然が陰かに行者の爲めに謀らるゝことは氣の附かなむたのとや、烏乎小人の狡猾ことは斯樣な次第であるから、能々注意すべき事にてそ。

妙喜曰。愛惡異同。人之常情。惟賢達高明。不被其所轉。昔圓悟住雲居。高菴退東堂。愛圓悟者惡高菴。同高菴者異圓悟。由是叢林紛紛然。有圓悟高菴之黨。竊觀二大士。播大名于海上。非常流可擬。惜乎昧於輕信小人。諂言惑亂聰明。遂爲識者咲。是故宜其亮座主隱山之流。爲高上之士也。智林集

△大意。二師の愛惡心あるを惜みて、淡泊の尊ぶ可きことを明す。

(字釋)東堂は當寺前住の人の稱謂なり、舊說に「東堂は當山の前住なり西堂は他山の前住なり本と位の高下を謂ふに非ず云云」とあり、蓋し東は是れ主位なり前住の人は是れ舊主故に東堂に居る、西は是れ賓位、他山退院の人の此山に來る是れ賓客なり故に西堂に處るものとす、猶ほ象器箋稱呼類に詳なり、◎紛紛は〻ダルゝと訓ず、雜亂の貌、俗に分も無き事と云ふに同じ、◎擬はナズラフと訓ず引きくらぶるなり、◎亮座主は西蜀の經者なり、常に經論を講じて一座を主る故に座主と云ふ、要覽稱謂部に、今禪氏學解の優贍拔の者を取て座主と名く、謂く一座の主なり、古の高僧講者を呼で高座と爲す、或は是れ高座の主とあり、因に亮、馬祖に參じて其の法を得遂に洪州の西山に隱れて更に消息なし、宋の徽宗の政和年間に熊秀才といふもの有り、洪州の西山に游ぶ、經る所の林壑陰翳す、偶一僧を見る、貌古り神清くして厖眉雪項なり、衆を繞みて衣と爲し盤石に趺坐す、熊自ら謂らく今時這般の僧なし、登で

問く亮座主西山に隱ると、疑らくは其れ猶ほ健在なるか、乃ち前み出でゝ問ふて曰く、是れ亮座主なること莫らむやと、僧手を以て東に向て指す、熊方に手に隨て省る、回顧すれば僧の所在を失す云云、事辭に大慈武庫卷上に見えたり、◎隱山は前の雪堂の章に見ゆ。

(講解)妙喜和尚の仰せに、愛惡異同は庸人の常の情である、惟賢達高明の士のみは、其の心磐石であるから他物の爲めに轉せらるゝ事は無い。昔し先師の圓悟が雲居に住せられて從兄弟の高菴が東堂に退いて御座つた、即ち一山に隱當の二大士が有つたのである、ソコで當住の圓悟を愛敬する者は前住の高菴を惡み、高菴に贊同する者は圓悟に異ふ、是に由て叢林の衆が紛々然と入り亂れし圓悟高菴の兩黨派あるに至つた。以下妙喜の評語 竊かに二大士を觀察するに、洪大の名譽を四海に播揚せられて却々常流輩の擬ふ可き所の事では無い、唯殘念なのは二大士ともに輕輕しく小人の諂言を信ずるに昧まされて聰明を惑亂し、即ち彼此反目黨爭するに至つて遂に世の識者の爲めに咲はる、是の故に宜しく其れ蜀の亮座主が馬祖に參じて心要を發明したる後に西山に隱れ、潭州の隱山和尚が馬祖の室に入て大事を得たる後に龍山に隱れた者流は、何れも無我無心で最も高上の士たるべきじや。智林集は庶山智林集なり。

妙喜曰。古人見善則遷。有過則改。率德循行。思免無咎。所患莫甚於不知其惡。所美莫善於好聞其過。然豈古之人。才智不足。識見不明而若是耶。誠欲使後世自廣。而狹於人者。爲戒也。夫叢林之廣。四海之衆。非一人所能獨知。必資左右耳目思慮。乃能盡其義理。善其人情。苟或尊居自重。謹細務。忽大體。賢者不知。不肖者不察。事之非不改。事或是不從。率意狂爲。無所忌憚。此誠禍害之基。安得不懼。或左右果無可諮詢者。猶宜取法於先聖。豈可如嚴城堅兵無自而入耶。此殆非所謂納百川而成大海也。（與寶和尚書）

△大意、主者衆心に隨ふと私心に任すとに由て禍福の別あることを明す。

（字釋）率循は共にシタガフと訓ず。路又は腦などの動かぬものに添ひ行くことにて何れも同義なり。中庸に「性に率ふ之を道と謂ふ」朱註に「率は循也」とあるも性に添ひ從ふ意なり。◎自廣は本講義二百七十頁に釋おり。◎納百川云云、頭書所引の說苑は辨物篇に見ゆ。又說文に「海は天池なり以て百川を納るゝ者也」とあり。

（講解）妙喜和尚の仰せに、古人は人の善事あるを見るときは、必ず之に遷て己を益せむとし、己の身に過失あるを知るときは、必ず之を改めて善に歸せむとするのである、殊に古聖の德に率ひ古賢の行に循ふて之に因り免れて身に咎なからむことを思ふのである、患とする所の事は己が惡事を知らぬより甚しいことは莫く、美とする所の事は己が過失を聞くことを好むより善きことは莫い、併し豈とて古の人が才力智慧の足らず識慮見理の明ならずして、斯樣にせらるゝであらうや必ず然うではあるまい、誠に後世の學者が自分が自分と廣大に構へ込で人を狹小なりとする者に警戒と爲使うと欲するからの事じや。扨て叢林の廣い四海の衆い、主者一人の能く獨り知り得らるべき所のものでない、必ず左右に侍り居る者の言ふ事行ふ事を見たり聞たりするのが、卽ち之を他の耳目に資て廣く思慮すと云ふので、ソコで能く其の宜きに合ふの理を盡し其の衆の人情を善するを得べし、是れぞ誠に幸福の本なりける。苟し或は之に反して、主者たるものの尊大に居て自ら重うし、必要もない細務を謹み反て事の大體を忽にして、賢者を始ち知らず不肖者をば察せず、事の非なるをも改めず事の或は是なるをも從はず私意に任せて丸で狂人の樣な所作を爲して忌み憚る所なければ、此れ誠に禍害の基じや、安してマア懼れずに居られやうぞや。或は左右の者に於て諮ひ詢る可き底の人なければ、猶ほ法則を先聖に取るが宜い、豈とて嚴重な城を構へ堅固な

兵を備へて、何れよりしても他の耳目の入るべき道の無い樣にすることが出來やうや、何でも城府を押廣いて視聽を聰明にすべき事である、此れは殆ひと世の聞ふ所の種々雜多の川流を擇り嫌なく受け納れて、ソレで大海を成すと云ふものであらうがやとなり。（與賢和尚法賢和尚に與ふる所の書なり。）（賢和尚書は妙喜が其の法嗣の大賢和尚に與ふる所の書なり。）

妙喜曰。諸方舉長老。須舉守道而恬退者。舉之則志節愈堅。所至不破壞常住。成就叢林。亦主法者。救今日之弊也。且詐佞狡猾之徒不知羞恥。自能諂奉勢位。結託于權貴之門。又何須舉。（與竹菴書）

△大意、枯淡清閑を守り個事を究明する底の者を舉げて、叢林の主と爲すべきことを明す。

（字釋）恬退は恬淡謙退なり、心安靜にして無欲なるを恬淡と稱す、恬は徒兼切、ツヅガと訓す、驚の反對にて心に念慮の驚動せぬことなり、莊子繕性篇に「恬を以て知を養ふ」とあり、◎諂奉は先の云ふ通りに讒媚取りして從ふを云ふなり。

（講解）妙喜和尚の仰せに、諸方の叢林、住持たるの長老を選擧せむには、須らく道德を守つて恬然と靜かに退いて爲人たることを願はざる底の者を擧げねば叶はぬを、斯樣な者を擧ぐるときは、志向節操が愈堅固であつて、至る所無論常住を

破り壞ることなく、百廢悉く擧げて叢林を成就さするのである、左れば亦法を主る者に因て今日の衰弊を救はるゝと謂ひつべきしや。（以下惡住持の狀を說く若し且た之に反して詐僞便佞に狡猾の徒輩は、心に咎めて羞ぢ恥づることを知らず、自ら能く勢力祿位の人に諂ひ仕へて利を求むるに汲々とし權威高貴の門に好を結び託み込で名を求むるに孜々とするのである斯る名利に奔走するの長老は、又何とて選擧することに須ばうぞや。（與竹菴書は妙喜より佛眼の法嗣なる温州龍翔の竹菴士珪禪師に與ふる書なり。）

妙喜謂超然居士曰。天下爲公論不可廢。縱抑之不行。其如公論何。所以叢林擧一有道之士。聞見必忻然稱賀。或擧一不諦當者。衆人必感然嗟嘆。其實無他。以公論行與不行也。嗚呼用此可以卜叢林之盛衰矣。（與超然居士書）

△大意、主者、人を擧用せむには、宜しく衆望に隨ふべきを明す。

（字釋）超然居士は郡王趙令衿字は表之なり、南康に都郡たり、超然居士と號す、法を圓悟に嗣ぐ。◎諦當は本講義九十頁に釋す。◎卜は同二百二十六頁に釋す。

（講解）妙喜和尚が同參の超然居士に謂て申さるゝやう、天下に公論として偏頗なき公平の論は、廢物に致して置くことは出來ぬ、縱むば此の公論を何樣に抑へ止

めて行ふ士としても、ソラ公論といふものは確乎たる正理であるから、ソレは如何もなるものでなく必ず行はれるものである。所以に叢林に於て公に一人の有道の士を擧れば、聞見の衆は必ず忻然と喜で稱し賀することである、或は私に一人の諦當ならぬ者を擧れば、衆人必ず感然と憂て嗟き嘆くことである、斯く一人は直ちに稱賀し一は直ちに嗟嘆するものは他では無い唯其の善なる公論は行はれて不善なる不公論は行はれぬからの事じや、嗚呼此を用てソレで叢林の盛衰を卜ひ知らるゝである。

妙喜曰。節儉放下。乃修身之基。人道之要。歷觀古人。鮮有不節儉放下者。年來衲子。遊荊楚買毛褥。過浙右求紡絲。得不愧古人乎。

△大意、古人は節儉放下を旨とし、今人は奢侈贅澤を極むるを明す。

(字釋)荊楚は本講義二百五十四頁に出す。◎買毛褥、買の字和刊本賣に作るは非なり、今藏本に據て改むること爾り、毛褥は毛を以て作る所の坐褥なり、褥はシトネと訓ず坐臥の時の敷物なり、潛確類書九十二に青毛褥獸毛褥等を出す。◎浙右云云は一統志三十八浙江杭州府の土産に絲綿の類を出す。

(講解)妙喜和尚の仰せに、一切を節量儉約にして欲い愛いの諸緣を放下するは、

乃ち是れ身を修むるの基本であつて道に入るの要徑である、古人を一々調べ觀るに、節儉放下せられぬ者あること、鮮し。然るに近年來の衲子は荊楚の地へ遊ぶと、其の名物なる毛織の藉物を買ふのは、我が雲水が上方で鳥毛坐蒲團を作るの類にて、是れは奢侈の沙汰である、又浙右の地を過ると、其の土産の紡細絲織を求むるのは、我が雲衲が越後縮を買ふて袈裟にする樣なもので、是れも亦贅澤の次第である、何とて古人が枯澹道を樂むの行爲に愧ぢ無いことが出來やうぞや。

妙喜曰。古德住持。不親常住。一切悉付知事。掌管。近代主者自恃才力有餘。事無大小。皆歸方丈。而知事徒有其虛名耳。嗟乎苟以一身之資。固欲把攬一院之事。使小人不蒙蔽。紀綱不紊亂。而合至公之論。不亦難乎。與二山堂二書

△大意、主者は一事懷に懸けず、專ら務めて人を得ひとすることを明す。

(字釋)掌管は司掌管領の義なり、其の持分を取扱ふを掌といひ、其の事を總べ理ひるを管と云ふ。◎方丈は長老所歸の室なり、唐の顯慶年中使臣を印度に遣はす、乃ち毘耶黎城に至り維摩の宅趾に於て、其の疾を示したる室の壁右を檢量するに方十笏を得たりと云ふ、故に方丈の稱起れり、頭書要望を引く所、承は丞、計は計の誤なり、今日寺院中に

於ける正寢を云ふ轉じて住持僧を呼ぶに用う、是れ長老は常に方丈に居するを以てなり、象器箋殿堂類、上に詳なれば、往て披け、◎把・攬は共にトルと訓ず把は把握と運用して我が手に握り持つことなり攬は總攬と運用して我が方へ取り纏めて仕舞ふことなり、◎蒙はクラシと訓ず、音義に『欺昧遮掩を蒙と曰ふ』とあり。

（講解）妙喜和尚の仰せに、古德の住持は、唯大法を主張し衲子を提撕して、常住一切の事を躬親らせられぬ、何故と云ふに常住一切の事は悉く知事に分付して支配させて居るからの事である、然るに近世の住持は自ら才能智力の餘りあるを心ゝ便にして、事大小の差別なく皆住持の一ッ所に歸して居る、而して知事の如きは徒らに知事と云ふ虛しき名義の有るのみぢや、嗟乎、苟且にも住持たる者、僅に一身の用に立つる資を以て、固に一山の數限りも無い事を一手に取つて支配する許りでも仕難いものなるに、ソレに小人をして蔽ひ蒙ますぬ樣にし、大小紀綱の紊れ亂れぬ樣にして、至極公平の論に合はせむと思ふのは、亦仕難い事では無きか、仕難い事であるどとなり。（眞三山堂雲山堂は妙喜より草堂の法子なる山堂靈和尚に與ふる書なり。）

妙喜曰。陽極則陰生。陰極則陽生。盛衰相承。乃天地自然之數。惟豐亨宜乎日中。故曰。日中則晨。月滿則虧。天地盈虧。與時消息。而況於人乎。所以古之人當其血氣壯盛之時。慮光陰之易往。則朝念夕思。戒謹彌懼。不恣情不逸欲。惟道是求。遂能全其令聞。若夫隳之以逸慾。敗之以恣情。殆於不可救。方頭足扼腕。而追之晚矣。時乎難得而易失。（蘇林集）

△大意、光陰往き易し、須らく少壯にして刻苦すべきを警誡す。

（字釋）豐は䷶（震下離上）雷火豐なり、卦辭に『豐は亨る、王之れに假る、憂ふること勿れ日中に宜し』とあり、豐とは大なり明を以て動く盛大の勢ひなり、盛大なれば百事通ず、故に其の占亨るの道ありとす、王は五を指す五豐時の君にして尊位の假る、なり、蓋し事物の理勢を見るに其の盛大を極むれば、變へ必ず將に至らむとす、日も午を過ぐれば則ち昃き、豐も盛を極むれば則ち衰ふ、故に必ず變ふるの道ありとす、唯聖人に於ては滿を持するに中を以てせむことを忘れず、是を以て徒らに憂へて益なしとして日中に宜しと戒められたり、凡そ常を守て能く謹み過盛に至らしめざれば明有つべく滿持すべし、是れ身を行ふの宜しきなり、◎消息は音義に『陰死を消と爲し陽死を息と爲す』とあり、◎血氣は少年の時の盛なる氣性を云ふ、◎光陰は月日なり又日陰なり、晝を光といひ夜を陰といふ義なり、◎逸は

シイヤ、と訓ず、牛馬などの群を放れて駈出の義より轉ず、◎令聞は善き名の遠く達するを云ふ、◎隳はヤブルと訓ず壞なり又毀なり、◎殆はチカシと訓ず危き意あり、國語に『必ず弊るに殆き者なり』とあり、◎頓足扼腕は本講義二百五十八頁に釋す、◎時乎云云、史記淮陰侯傳に『夫れ功は成し難くして敗れ易く、時は得難くして失ひ易し、時乎時乎、再び來らず』とあり。

（講解）妙喜和尚の仰せに、凡そ春より夏に至つて夏の陽氣の極まるときは陰氣の生ずるものゝ、又秋より冬に及ぶ冬の陰氣の極まるときは復た陽氣の生ずるものゝ、斯く陰陽互に推移りて盛衰相承くるものは、乃ち是れ天地自然の運數である。惟れをば易の雷火豐と云ふ卦に豐は亨る日中に宜しとある、此の卦の辭は豐盛を保持するの道を說たのゝ、豐とは盛大の名にして明以て動くことなれば、盛大の勢あるから豐と名けたのゝである、左れば何事か亨らざらむ必ず亨るの道ありとするのぢや、左りながら此の豐盛に至つて其の全盛を極むれば、必ず復た衰勢に向ふの端ゝである、唯日中に宜しと戒められたものゝである。凡そ豐盛の時も中を守ると日の天の中に在るが如くなれば、謂ゆる滿つれども溢れず竭けれども危からざるを得て、此に其の豐盛を保持することを得べし、故に孔子が其の彖傳に於て斯く曰はれき、日も昇つて天の眞中に在るときは夫より後は刻々移り去

つて昃き、月も十五夜に於て眞圓に滿ち切つたときは夫より後は漸々虧け來つて滅る、天地陰陽の氣も亦盛むに盈つれば其の後必ず虧け衰へて、一往一來の造化も時と消息進退するものゝ、而るを況て此の天地の間に生れたる人なれば猶は以て之が榮枯盛衰を免れむやとなり、左れば能く盈虧消息の理を知て萬事其の中を過ぎざるやう、自ら戒むる所を知らねばならぬ事ぢや、所以に古の達人は血氣の壯り盛むなる少年の時に當つて光陰の往き易いことを惜ゝ深く苦慮せられた、其の樣如何にぞとなれば、則ち朝に念ひ夕に思ふて戒め謹ゝ彌ゝ懼れ、妄情を恣にせず嗜欲を逸にせず、惟斯道を是れ求むるのみゝである、斯樣であるから遂に能く其の令聞を善き名譽を全く保つことを得らるゝのゝで、即ち豐は亨る日中に宜しとの道理である、若し夫れ之に反して血氣壯盛の時に、慾を逸にし情を恣にするを以て朝に念ひ夕に思ふの謹戒を怠り敗らば、時空しく去り年徒らに老いて復た救ふことの出來ない樣に立ち至るゝである、此の時に及ゝ方に之を救はむものゝ、足を頓らし腕を扼つて如何に急つゝ之を追ふとも最早手晩の沙汰にして、彼の日の西に昃き月の漸く虧けたるゝ一般ぢや、却説も好時機と云ふものは取り得ることゝ難うして失ひ易きものなれば、何ゝも血氣壯盛の時を失はぬ

やうに致さねばならぬ事である。（林渠は向子諒字は伯恭自ら蘇林居士と稱す、蘇此人の渠なる歟居士は紹喜と同時の人なり。）

妙喜曰古人先擇道德次推才學而進當時苟非良器置身于人前者見聞多薄之由是衲子自思砥礪名節而立比見叢林凋喪學者不顧道德少節義無廉耻譏淳素爲鄙朴奬囂浮爲俊敏是故晩輩識見不明涉獵抄寫用資口舌之辯日滋月浸遂成澆漓之風逮語于聖人之道嘗若面牆此殆不可救也（與三子書）

△大意、今古の不同を說て、唯學解を恃み口舌を逞うするを戒む。

（字釋）砥礪は琢磨なり（本講義二百六十三頁參照すべし）鄮陽カ上書に『名號を砥礪する者は利を以て行を傷らす』の語あり、◎比はコノゴロと訓ず、世說に『先生比ろ佳なるや否』とあるが如し、此には近年の義に見るべし、◎是故、故の字和刊本致に作りて成澆漓之風の句より轉せり亦通せざるに非れども藏本故に作るの妥當なるに如かず、依て爾く改めり、◎涉獵は博洽の名を釣らひ意を以て多くの書卷を繙くも、唯閲覽することの疎略にして終に深奥の旨を見ること能はざるの喩なり、彼の深き水を涉らむに舟筏を用ゐずして雜と涉するが如く獸を獵せむとて曠野を急疾に馳せ廻るに似て卽ち丁寧にせざるの謂なり、成語考に『涉獵精しからざるは是れ多

學の弊なり』とあるは是なり、◎抄寫は抜萃に同じ、抄は鈔と同字にてカキヌグと訓ず處々を抜き寫すことなり、日藏經護塔品に『或は此經を抄寫す』とあり、◎澆漓は共にウスシと訓じて二字同義なり、淳の反對にて世の風俗の薄きに用ふ、◎嘗は曾蒙、眼の明ならざる貌、◎面牆は論語陽貨篇、朱註に『言ふは其の至近の地に卽て一物も見る所なく一歩も行く可らず』とあり。

（講解）妙喜和尙の仰せに古人が住持を擧るには、先づ道學德行ある者を擇り出し次に才力學識ある者を推し出して進め用うる事である、故に當時に在て苟も善良の器量でなくて身を人前に置いて謾に住持顔する者をば、見聞の衆人が多く之を輕ひじ溺むする事ぢや、是に由て衲子躬自ら暗地裏に名實節義を砥礪いて世に立たむことを思ふ、古人の所作實に此の如くなるのである、晩近の僧風を見るに何れの叢林も凋み喪せて祖庭蕭々として秋晩の狀を呈した、學者は實悟眞修の道德を顧みず、不變の節義心もなく耻を知るの廉耻の念もない、殊に淳厚素實なるを譏つて野鄙朴訓と爲し、咀嚼浮華なるを奬して俊秀敏活と爲すのである、是う云ふ譯ぢやから、晩學輩が識見明ならずして徒らに涉獵抄寫を事とし、それで口舌の辯を資けて日に滋し、月に浸して次第に末流に馳せ、遂に澆漓

とて不實輕薄なる風を成すに至つた斯樣な者に對して聖人の大道を語るに遠
ては、瞽然として宛ら牆に面を當てゝ立つて居る樣なもので、一足も行かれず何
一つ見ることも出來ず丸で差詰つた盲目同前よ、斯る樣と成つては此れ殆ひと
救ふに救はれぬのみか最と危きことの限りである。（與三子書は藏本には與中子書とせり。）

妙喜曰。昔晦堂作黃龍題名記。曰。古之學者。居則巖穴。食則土木。衣則皮草。不係心於聲利。不籍名於官府。自魏晉齊梁隋唐以來。始剏招提。聚四方學徒。擇賢者規。不肖者俾。智者導。愚迷由。是賓主立。上下分矣。夫四海之衆。聚于一寺。當其任者。誠亦難能。要在終其大捨。其小先。其急後。其緩不爲私。計專利於人。比汲汲爲一身之謀者。實霄壤矣。今黃龍以歷代住持題其名于石。使後之來者見而目之。曰。孰道德。孰仁義。孰公於衆。孰利於身。嗚乎可不懼乎。

△大意、主者は大綱を提げて小節に關せず、惟ゝ道德を專要とすべきを明す。

（字釋）黃龍は一統志四十九南昌府下に在り、宋の隆興の初め隆興府に屬す、黃龍山は寧州の西一百八十里に在り、相傳ふ吳の黃武中に黃龍此に見はるゝ故に此

の名あり、黃龍院は實に此處に在り、◎題名記は黃龍歷代住持の名を石に題する
の記文なり、題はシルスと訓ず目に付く樣に書き誌すことにて題石題壁の類是
なり、記は文の一體にて事を紀するの文なり、有る事を其の儘に記し敍づ略議論
を雜ふるを體とす、◎籍名は名を公議の帳に記するを籍すと云ふ、前漢書元帝紀
通鑑註に「籍は謂く二尺の竹牒に其の年紀名字物色を記して之を宮門に縣く、案
省相應じて乃ち入ることを得る也」とあり、◎官府は周禮、註に「百官の居る所を官
府と曰ふ」とあり、◎魏は曹氏なり、操魏王と爲る、子の丕漢を簒ひ自立して帝と稱
し國を魏と號す、◎晉は司馬氏なり、炎父懿の爵を襲ぎて晉王と爲り尋で魏の禪
を受く故に國號を晉と云ふ、◎齊は蕭氏なり、道成齊王より起りて宋の禪を受く
宋は南北朝の宋にて晉の禪を受くるもの故に齊を以て國に名く、◎梁は蕭氏なり、衍梁王より起りて齊
の禪を受く故に梁を國號と爲す、◎隋は楊氏なり、堅隋王となりて北朝周の位を
移し遂に隋を以て國號とす、隨古は隋の字を用ゆ、楊堅その遁走に近きを以て辵
を去りて隋に作れり、◎唐は李氏なり、淵唐王より起りて遂に隋の禪を受く故に
國を唐と號す、◎剏はハシムと訓ず創と音義相同じ、是れ草創の義にて新に仕初
むることなり、◎招提は本講義三百九十六頁に釋す、◎終は總の義に見るべし、◎

汲汲は君義に「小人利の爲めにして少くの暇なし」とあり、汲は元來くみと云ふ字にて餅器を用ゐて井水を汲まむに、急に繩を引かざれば漏れて得ること少し、故に引くことを急疾にするが如く事を弛べざるを汲々と云ふ。

（四百七十二）

（講解）妙喜和尚の仰せに、昔し晦堂祖心禪師が黄龍山の隆興府下黄龍院歴代の住持が題名記を作つて後人の鑑戒に供へられた、其の文に曰く、古の學者が住居する處はと云ふに巖穴樹下である、食ふ所の物はと云ふに土芋木實である、衣る所の服はと云ふに木皮麻草である、斯く衣食住に於て已に足ることを知れるから、身は塵世を離れ跡を煙霞に寄せて、敢て心を聲聞利養に係けず名を官府の帳簿に著はさ無い。然るに魏晉齊梁隋唐と次第に世を經てより以來、始めて十方住持の招提を剏立して四方の學徒を聚め寄せた、乃ち賢達の者を擇で不肖の徒を規し、智者をして愚迷の者を導かせたのぢや、是に由て全く賓主の差別が立ち上下の分限が分れたのである。扨て四海の大衆が一寺院に聚會するに至つては、其の住持の任に當る者は誠に其の責任が重いから、諸事不都合のないやうに致すのは亦甚だ六ヶ敷い事で、畢竟するに唯、其の大綱を總べ提げて其の小事を打ち捨て其の急務の事を先き立て〳〵其の遲緩にしても苦しからざる事を後にして、總

に事の順序を見計つて而して其の身一個の爲めに計らず、專ら人を利せひとするに在るのみで之が卽ち住持の要務なるのである、之を彼の汲々と急つて已れ一身の爲めに名利を目論見て隙なき者に比ぶれば實に是れ天地の相違がある。今黄龍歴代の住持を以て其の名前を石に題すことぢやが、サテ後の來つて見る公衆の者をして、之が名前を逐一見て而して之を指し目して就は道德ありし就は仁義ありし就は衆に公平なりし就は一身を利せしと曰はせうとするのぢや、嗚乎斯る事を熟思ひ回せば後の住持たる者は何とて慢れ慢まずに居られやうやとなり。

因に云ふ本篇は司馬光が諫院題名記に本づくものとす、（君上に諫諍するの官を諫議、諫正、司諫などと名く、其の官人居る所の屋を禁宮の傍らに建設す、之を諫院と名くるは宋の仁宗の明道元年に諫執中を以て諫官に定めたるより始れり、同帝の嘉祐八年に司馬光が其の官に用ゐらるる人の戒慎に供せむとて前後諫官に擧げられし人の名を石に刻して併ふ之を題名記と云ふ、依て左に其の全文を掲げて參照に供することゝはなしつるなり。

古者諫無官、自公卿大夫至于工商、無不得諫者、漢興以來始置官、夫以天下之政、四海之衆、得失利病、萃于一官、使言之、其爲任亦重矣、居是官者、當志其大、捨其細、先其急、後其緩、專利國家、而不爲身謀、彼汲汲於名者、猶汲汲于利也、其間相去何遠哉、天

（四百七十三）

禮初。眞宗詔置諫官六員。貫其職事。慶曆中。錢君始書其名于版。光恐久而漫滅。嘉祐八年。刻著于石。後之人將歷指其名而議之曰。某也忠。某也詐。某也直。某也曲。嗚呼可不懼哉。

張侍郎子韶謂妙喜曰。夫禪林首座之職。乃選賢之位。今諸方不問賢不肖。例以爲僥倖之津途。亦主法者失也。然則像季固難得其人。若擇其履行稍優。才德稍備。識廉耻節義者居之。與夫險進之徒。亦差勝矣。（可卷）

△大意　叢林の主法者は、專ら賢者を擧げて不肖者を退くることを明す。

（字釋）張侍郎子韶　姓は張氏、名は九成、字は子韶、號を無垢子と稱す。妙喜の法嗣なり、南宋高宗に仕へて侍郎と爲る。侍郎は文書を作り草を起すことを主る事物紀原卷五に「漢の制に尙書郎三歲にして侍郎と稱す。隋の煬帝位に卽て尙書の六曹に於て各侍郎一人を置く（一曹に六人あり故に按ずるに漢の百官表に侍郎あり秩四百石に比す也）」とあり。◎津途　は渡場陸路にて人の通行すべき處なり、音義に「水を渡る處を津と曰ひ、陸行の處を途と曰ふ」とあるが如し。◎然則　は本講三百四十八頁に釋す。◎履行　は二百四十一頁に釋す。◎險進　は何でも構はず出世さへすれば可いとの事にて中庸に謂ゆる「小人は險を行て以て幸を徼む」の義なり、以て僥倖之津途の句に應ず。◎差　は二百三十八頁に釋あり。

（講解）侍郎の官に在る張九成字は子韶といふが、其の師の妙喜和尙に謂て申すやう、扨て禪林首座の職は師家に成代つて衆を接得するの重職であるから、乃ち德業兼備の賢者を選で之に充つべきの位階である。然るに今諸方を見渡すに賢者と不肖者とを問はず、丸で常例の如くになつて此の職に充てられなば、ソレで出世するのを僥倖の津途と爲す、抑亦法を主る住持の過失である。併しながら像末澆季の今日にては、固に首座の職を塵さゝる其の適當の人物をば得難い、若し其の履行の稍優かに才德の稍備つて、廉耻節義を識る底の者を擇り出して此の職位に居らしめなば、夫の險を冒して當に得べからざるの幸を求めて進まむとするの徒と、亦相較べて見れば勝ることであらひとなり。

妙喜謂子韶曰。近代主法者。無如眞如喆。善輔叢林。莫若楊岐。議者謂。慈明眞牽作事。忽畧。殊無避忌。楊岐忘身事之。惟恐不周。惟慮不辨。雖衝寒冒暑。未嘗急己。惰容。始自南源。終于興化。僅三十載。總柄綱律。盡慈明之世。而後已。如眞如者。初自東包行脚。逮

于應世領徒。爲法忘軀。不啻如飢渴者。造次顛沛。不遷色無疾言。夏不排窓。冬不附火。一室翛然。凝塵滿案。嘗曰。衲子內無高明遠見。外乏嚴師良友。勘克有成器者。故當時執拗如孚鐵脚。倔强如秀圓通。諸公皆望風而偃。嗟乎二老。實千載衲子之龜鑑也。（可謂記陽）

△大意古人法の爲めに身を忘れて、叢林を輔弼することを明す。

（字釋）輔・弼は共にタスクと訓す。輔は扶けて控をする意なり。字書に「兩旁車を夾む木也」とあり。是れ車輻の輔けぬ樣に兩旁に控木をして置くことなり。故に輔けぬ控をして向ふを扶くるに用う。弼は助けて歪を直す意なり。字書に「弓を正す器也」とありて弓の歪を揉ひる木なり。故に己を正しくして向ふの過失の無き樣に法を守らするに用う。◎眞率は文飾を用ゐずして天質の儘なるを云ふ。世說七に「時論以て之を固くす。豐華は曼公の眞率に如かず」とあり。◎衙は向ふに何が有るとも樗はで衙き當ることにて、此には寒を厭はず行くことなり。◎始自南源云云、音義に「楊大年、書を以て宜春の太守黃守旦に抵して、師を請して出世說法せしむ、守、南源を以て請を致す。後に神鼎に躡す。鼎嘆じて曰く、汾陽に此の見ありやと。師此より名四方に重し。定林の沙門本延と云ふもの道行あり。雅より士大夫の爲め

に敬信せらる。鼎が慈明の知見、臨濟の道を興す可しと稱讃するを見る。時に道吾席を庶くす。延、都守に白して請して以て之を主らしむ。法令整肅、躬を忘れて衆の爲めにす。後に石霜に遷り又福嚴に居し又興化に住す」とあり。◎僅はホトンドと訓す。字書に此の訓を下さずと雖も、文勢に依りて殆の意に用うるは唐より後に多し。白氏文集に「著文僅千首」元微之集に「諫草僅逾百軸」とあるが如し。又近の義に見るも通ずべし。开は本講義三百六十一頁に詳にせり。◎總・柄・綱・律は音義に「統束なり。謂ふは叢林を統束し僧任を權衡し、綱を立て紀を陳べ規繩を整頓して時の弊を救ふ也」とあり。柄は持なり。乘に通ず。◎束包は裝包を結束するを謂ふ。勅修清規卷下裝包下に「衣被をば前後の包に束ぬ」とあり。包は包袱にて衣襆なり。象器箋行裝具に詳なれば就て見よ。◎造次・顛沛・造次は百八十四頁に釋す。顛沛は急に物の覆り落ることを顛と云ひ、轉け掛りて靡くを沛と云ふ。論語朱註に「顛沛は傾覆流離の際」とあり。◎翛然は三百三十一頁に釋す。◎案は几なり和名抄之萬都岐と云ふ。又脇息に同じ、座傍に置きて臂なを掛け體を支ふる具なり。小さき机の如き拵へ方とす。◎執拗は音義に「剛硬孤高にして人情に近づかず」幼學須知に「執拗は是れ己が性を執するなり」とあり。拗は於敎切、モトルと訓じ字書に「戾固相違也」と

註す、故にひとすね意地張りたる氣質を執拗と云ふ、主安石を執拗夫と呼ぶも、安石自ら所見を信じて惑に執して固さが故なり◎孚鐵脚は陳后山集八、送法寶禪師詩に「平生夫鐵脚、道價喧宇宙」任淵註に「長蘆應天禪師初め圓通秀に參ず、秀化主と作さしむ、一郎の中に至る、娼女あり毋の爲めに迫られて其の房に入て肯て去らず、師跏趺して且に達る、錢を以て之を遣る、仍て火を索めて其の布單を焚て去る、叢林因て之を夫鐵脚と爲す、張無盡嘗て鐵笛引を作ると云ふ」とあり、是れ頭書所引の韻府の記事と相同じ、又大慧武庫卷下に長蘆夫鐵脚の稱ありて其の冠註にも亦應夫の事を擧げたり、然るに音義には永孚禪師と爲す、永孚に這般の故事なきこと頭書に辯ずるが如し、左れば孚、鐵脚は當に夫鐵脚に作るべし、◎倔强は情の剛きことなり、前漢書陸賈傳、師古の註に「屈强は柔服せざる也」通鑑綱目、唐德宗紀集覽に「屈强は屈通じて倔に作る、疆梁梗戾にして柔服せざるを謂ふ也」とあり、◎龜鑑は百七十三頁元龜の下に釋す、

（講解）妙喜和尚が其の法嗣の張子韶に謂て申さるゝやう、近代法を主つて親しく接衆したる者は眞如、慈明に及ぶ者は無い、詰は翠巖可眞の子翠巖眞如―慈明―圓悟―妙喜―楊岐―白雲―五祖―持を輔弼たる者は、楊岐、方會に過ぐる者は莫い。會は楊岐の子にして慈明の孫たり、其の接衆の事實は頭書に見ゆ、されば此に載せず又曾く叢林に在つて住

會が慈明を輔佐したる事は頭書に見ゆ）に當る、世の議者は謂らく、以下楊岐を說かむとして先づ其の師なる慈明の短所即ち師へ難き所を擧ぐるが故に姑ら楊岐の師なる石霜、慈明禪師は、眞率と飾りなくて、人を殺けて之を言ふなり、事を作すに輕忽疎略で、避け廻はり忌み憚ることと無く、即ち遠慮會釋なくて如何なる難き事でも弟子共に命するぢやと。斯く六ケ敷き人なるにも拘らず、楊岐はその身のあるを打ち忘れて之に事へて行つた、惟輔佐の周く行屆かぬ事の有らむかを氣遣ひ、惟辨する事の至らぬ節の有らむかを心配するのみで、故に膠を折るの寒氣を御さ金を流すの暑威を冒すとも、執勞あるときは勇み進むで身を以て人に先だち、未だ嘗て暑いからとて大麻脫だり寒いからとて、股火したりする樣な、惰怠の容を急にせないのである、サテ慈明禪師は始め袁州の南源に住せられてより、道吾石霜福嚴と歷住し、遂に潭州の興化寺に終られた、其の間僅に三十年の長日月であつたが、楊岐はイツモ隨身して紀綱規律を總べ柄て居た、即ち之を監院の事を領すると云ふのぢや、斯く始終一如に慈明が一代の間の輔佐を仕盡して而して後に已むだのである。以下眞如を說き更に其の人の語を引て之を證す又眞如、慕喆の如きは初め複子を負ふて行脚せし時より、應化出世して徒を匡し衆を領するに逮ぶまで、大法の爲めに其の軀のあるを忘るゝこと啻に飢ゑ渴したる者の飲食に於ける

が如き段では無い、且つ造次として物を組み立てる卒急の時でも顛沛として物の間れ落る毫秒の間でも、勃然として遽てたる顏色もなく卒爾として疾まりたる言葉も無い、夏の暑さにも窓を推し排かず多の寒さにも火に寄り附かず、一室の内に儼然自如として凝り固まつたる座が案頭に滿ちて居た、眞如菅で曰へるやう、衲子たる者、内に於て上に徹し下に徹するの高明や古に亙り今に亙るの遠見なく外に於て瘤棒の嚴師や擊節の良友に乏しいときは、克く大器を成就する者あることは尠いと。以下妙喜、接合して楊岐眞如の二老を評賛するなり。故に當時執拗と片意地なることを以て名高き孚鐵脚の如くに娼女に迫まれても終夜結跏趺坐して情念を起さず、孚は夫なり、天衣懷の法嗣たる眞州長蘆の應夫廣照禪師なり、鐵脚は又倔强と情剛なることを以て推はし綽號なり、カナテコアシと云ふ義にて蓋し通じたる秀圓通の如くに遷化の後すら像を拜すれば面目嚴冷にして怒氣人に噀く底をあれば、秀は東京法雲寺の法秀圓通禪師にして師も天衣の法嗣なり、平生寫眞を以て佛事と爲すこと頭書に見ゆるが如し、諸公皆其の風儀を望み見て敬服するの狀は謂ゆる草の風に靡然として偃すと一般である。

嗟乎楊岐眞如の二老の如きは實に是れ千載衲子の龜鑑とすべきかな。

子詔同妙喜萬菴三人。詣前堂本首座寮。問疾。妙喜曰。林下人。身安然後。可以學道。萬菴直謂。不然。必欲學道。不當更顧其身。妙喜曰。爾這漢又顛耶。子詔雖重妙喜之言。而終愛萬菴之語。爲當。

△大意、古人、法の爲めに色身を養ふと、法の爲めに身命を顧みざるとを明す。

（字釋）前堂本首座、僧堂内に前堂首座後堂首座あり、博山の悟本時に前堂首座たり、象器箋殿堂類の上に「僧堂聖僧龕の左右を出入板と爲し、出入板より巳前を前板と爲し亦前堂と曰ふ、即ち前堂首座之を管領す、出入板より巳後を後板と爲し亦後堂と曰ふ、即ち後堂首座之を管領す」とあり。◎爾はソノと訓じソコノと譯す、即ち物を指す辭なれどもナンゾと斥す所とは異なり、唐詩選李頎寄韓鵬詩に「美爾城頭姑射山」とあるが如し。◎爲當、當は去聲、諦當の義にて發言の節に中るなり。

（講解）張子詔が其の師の妙喜老漢、同門の萬菴道顏と同じく三人にて、堂内の前堂を管領する悟本首座の寮内に詣つて、本の疾病に罹つて居るのを見舞ふたソコで妙喜老師が病者の心を安慰する爲めに大婆心を垂れて仰せらるゝやう、叢林下の人は色身が壯健でなければ成らぬ、彼の大工が好き細工するには先づ切物を砥で掛るやうなもので、其の身安泰にして然して後以て斯道を學ぶ可きものぢやと、然るに萬菴は病者の心を奬勵振舞する爲めに眞直ぐに思ひ込で妙喜の言を然うでないとし、必ず道を學ばむと欲せば是非に更々其の身を顧みては

ならぬ筈で、唯〻法あるを知つて身あることを知らざるこそ衲子の本懷ならめと申しければ、妙喜は爾の這の漢子、又顛狂するかと曰つて咎められた、ソコで張子詔は妙喜老師が看病の言を尊び重すれども、而も終に萬菴が奬勵的の語を愛して眞に然るものと爲た。私に案ずるに妙喜萬菴の言、皆病者の爲めに大婆心的警訓を垂るもの、即ち一は母の如く安撫的、一は父の如く奬勵的、陰陽相須ゐて育生宜きを得、萬菴の不レ然と云ふも妙喜の顛耶と呼ぶも一場の戯論戯演のみ、然らざれば病者の前にて罵詈譏論するは市井小人も猶ほ忌憚する所、而も兩大德何を苦みて斯醜を爲ひや。○記明は可菴記明なり。

子詔問妙喜方今住持何先。妙喜曰。安著禪和子。不過錢穀而已。時萬菴在座。以謂不然。計常住所得善能撙節浮費用之有道。錢穀不勝數矣。何足爲慮。然當今住持。唯得抱道衲子爲先。假使住持有智謀能儲十年之糧。座下無抱道衲子。先聖所謂。坐消信施。仰愧龍天。何補住持。子詔曰。首座所言極當。妙喜回顧萬菴曰。一箇箇都似個萬菴休去。已上並見菴集一

△大意、住持たる者に先務と不先務との別あることを明す。

（字釋）禪和子は衲子と云ふに同じ僧は和合を以て第一とす故に和合の義を取て禪和子と稱す、◎撙節浮費は省義に「其の所入を量り其の所出を度り節儉廉約にして奢侈なら使ること無し」とあり、撙はオサフと訓す裁抑なり、浮はスグと訓す字書に「溢なり過なり」とありて浮び溢る〻意より轉用して過甚の義となるなり、◎假使はタトヒと訓す假りに行らせて見る意なり、◎儲はタクハフと訓す、音義に「積聚なり、嗣なり太子の君に嗣ぐが如し故に之を儲と謂ふ」とあり、◎糧は一に粮に作る字同じ、和名加天とて貯へ置く穀物の類を云ふ、◎座下は須彌座の直下と云ふの義にて此には會下と見るべし、◎信施は信奉者の施物と云ふ義なり、楞嚴八に「旌安に法を說て虛しく信施を食す」毘尼母論五に「佛諸の比丘に告ぐ、人の信施を食す解怠すべからず」とあり。

（講解）張子詔が妙喜老師に問ひけるやう、今時の住持何を以て先務とすべきやと、妙喜の仰せに、江湖の禪和子を安着することは多方なれども、畢竟すれば小使錢と飯米とに過ぐるものは無いと、時に萬菴が其の座に居て自ら以て然うでないと謂ふた、乃ち申すやう、常住の所得を計算し其の支出を見度つて善能分に浮ぐるの奢費を撙へ節減して之を用ふるに其の道を以てすること有らば、若子財を愛す之を取る金錢米穀は夥しく聚ひ擧げて數へられぬである、何とて兎や角憂慮する迄もなからうや、左れば當今の住持は、唯〻道心を保抱する底の衲子を得るのを

先務とすべきなである、假りに住持をして智惠謀略あつて能く十年の糧を積み儲へさせても、會下に抱道の衲子を得ないときは、先聖卽ち長蘆の慈覺禪師が自警の文に謂ゆる坐ら人の信施を消亡し仰で龍天に愧ぢ入ると云ふものを、何とてソレを住持に補益があらうやと、張子韶は萬菴の言ふ所は至極諦當であると申しました、時に妙喜老師は萬菴の方を回顧て仰せらるゝやう、廣衆稠人の中にも愚者は多くして智者は少ない、一箇も一箇も都て你の見解に似たりとて一拶を下された、萬菴何とも云はずして休默し去りきとぞ。（私に案ずるに本篇妙喜の語は故らに第二段門を云ふ而して萬菴は直ちに第一段門を以て之を辯難せり、然れども此間の消息唯讀者の翫味に任ぜむのみ。○已上並見手可菴集は前二篇の記聞の文を並せ云ふなり。）

萬菴顏和尙曰。妙喜先師。初住徑山。因夜參持論諸方。及曹洞宗旨。不已。次日音首座謂先師曰。夫出世利生。素非細事。必欲扶振宗教。當隨時以救弊。不必取目前之快。和尙前日作禪和子。持論諸方。猶不可安。況今登寶華王座。稱善知識耶。先師曰。夜來一時之說焉。首座曰。聖賢之學。本於天性。豈可牽然。先師首謝之。首座猶說之不已。萬菴曰。先師竄衡陽。賢侍者錄貶詞。揭示僧堂前。衲子如失父母。涕泗愁嘆。居不遑處。音首座詣衆寮。白之曰。人生禍患。不可苟免。使妙喜平生如婦人女子。陸沉下板。緘嘿不言。故無今日之事。況先師所應爲者。不止於是。爾等何苦自傷。昔慈明瑯琊谷泉大愚。結伴參汾陽。適當西北用兵。遂易衣混火隊中往。今徑山衡陽相去不遠。道路絕間關。山川無險阻。要見妙喜。復何難乎。由是一衆寂然。翌日相繼而去。（虛山智林集）

△大意　此篇前後二段とす、前は林下に謗者あれば師道昌なるを明し、後は人生の禍患は苟も免る可らざるを說く

（字釋）曹洞宗旨は六祖慧能大師より青原、石頭藥山、雲岩、洞山、曹山に傳へて始めて此稱あり、敎外に心宗を傳へて敎相に偏執せず、不立に文字を立て〜學海に優游せしむ、是れ唯佛與佛の窮盡せる圓融無礙の法門なりとす、音義に『曹は乃ち撫州曹山、本寂禪師なり、洞山良价禪師に嗣ぐ、初め洞山を離れて曹溪に入て祖塔を禮す、吉州の吉水に回る、衆水の名に憑べて遂に請して開法せしむ、師曹溪に擬す、凡そ所居の處に隨て曹を立て〜號と爲す、洞山の宗師に至て最も陸なり、故に曹洞宗と稱す』事苑七に『曹山は卽ち洞山の嗣子、今洞曹と言はずして曹洞と言ふことは亦猶ほ慧遠は卽ち慧持の的兄、但こ持遠と言て遠持と言はざるがごとし蓋し

語便に由て他なし、叢林或は曹を指して曹溪と爲す、蓋し世裔來歷の遠近を知らず、妄に自ら牽合して廼ち知者の嘲を絶つ」とあり、曹溪は韶州の曹溪山下なる晉の武侯の孫、曹叔良と云ふが其の地に寶林寺を立て、慧能大師に居らしむ、爰に大溪あり、曹侯が姓を合せ取て曹溪と名く、即ち六祖是なり、天下祖道に參ずる者枝分派別すれども皆うの流裔なり、◎寶華王座は天台四教儀、別教に「蓮華藏世界、七寶菩提樹下、大寶華王座に坐す」（頭書には衍あり脱あり、此に之を訂す、）華嚴疏鈔廿五に「此の寶華極めて得難きが故に名けて大と爲す、寶華中の最勝なるが故に華王と名く」とあり、◎率然は輕忽の貌文選非有先生論、向註に「率然は猶は忽然のごとき也」論語に「子路率爾として對ふ」朱註に「輕遽の貌」とあり

◎首謝之は藏本に稽首謝之に作る、韻會宥韻に「咎ありて自ら陳するを首と曰ふ」とあり、◎寶衡陽、宋、高宗紹興十一年、妙喜年五十有三、是の年四月張九成等徑山に登り謁して格物の話を評議す、妙喜曰く公祇格物あることを知らずと、諸公茫然たり、妙喜大に笑ふ、公曰く、師能く開諭せむや、喜曰く小說に載するを見ずや、唐の安祿山と叛く者あり、其の人先きに閬州の守と爲りて畫像の焉に在る有り、時に唐の明皇蜀に幸して之を見て怒りて使臣をして劍を以て之を擊たしむ、像首落つ、時に閬州の守陝西に隱居す、首忽然として地に墮つと、公聞て頓に深旨を領す、偈を呈して軒壁に題して曰く、「子韶格物、妙喜物格、欲識一貫

兩箇五百、と、妙喜其の悟入を重とし、時に爲めに上堂す、頌して曰く、神臂弓一發透過千層甲（作一重）老僧拈來看（一作子細拈來看）又作（弼門下看）直甚臭皮襪（一作當）と、是の時軍國邊事ありて朝廷方に神臂弓を製す、事物紀原卷九に「熙寧中に李定、偏架弩を獻ず、弓に似て、鞚鐙を施し、鐙を以て地を拒て之を張る、射ること三百步、能く札を洞す、之を神臂弓と謂ふ、拗て利器とす云云」又四機活法十六に「宋の吳璘、強勁の弓弩を製す、神臂弓と號す、以て金虜を敗る」とあり、右相秦檜以爲く妙喜と張九成と竊に太師を議し兼て以て朝廷を譏諷すと、五月遂に衡陽に竄せらる、留ること十年、師先德の機語を哀め間拈提を加へて正法眼藏三帙を著す、◎揭示は高く張り揚げて衆に示すなり、◎涕泗は目より汁を出すを涕と曰ひ、鼻より汁を出すを泗と曰ふ、◎陸沉は本講義七十頁に釋す、◎下板は音義に「官に下僚下板と謂ふ、言ふは下位に居すなり」とあり、◎西北用兵は頭書に宋、太平興國四年己卯（太宗の年號）潘美を以て北漢太原城を攻るの事とす、恐くは失考ならむ、慈明禪師は仁宗の康定庚辰の年、壽五十四歲を以て寂す、今逆次を以て其の壽數を推せば則ち太宗の雍熙丁亥は實に師の始生の年なり、而して興國己卯の亂は慈明未生前八年なり、縱ひ汾陽世に出るあるも慈明未だ生れず以て證と爲すに足らず、私に云ふ、眞宗の咸平景德の頃、契丹の兵、年として中國に亂入せざるなく兵火常に止まず、西北用兵は蓋し之を云ふ乎、◎火隊は通典に「一人を燭と曰ひ二人を比と

曰ひ三人を參と曰ひ比參を伍と曰ひ伍人を烈と爲す頭あり、二烈を火と爲し火子を立つ、五火を隊と爲す卽ち漢騎の團なり、府兵三百人を以て團と爲すは則ち大團なり』とあり、左れば火は十人にて隊は五十人なれど、此には唯人數に拘らず軍隊と見るべし、◎間關は六十一頁に釋あり。

（講解）萬菴道顏和尙の仰せに、我が妙喜先師は最初杭州臨安府下の徑山に住した、宋の高宗紹興七年七月妙喜に詔して徑山の能仁寺に住せしむ、師方に四十九歲なり、夜參示衆の因に諸方の是非を持論せられた、持論とは平生己が抱持する所の議論を吐くのであるが、終に曹洞の宗旨に及で之が是非を論じて已まなかつた、此時曹洞宗にては默照枯坐と云つて惡き風儀が有つたので、ソレをば剝出に議論せられたのである、其の次の日に法眞首座（長庵和尙の法嗣）といふが妙喜先師に謂て申すやう、扨て世間に出で〻衆生を利せむことは素より些細な事では無い必ず斯の宗敎を扶持振揚せむと欲せば、當に時勢に隨て順を追ひ序を董して徐々に其の弊風を救ふべき筈ぢや、是非に目前一時の快談放言では行かぬ、和尙前日禪和子と作つて諸方の是非を持論致されたが、是れ雲衲の時すら猶は妄にすべからざる事であるに、況てや今現に寶華王の高座に登つて能化の善知識と稱せらる〻者が輕々に諸方を持論する譯が有

らうやとお諫め申した、先師の仰せに、アレは昨夜ホムの一座の評判で何にも固く執つて云つたのでは無いとありければ、眞首座重ねて聖賢の道學は人の天性に本くものである、豈とて一時の雜とした說を以て卒然輕忽に論ふ可けむやと申しける、先師は大畏の人であるから、ソコで首を下げてソレは山野が惡う御座つたと謝られた、眞首座猶は且つ之を說いて已まざりさとなり。

萬菴和尙の仰せに、妙喜先師が張子韶の爲めに神臂弓の傷を頒して衡州府の衡陽へ竄流せられた、實に不慮の災難である、ソコで了賢侍者（禪殿丁賢なり妙喜の法嗣）貶詞とて咎を書いた、追院の公文を寫し取つて僧堂の前に揭げ示せしかば、一會の衲子は之を見て皆父母を失ふが如き狀にて涕を流し泗を啜つて愁へ嘆き、這は何したものであらうと狼狽てドウも安と閑にしてエヽ居らぬ模樣であつた、ソコで法眞首座が大衆の寮內に詣り之を慰めて白さまに告げて曰ふやう、人生の禍患は苟且にも免る〻ことは出來ぬ、若し妙喜老師をして婦人女子の如くに下席に陸沉と這入込で、口を緘ぢ嘿して何とも諸方の事を言はぬやうになさしめたならば、故より今日の變事は無いであらう、況てや先師が應に爲すべき所のものは多々益々多し、左れば此上猶は幾回難に遇はる〻やら知れぬ、ソレに皆の衆は何

ぞ込み入つて其の樣に傷でドウするぞ、眞の志が有るならば看よ、昔し石霜、慈明、瑯琊、慧覺、芭蕉、谷泉、大愚、守芝が如きは（以上四人皆汾陽善昭の法嗣）伴侶を結び遥々と故山を出で、汾陽太子院の無德善昭禪師の道風を慕ふて、之に參せむとしけるに、適朝廷西北の契丹を伐たむとして軍兵を用うるに出逢ふた、ソレで道中甚だ困難であつたから、遂に衣服を着易へて兵隊の中に混り、幾多の勞苦を凌ぎつゝ往かれたと申す事ぢや、今此の徑山と老師が竄せらるゝ衡陽とは其の相去ること遠からず、其の上道路に行き難い間關の地もなく、山川に通じ難い險阻な所も無い、左れば妙喜老師に相見せうと欲せば復た何とて六ケ敷からうや、即ち彼の慈明諸師が汾陽に詣りし當時の事を想ひ出せば、其の難易比べ樣もない事ぢやとて丁寧深切に諭した。由是一會の大衆は寂然と靜かになつて、其の翌日相繼て此處を辭し去つて皆老師の後を追ひ參りしとぞ。

萬菴曰。先師移梅陽。納子聞有竊議者。音首座曰。大凡評論於人。當於有過中求。無過中求有過。夫不察其心而疑其跡。誠何以慰叢林公論。且妙喜道德才器。出於天性。立身行事。惟義是從。其量度固過於人。今造物抑之。必有道矣。安得不知其爲

法門異時之福耶。聞者自此不復議論矣。（叢林）

△大意、大德の行爲小人知る能はず、以て評論の苟もすべからざるを明す。

（講解）萬菴和尙の仰せに、妙喜先師は初め衡陽に竄流せられしが、（宋の高宗紹興十一年、妙喜五十三歲の時）其の後更に遠方なる廣東潮州の梅陽縣へ移されつ、（紹興二十年、妙喜六十歲の時）納子の中に間竊かに先師を非議する者があつた、時に法音首座が之を宥めて申すやう、大凡人の是非善惡を評論せひには、縱や其の人過あるに於ても其の過の斯く善心より生じたることなれば、是非に過なしと極めて其の人の美を揚げねばならぬ、然ると詎とて更に過ない中に於て無理に過を求め出して可からうぞや、扨て其の妙喜の心即ち其の內行に過なきを察せずして、其の跡即ち貶竄せられし外事を過であると疑ふ樣な評論では、誠に何を以てか能く叢林公衆の輿論に滿足を與へられやうぞ、夫では丸で無過を有過とするの酷論と云はねばならぬ、且つ妙喜の道德才器の勝れたることは自然の天性に出でたるのである、身を立て一切事を行ずるには惟宜しきに合ふの義と引組で其の義のある所の儘に是れ從ふのぢや、其の器量態度の大なることは固に人より圖抜て居るよ、ソレに今造物者が暫く妙喜を抑へ苦めたのは偶然でもなく無意でもない、夫には大に道

即ち譯の有ることであらう、其の譯はと云ふに造物が彼の梅櫻などをして清秀優美の花を開かせひが爲めに霜を降し雪を雨して大に之を苦むるやうなものぞ、左れば妙喜が前後幾多の難に逢ふて苦楚辛酸の間に道益進み德愈積むのは之が安して其の法門の異時に却て隆盛に向ふの幸福であると云ふことを知らではなるまいやとて衆を諭しければ聞く者その理にや服じけむ、夫より復た妙喜の身の上を非議評論せざりきとなり。（因に云ふ、妙喜の衡陽梅陽に竄せらるる迫ること四方席を虛うして師を遮ふれども皆既かず、終で朝命を奉じて育王に住し、年を逾ゆて旨あり徑山と改ひ、道俗の歸慕すること初に過たり、孝宗深く之に歸依し妙喜藏の三字を親書し並に贊を製して之を褒奇せられきとそ、音首座が前ゆる法門異時の福云云の言果して虛しからざるなり。）

音首座謂萬菴曰。夫稱善知識。當洗濯其心。以至公至正接納四來。其間有抱道德仁義者。雖有離隙。必須進之。其或姦邪險薄者。雖有私恩。必須遠之。使來者各知所守。一心同德。而叢林安矣。

△大意、主者は怨親憎愛一致にして道德を求むるの士を以てすべきを明す。

（字釋）洗濯は共にアラフと訓す。洗は水にて淨むることなり、濯は垢を取ることなり、◎離隙離はアダと訓す互に言ひ破りて立腹することなり、隙はヒマと訓す物の透間のことより轉じて人の交りの睦じからぬことを有り隙と云ふ、玉篇中の巻きを、水

も流さぬ中もこれ類書纂要十二に「離隙は怨離間隙なり、隙は壁孔なり、言ふは人相ふの反對なり、交るの密なる一も合はざることあれば則ち孔隙の間あり」と見ゆ、◎險薄は氣立險じくして所行の輕薄なるを云ふ。

（講解）法音首座が萬菴和尚に謂て申すやう、扨て善知識と稱せらるゝ者は是非とも其の自己が心臟を洗ひ濯ふて淸々しらし、聊か私なきの至公聊か邪なきの至正を以て四來の衲子を接待管納すべき筈ぢや、其の間に道德仁義を抱へ持つ者あらば己れに於て假ひ離隙とて中の惡い事が有つても必ず須らく之を進め用うる樣にせねば叶はぬ、若し其れ或は之に反して姦邪險薄なる者ならば我に於て縱や私恩とて私の恩義が有つても必ず須らく之を遠けて用ゐぬやうに致さねば叶はぬよ、何でも四來の衆をして夫々自ら守る所の道德仁義を知つて其の心を一致にし其の德を同樣にせしめて而して叢林の大に安泰になるのであるとなり。

音首座曰。古之聖人。以無災爲懼。乃曰。天豈棄不穀乎。范文子曰。惟聖人能內外無患。自非聖人。外寧必內憂。古今賢達。知其不能免。嘗誌其始。爲之自防。是故人生稍有憂勞。未必不爲終身之福。

蓋禍患謗辱雖堯舜不可逃況其他乎（奥妙喜書）

△大意、衲子平生禍福吉凶一如に坐斷するを明す。

（字釋）古之聖人云云は音義に『司馬光曰く楚の莊災なきを以て懼と爲して曰く、天豈に不穀を棄てむやと』後漢書明帝紀に『昔し楚の莊災なければ以て戒懼を致す』註に說苑に『楚の莊王、天妖を見さず、地孽を出さゞるを見れば、卽ち山川に禱りて曰く、天其れ余を忘るゝ歟と、此れ能く過を天に求めて謀に逆はず』とあり、（說苑君道）（繼に見ゆ）◎不穀は諸侯の謙稱なり、禮曲禮下に『自ら稱して不穀と曰ふ』鄭註に『穀は善なり』とあり、◎堯舜云云、越絕書卷三に『堯に不慈の名あり、舜に不孝の行あり』と見ゆ、論語に『善を翼け聖に傳ふるを堯と曰ひ、仁聖盛明を舜と曰ふ』とあり。

（講釋）法音首座の申すやう、古の聖人卽ち楚の莊王は災難なきを以て懼と爲して乃ち曰はるゝやう、斯樣に無事安穩なのは天豈と我を棄るのかと、常に以て自ら戒められた、又晉の上卿の范文子が曰ふ、惟聖人のみは安に居て危を忘れず、治に居て亂を忘れざるが故に、能く內外共に患へなきを得れども、斯る聖人に非る以上は、外の心配なうて穩なるときは驕りの心が出るから、必ず內の憂へと云ふものが生ずるであると。左れば古今の賢達方が其の禍患の免るゝことの出來

ぬと云ふことを知つて、深く其の始を粗畧にせぬやう、謹愼を加へて之が爲めに自ら憂の生ずる所を防がるゝのぢや是の故に人生常に稍の心配苦勞あるは、未だ必しも終身の禍と爲らぬことはなからう、結句生涯の仕合となるのである、蓋し災禍患難に罹つたり、誹謗恥辱を受けたりするのは、堯舜の如き聖人ですら猶は逃れることが出來ぬと見て、堯は九年の洪水あつて患を爲し、舜は繼母や弟に屢辱められた、然るを況て堯舜以下の者に於ては猶更の事で、ドウも禍患謗辱は致し方ないものである。（奥妙喜書は法音首座が妙喜和尙の難に罹りし時に其の意を慰めんが爲めに與へし所の書なり。）

因に云ふ、本篇と次篇とは藏本に其の位置を先後す、而して次篇の音首座謂萬菴曰の七字を又曰の二字に作れり。

音首座謂萬菴曰。凡住持者。孰不欲建叢林。而鮮克能振者。以其忘道德。廢仁義。捨法度。任私情。而致然也。誠念法門凋喪。當正己以下。人選賢以佐佑。推奬宿德。疎遠小人。節儉修於身。德惠及於人。然後所用執侍之人。稍近老成者存之。便佞者疎之。貴無醜惡之謗。偏黨之亂也。如此則馬祖百丈可侔。臨濟德山可逮。（智樂林）

△大意、叢林の興廢盛衰は、端あり由あることを明す。

（講解）法音首座が萬菴に謂て申すやう、凡そ住持して能化の任に當る者は、就かず叢林を建立することを欲せぬものあらうや、去りながら、克能勃然と之を振ひ起す者は鮮い、是れと云ふも唯、其の内には道德を忘れ外には仁義を廢て、或は法度を捨て若くは私情に任するを以て、而して然樣なることを致すのぢや、誠に法門の凋零敗喪するを殘念がつて、當に己を端正にして以て人に下り賢者を選拔て以て佐け佑け、老宿大德を推尊し奬めて小人庸鄙を疎むじ遠ざけ、節儉もて身を修め德惠もて人に及ぼすべき筈ぢや、然して後に用うる所の執役侍曹の人をば稍〻近づけ、事慣たる老成の者をば之を存顧し、巧言實なき便佞の者をば之を疎遠にす、而して見苦しき醜惡の謗り偏頗私黨の亂なからむことを貴ぶのである、苟も能く此の如くなるときは、馬祖道一や南嶽懷讓の嗣百丈懷海が馬祖の嗣當時應化の隆昌なりしにも伴うすべく、臨濟義玄や黄檗德山宣鑑が龐蘊の嗣龐居士の嗣眞風を擧揚せしにも逮ぶべき事ぢや。

萬菴顏和尙曰。比見叢林絶無老成之士。所至三百五百。一人爲主。多人爲伴。據法王位。拈槌竪拂。互相欺誑。縱有談說。不涉典章。宜其無老成人也。夫出世利生。代佛揚化。非明心達本。行解相應。詎敢爲之。譬如有人妄號帝王。自取誅滅。況復法王。如何妄竊。烏乎去聖逾遠。水潦鶩之屬。又復縱橫。使先聖化門。日就淪溺。吾欲無言。可乎。屬菴居無事。條陳傷風敗教。爲害甚者一二。流布叢林。俾後生晚進知前輩兢兢業業。以荷負大法爲心。如氷凌上行。劍刃上走。非苟名利也。知我罪我。吾無辭焉。（智林集）

△大意、像季の世老成の士なく妄に法王の號を竊みて、聖敎を取り違ふる者多きを戒む。

（字釋）法王は佛を云ふ此には堂頭の位なり、王とは天下の歸住する所、又天下を有つの稱とす、佛は卽ち衆生の歸住にして萬法の所有たり、故に法王の稱あり、法華譬喩品に『我は法王たり法に於て自在なり』智論七に『佛は法王たり菩薩は法將たり』とあり、◎拈槌、拈は撮なり手指を以て物を取るなり、槌は凡そ佛の在世に上座の人が一般の衆僧に言ひ渡すことの有るときには必ず之を打ち鳴らして一同に注意を與へ、夫より何なりと云ふなり、槌と云ふものは木を八角に削りて下に其の大なるを置き別に小なるものを持て上よりカチリと打ち鳴らすものにて今も上堂布薩等の時に用う、象器箋唄器類に詳なり、◎竪拂、竪は立なり拂は拂

子なり、佛在世の時、諸の比丘蚊蟲の爲めに食はれて痒を患ひ搔抓息まず、佛に白して蚊蟲を拂ふの具を著ふることを許さる、之を拂子とも拂塵とも云ふ、今は法具の一たり、象器箋資身細器に見ゆ、◎行解相應は本講義三百頁に釋す、◎誅滅は誅罰されて自滅するを云ふ、誅はコロスと訓ず、罪を計へて殺すことなり、◎去聖逾遠は證道歌に『聖を去ること遠くして邪見深し』とあり、◎水潦鶴は頭書に出せるが如し、一に水澇涸に作る、谷響集第十に見ゆ、又正宗記二、佛祖統紀五、事苑六、中峰錄十四、及び阿育王傳等に出たり、◎屬の字本文に二字あり、上はタグヒと訓じて其の部類のことなり、下はヤサニと訓じて會也遇也とありて時に當る辭なり、折柄の義に通ずべし、◎兢兢業業は恐危自ら安せざるの貌なれども、彼の臆病者の恐懼するの類に非ず、常に戒慎して物を大切にする義なり、◎荷負はニナヒオフと訓ず、物を肩に載するを荷と云ひ背に載するを負と云ふ、◎氷凌凌亦コホリと訓ず、風俗通に『積氷を凌と曰ふ』とあり、但し此には薄氷の義に見るべし、◎知我罪我、胡氏曰く『仲尼春秋を作て以て王法を寓し、典を厚くし禮を庸ひ德に命じ罪を討つ、其の大要皆天子の事なり、孔子を知る者は此書の作、人欲を横流に遏め天理を既滅に存し、後世の爲めに慮ることを至て深遠なりと謂ひ、孔子を罪する者は以て其の位なくして

二百四十二年南面の權を託し、亂臣賊子をして其の欲を禁じて肆にするを得ざらしむることは則ち成まむと謂ふ云云』孟子の註に見ゆ。

（講解）萬花顏和尚の仰せに、比ろ諸方の叢林を見るに絶て老成の人士が無い、今至る所に三百人五百人と集ふ大衆は、一人を主卽ち師家と爲し多人數を伴卽ち學者と爲す、よゝコで主は法王の座位に據り掛ると、上首の人が槌を拈て之を打ち鳴して何歟云へば師家が拂子を竪てゝ之に應答す、斯の如くにして師學互に相欺き誑かすのである、縱や玄と談じ眞と說くことを有るも、佛祖の聖典憲章に涉らで、孟浪杜撰の話頭ゆゑ、唯笑を傍觀者に取る許りである、其の老成の人士の出ないのは宜なる事ぢや、扨て世間に出でゝ衆生を利せむことは、佛祖に成代つて敎化を宣べ揚ぐるのである、左れば其の心性を明らめ根本地に達して外の行相と事實に行ふ所內の見解と理體を徹見したる所、相應するで無ければ、詎して敢ずに法王の位に據て化度の任に當ることが出來やうぞや、譬へば茲に弱人あつて安に已れ帝王ぢやと號して自ら誅伐を受けて滅亡を取るやうなものであるに、況てや復た佛の御位なる法王の座に登るに於ては法罰いと怖づべきをや、如何が安に此の位を竊まうや、然るに今人は未だ證得せざるに已に證得したりと思ひ、安に有道と、

稱して聾俗を欺くことなるが、誠に長大息すべきの限りである。烏乎大聖世尊の在世を隔たり去ること逾遠くして正しく末法の今日となつた、却説も正法の世に在てすら或る比丘が了生滅と云ふを水潦鶴と誤信して人に説いた事がある、末世の今日にては正法を取違へて邪説にする斯樣の惱ひが、又復縱横と處々方方にあるぞ、先聖が化度の門をして日々に沉淪沒溺に就かしむることは、宛ら深水の中へ投込で仕舞ふやうなものである、吾れ言はずに居樣と思ふめれど、ドウも言はずに居て可からうや可くは有るまい、ソレ故菴居無事なる時に惱ふて條の目を列ねて夫の僧風を傷り聖教を敗つて弊害を爲すことの甚いもの一ッ二ッを布陳して叢林に流布す、一二は蓋し次に列する六篇の文是なり、畢竟すれば後生や晩進の者をして、前輩とて昔よりの歷々方が兢々と恐れ業々と危ぶみて、重き大法を一身に荷ひ負ふことをもて心と爲し、其の兢々たる狀は薄き氷凌の上を行いて陷むかと恐るるが如く、其の業々たる形は鋭き劒刃の上を走つて傷けむかと危ぶむが如くなることを知らせやうとするのである、決して名聞利養を苟むるが爲めにするのでは無いぞ、唯我が心底を知つて呉れやうが又我が不恭を罪して誹らうが、汗は吾れに於ては辭退せぬ、何せられても構はないのぞ有る。

萬菴曰。古人上堂。先提大法綱要。審問大衆。學者出來請益。遂形問答。今人杜撰四句落韻詩。喚作釣話。一人突出衆前。高吟古詩一聯。喚作罵陣。俗惡俗惡。可悲可痛。前輩念生死事大。對衆決疑。既以發明未起生滅心也。

△大意、古人が上堂の大要を明して、末世の多く生滅の心を起すを誡む。

（字釋）上堂は大參なり、參は交參の義、勅修清規に「凡そ衆を集めて開示する皆之を參と謂ふ」とあり、舊説に「上堂を以て小參に對すれば則ち大參と稱すべし」とあり小參の事は二百十五頁及三百五十頁に釋あり、凡そ古人は四節開炉元宵佛祖忌國忌より雨雪を祈り旱澇を禳ひ出隊病起容至り訃至る等、一切事に因て上堂せざるは無し、象器箋垂説類に詳なり、◎綱要は尙書序に「其の宏綱を擧げて其の機要を撮る」とあり、綱は網を提するの繩にて網は物を攝容するの具なり、◎請益は論語子路篇註疏に「子路其の少きを嫌ふ故に更に之を益さむことを請ふ」（本文頭書に出ず）小學明倫篇句讀に「益を請ふとは再び未だ盡さゞるの蘊を問ふ也」とあり、道忠曰く「已に與ふる所あり更に復た餘分を請ふを請益と謂ふ、禪家、儒典の字を借て以て入室請法に命ず」と、詳に象器箋參請類に見ゆ、◎問答は學問師答の謂なり、緇門警訓下、佛眼禪師示禪人心要に「近世多く問答を以て禪家の家

風と爲し、古人の事を明めず、一向末を逐ふて反らず、怪む可く怪むべし、昔人迷に因て而して問ふ、故に問ふ處に證入を求む、一言半句を得て將て事と爲し、究明して徹じ去らしむ、今人の胡亂に問ひ口を趁ふて答へ、笑を達者に取るが如くなるに似す』とあり、◎杜撰は、杜とは假の義にて妄に本據なきことを述ぶるを云ふ、書言字考に『自撰して師承なく本説に據らざる者を杜撰と曰ふ』とあるが如し、音義に『杜は塞なり撰は造なり述なり、言ふは古法に通せずして自ら造るなり、杜光庭が佛經を假りて道經を作るが如し』とあり、(座新書に白醉瑣言を引て云く「五代の廣成先生杜光庭多く神仙家の書を著はす、悉く經圖に出づ、蓋過僻の類の如し、故に人、妄言の者と謂て杜撰と爲す」と、又佛祖通載廿一の巻に詳なり、又野客叢書八に『包彈を杜撰に對して甚的なりとす、包拯、臺官と爲りて嚴毅にして恕あらず、朝列過あれば必ず彈擊を須う、故に事の瑕疵なき者を言ふて沒包彈と曰ふ、杜默詩を爲る多く律に合せず、故に事の格に合せざる者を言ふて杜撰と爲す、世に杜撰包彈と言ふは此に本づく、然れども又俗を觀るに杜田杜園の説あり、杜と云ふは猶は假と言ふがごとき耳、自ら薄酒を釀すを言へば則ち杜酒と曰ふが如し、子美詩に杜酒偏勞勸の句あり、子美が意は蓋し杜康を指す、意と事と適相符合すること此の如き者あり、此れ正に杜撰の説と同し、湘山野錄に盛文肅公、文節が神道の碑を撰す、石參政中

立急に問ふて曰く誰か撰すと、盛卒に曰く度撰すと、度は文肅公の名にして杜と字音通ず、滿堂大に笑ふと云ふを載す、文肅は杜默が前に在り、又知る杜撰の説其の來ること久しきを』とあり、又無門關の註に『杜氏八陽經を撰す、其の註尤も鄙拙にして其の實未だ詳ならず、其の中多く本據なき事を載せて誤る、故に杜撰と曰ふ』とも見ゆ、(大慧小參に『杜撰八陽經、自有三千部』といふ、八陽經は谷響集五に其の説あり、頭書所引の事文類聚は之を原本に考ふるに、別集巻六字義類に杜撰を註解するに、唯湘山野錄の文を載せて野客叢書に載する所に同じ、八陽經を撰す云云の説なし、蓋し考證を失する歟、)◎落韻詩は起句に韻を取らざる今の踏落の詩を云ふに非す、卽ち頭書に見ゆる裴虔餘の『滿額鶯黃金縷衣』の(衣は微の韻)翠翹浮動玉釵垂(垂は支の韻)從教水濺羅裙濕、疑是巫山行雨歸』(歸は微の韻)の作の如くに亂韻の詩を云ふなり、◎釣話は釣語に同じ又索話索語とも云ふ、象器箋垂説類に見ゆ、◎生死事大は大慧普説に『諸公、生死事大己事未だ明めざるが爲めに脚跟下に生じて來處を知らず死して去處を知らざる底の一着子を理會せひことを要す、若し這の一着子を明めずひば、未だ免れず生死に流浪し愛河に沒して頭出頭沒了期あることと無けひ云云』中峰廣錄一に『原ぬるに夫れ生死の大は凡を欺き聖を壓し古を籠め今を罩ひ、未だ一法として其の淪溺に遭はざる者は有らじ、故を以て之を目して大事因緣と曰ふ』とあり、◎生滅は有爲造作の義にして不生滅なる一定不變

の反對なり、集句韻に『生滅の口を放開して是非の塵を掃却す』雲臥紀談下、大悲閣長老、章に『語を寄す叢林の瞎漆桶（宗門方語無分曉）、生滅を將て話頭を看ることを休めよ』又雲臥菴主書に『傳に其の師を收めざるを以て、必ず怒罵生滅す』とあり、故に偏執妬忌人我等皆生滅の心なり、圓覺經清淨惠章に本く。

（講解）萬菴和尚の仰せに、古人が上堂に於て、先づ大法の大綱肝要な所を提起して、大衆に向つて審かに問へば、學者が其の前に出て來つて請益するのである、請益とは己が心に未だ會得の參らぬに依り重ねて丁寧の教を求むる事で、遂に之をば問答の上に形はすのぢや。然るに今時の師家は四句落韻の詩とて韻字を取違へた胡亂な七絶一首を杜撰して（此に謂ゆる落韻の詩は韻字のみに就て云ふにあらず、宗旨なき盂浪杜撰の句を稱す、夫をば問答するとなり、ソコで一人の學者が大衆の面前に突出と飛び出で〳〵、高聲に古詩一聯句を吟唱す之をば罵陣と喚び作すのである、罵陣とは法戰出陣の義ぢや。（大體小清規の來拂に「問話の師答、始を出陣と謂ひ、終を入陣と謂ふ、此れ皆訛聲なり、古人胸中に疑惑未だ決せざれば、出で來りて衆に對して決擇す、安ぞ出陣入陣の意あらひや、之を創除すべし、古來法戰の語あり、と雖も、專り師答分上に在らず」とあり、）然るに是れは卑俗醜惡で如何にも下卑て見惡い、悲むべく痛むべき事ぞ、前輩の達者が問答窮明せらる〳〵のは、生死事大とて、凡そ人間

の最も大切な事は生れると死ぬると云ふ事で、其の生れるのは何處から何して來た、死ぬるのは何處へ何して往くのぢやと、生死畢竟如何といふことを疑と悟り明らめるのが一番大切な事よ、這の生死事大を念ふて大衆に對して大疑を決擇するのである、最早一言半句の下に發明、即ち大悟徹底せば、主伴も見ず能所も存せず寂々了々全體一枚であつて、未だ生滅と云ふやうな有爲造作の心を起さじ、ソレに何とて罵陣などの名あらひやとなり。

萬菴曰。夫名行尊宿至院。主人陞座。當謙恭敘謝。屈尊就卑。增重之語。下座同首座大衆。請陞于座。庶聞法要。多見近時。相尚學古人。公案。令對衆批判。喚作驗他。切莫萌此心。先聖爲法忘情。同建法化。互相訓唱。令法久住。肯容心生滅。興此惡念耶。禮以謙爲主。宜深思之。

△大意、他方尊宿の至ることあれば、則ち謙恭以て之を遇すべきを明す。

（字釋）陞●座は座に陞ると訓じて說法の時に壇上へ登るを云ふ、舊說に「普說を陞座と爲し或は上堂をも亦陞座と稱す」（無著曰く「古へ上堂を陞座と稱する者あり、濟錄の如し、後世陞座と上堂と同じからず、緒餘已に二名を分つ、概して一と爲す可らず云云」といへり、）陞座の字面は聯燈會要卷一、釋迦牟尼佛章に『世尊一日

陞座す、大衆綏に集定し文殊白槌す云云」とあるを本據とすべし、象器箋垂説類に詳出せり、◎法要は法門の主眼を云ふ、遺教經に「諸の弟子の爲めに略して法要を説く」木槵子經に「法藏深廣なり、惟願くは法要を垂示せよ」とあり、◎公案批判は共に本講義百九十五頁に出づ、◎法化は法華經に「此の衆生を集めて法化を宣布す」とあり、◎令法久住は法華見寶塔品に「是の方便を以て法をして久住せしむ」とあり、◎禮以謙爲主は禮曲禮上に「夫れ禮は自ら卑して而して人を尊ぶ」と見えたり。

（講解）萬菴和尚の仰せに、扨て名德高行の尊宿方が其の寺院に至られれば主人は他の陞座を導引するが爲めに己れ先づ座に陞つて當に謙退恭敬にして來訪の謝を敍ぶべきぢや（他の評座を導引するを引座といふ、書說に「引座に二あり一に先づ引座して以て尊宿が衆の爲めに上堂すべきの意を申ぶ云云」象器箋垂說類に見ゆ、主が尊位を屈めて卑下に就くと云ふ義）

に就ては昔より增崇鄭重の語がある、即ち其の座を下つて首座や大衆と一緒に尊宿を請じて高座に陞らしめて敬法中の要旨を拜聽せむことを庶ふのを之が古來尊宿を迎ふるの法式である。（勅修清規下に「上堂に云ふ、若し尊宿相訪へば特に爲めに上堂すべし、或は引座擧揚すと、又迎待尊宿に云ふ、如し大尊宿なれば則ち首座衆頭首、住持先づ客位に到て意を陳ぶ、若し尤さば首座狀を具して兩序大衆同じく客位に詣り、捕香拜請し、次に住持を請して引座せしむ（中略）住持先づ引座し常の上堂と同じ云云」是れ尊宿の爲めに引座するの式也、多く近時の尊宿接待の樣を

見るに、古式の有るが上にも拘らず、相尙ふるに古人の話頭公案を擧揚て他をして衆に對して夫々批評判決を下さしむ、而して後で何云ふならば他の力を試驗してやつた抔と惡く喚び作す事である、斯の如きは古式と全く相反して如何にも鄙劣な所爲であれば、切に斯樣な人我是非の心を萌すことはならむぞ、先聖方は大法の爲めに心を寄せて人我の情を打ち忘れ同じく敎法化門を建て互に相酬和唱揚して、斯の法をして久しく世間に住在せしめむとするのである、肯て心を人我の生滅に容れて人を驗ると云ふ樣な此の邪惡の心念を起されやうや、凡そ禮てふものは自ら謙下にして他を尊敬するをもて其の主要とするのであれば何でも篤くりと大方尊宿に對するの古禮を思ふたが宜い。

萬菴曰。比見士大夫監司郡守入山。有處次日。令侍者取覆長老今日特爲某官陞座。此一節。猶宜三思。然古來方册中雖載。皆是士大夫訪尋知識而來。住持人因參次。畧提外護教門光輝泉石之意。既是家裡人。說家裡兩三句。談話令彼生敬。如郭功輔楊次公訪白雲。蘇東坡黃太史見佛印。便是樣子也。豈是特地妄爲。取咲識者。

△大意、　士大夫登山して陞座説法を請ふも、猶は宜しく三思すべきことあるを明す。

（字釋）士大夫は本講義二百十四頁に釋す、◎監司は書言故事巻九に『監は治なり司は主なり、以て其の主る所の事を治むる也』とあり、而して其の監司類に載する所は諸路の安撫使、轉運使等なり、安撫使は安察使に同じ、民百姓をして安定撫育せしむる義なり、轉運使は水陸運使なり、○頭書所引の書目の文中永は水、道は酒の誤字なり、◎郡守は太守にて一郡の長なり、頭書郡主に作るは皆非なり、◎取覆、取の字輕く見るべし、覆は事を白すを云ふ、勅修清規上、聖節に『行者就て住持に覆す云云』小補韵會、宥韻に『覆、通じて復に作る』又屋韻に『復は白なり、禮記に復すこと有るを顧ふ、孟子に王に復す者あらむ』とあるが如し、◎一節は猶は一條と云ふがごとし、◎方冊、方はイタと訓ず木版なり版は板に同じ冊は音柵通じて策に作るフダと訓ず竹簡なり、古へ未だ紙あらざるの時、事あれば即ち木版竹簡の上に寫し、合して帙を成す、故に之を方冊と云ふ、即ち今の書籍なり、◎外護は外より佛法を守護するの謂なり、梵網經菩薩戒、戒古迹に『佛法兩人に付屬す、一には佛弟子以て内護と爲し、二には諸國王以て外護と爲す』とあり、◎特地はワザトと譯す、音義に『故なくして換ふなり』とあり。

（講解）萬菴和尚の仰せに、近年は朝に仕へる士大夫や、諸路の監督する役人や、一郡の守たる長などの高等官が、其の山内に入り來るを見るのに、或は事あつて其の處分が濟むと、其の翌日には知事頭首の者より隱寮侍者をして長老へ取次して覆させるに、今日特別に某官人の爲めに陞座説法せられよと、此の一節は猶は再三思慮を廻らしたが宜い、何故と云ふに其の行すべき時ならば之を行じ、行すべからざる時ならば之を止めむければ成らぬので、畢竟勢威に屈して匆卒に陞座せば、法を輕ずるの恐れが有るからである、併しながら古より傳燈祖錄などの方冊の中に、官樣官人の登山に當つて陞座説法した事實が往々載せては有るかなれども、皆是れ士大夫が知識を訪ひ尋ねて來れば住持の人が小參とか晚參とかの次でに因て、略敎門を外護し泉石堂塔を光輝するの意を提示したものぢや、殊に今云ふ此の士大夫の如きは既に是れ我が家裡の人であるから、家裡兩三句の談話を説て彼をして大法敬重の意を起させるのである、即ち郭功輔や白雲端の嗣なり、居士分燈錄下に「郭祥正字は功甫、母李白を夢みて而して生ひ、皇祐四年守端歸宗に寓す、正、星子主簿たり、往て心法を叩く、端、承天に往き問道に遊るに迨ぶ、正復た德化に尉たり、往來尤も密、端、白雲海會に移る、正、當途より往て謁ず、端、楊次公が天衣義懷の嗣なり、分曰く牛醉なりや、曰く醉なり云云、又燈錄上に「楊傑字は次公、無爲の人、無爲居士と號す、少年登科し、官、荷澤主客郎中たり、兩浙刑獄を提點す、佛法を尊崇し名宿に歷參し、晚に天衣義懷師に從て遊ぶ云云」とあり、其の白雲に於ける因緣は頭

書に見ゆ白雲守端禪師を訪ひ、又蘇東坡や東林常總の嗣なり、分燈錄下に「蘇子は嘗て東林に問ふ、黃州に謫せらる、時に佛印了元、黃州に住す、軾與に禪を論じ妙句迭出す、東坡と號す、（巾是）嘉祐の初め進士に登り史館に直たり、元豐三年黃州に謫せらる、時に佛印了元、的宗

牌を受け、衆の爲めに開室す、畢りて其の牌を方丈に却納す」とあり、斯く簡畧にしてあるが、素より大衆は生死事大なるが爲めに踴躍と喜び勇むで住持の前に來づて見解の判決簡擇を請ひ求むるのぢや、然るに近頃の樣子を見るに、若き修行盛りの者は申すに及ばず老人も病僧も、殘らず來つて歸降誠款を納れさす事である、何と鄙劣の甚しい所作では無いか、麝は香氣のいと高いものであるから、其の麝のある所は自然と薫るものぢ、今それと同じ事で住持も道德さへ十分具れば、故らに、其れをば彰はさむとせずとも、自から遠近に輝きて必ず學者の集ひ來るものよ、安とて公界即ち公然たる區域を設けて降款を納れねば成らぬとか、相見の禮を執らねば行かぬとか、賓主の間に區界を定め置て無理强ひに之を己れの方へ驅りたてることを致さうぢや、若し今の樣子にて流れ行いたならば、妄に枝葉的の箇條が生じ賓主共に其の間に自から隔てが出來て安穩の場合が無いやうになる、故に斯の大法を主る者は是非に之を思ふて古法に復らねばならぬ筈ぢや。

萬菴曰。少林初祖。衣法雙傳。六世衣止不傳。取行解相應。世其家業。祖道愈光。子孫益繁。大鑑之後。石頭馬祖。皆嫡孫。應下般若多羅懸識要假兒孫。脚下行是也。二大士。玄言妙語。流布寰區。潛符密

證者。比比有之。師法既衆。學無專門。曹溪源流派別爲五。方圓任器。水體是同。各擅佳聲。力行己任。等閑垂一言出。一令羅學者。叢林鼎沸。非苟然也。由是互相訓唱。顯微闡幽。或抑或揚。佐佑法化。語言無味。如煮木札羹。炊鐵釘飯。與後輩咬嚼。目爲拈古。其頌始自汾陽。暨雪竇宏。其音顯其旨。汪洋乎不可涯。後之作者。馳騁雪竇而爲之。不顧道德之奚若。務以文彩煥爛相鮮爲美。使後生晚進。不克見古人渾淳大全之旨。烏乎。予遊叢林。及見前輩。非古人語錄。不看。非百丈號令。不行。豈特好古。蓋今之人。不足法也。望通人達士。知我於言外可矣。

△大意、初祖より六祖に至り斯法益盛にして、曹溪の源流遂に別れて五派となるを明し、兼て物盛なれば必ず衰ふの理あるを誡む。

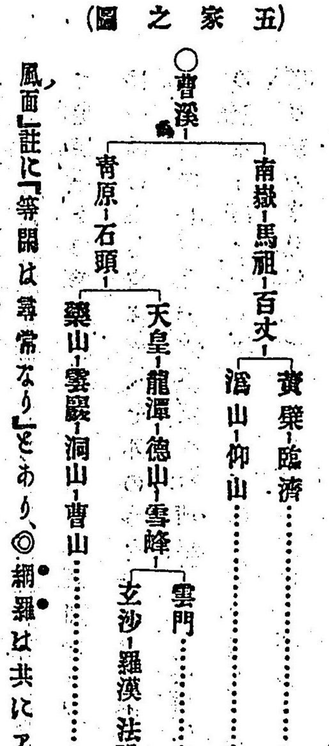
（字釋）少林は達磨大師九年面壁せし梵刹の名なり、祖庭事苑に「少林寺は乃ち魏の沙門跋陀の製なり、菩提達磨梁の大通元年に舶に泛びて此土に至る、武帝に會ふて問答契はず、遂に魏の洛陽に之き、嵩山の少林寺に止り、面壁して坐し終日默然たり、是の如くすること九年、二祖の可を得て以て其の法を傳ふ」とあり、嵩山は五岳の

一にして河南に在り、其の山、三ツ尖峯ありて東なるを大室と云ひ西なるを小室を以て達磨に名く、故に少林少室と云へり、其の峯中に少林寺ありと云へり、

正室を去ふ、正室生む所の長子を嫡子と云ひ、父の後を嗣ぐべきもの嫡男と云ふに同じ、嫡子の長子を嫡孫と稱す、或は嫡は敵なり與に敵するなきを言ふなり、◎般若多羅は東印度の人にて釋尊正傳二十七祖の尊者なり、大法を不如蜜多に得て廣く有情を度す、行化して南印度に到り香至王の第三子を度して法眼を付す、謂ゆる達磨大師是なり、◎懸識は懸遠の識記なり、懸はハルカと訓す懸隔と連用して懸け離れて遠き意なり、識はシルシと訓す字書に「驗なり凡そ識緯は皆將來の驗を言ふ也」とあり、是れ俗に未來記とて豫め後來の事を記するを云ふ、◎兒孫脚下、般若多羅謂達磨曰く却後二百二十年、林下に一人を見む、當に道果を得べし、吾が識を聽け、曰く、震旦雖闊無別路、且は印度の人、支那を稱するの貫、無二別路一、是は其の道一なるなり、馬祖を道一と名く、要假兒孫脚下行、兒孫は嗣子なり、脚下行は六祖が南嶽懷讓に謂て曰く「昔し般若多羅尊者、汝を識して曰く足下より一馬駒を出して天下の人を踢殺せむと」即ち此事にして是れ南嶽下に馬祖を出すを云ふ、金鷄解銜一粒米、此句は南嶽讓を頌するなり、馬祖は四川什邡縣の羅漢寺の僧なり、讓師が法食の供を受く故に云ふ、是れ馬祖を頌するなり、讓は金州の人（或云金壌縣の人）なり、以て未寤を覺ますなり、供養十方羅漢僧、得るの緣を識するものなるべし、然るに此に萬菴が謂ふ所の前後の文意を推せば馬祖石頭の二大士に充てざるを得ず、故に音義に「首句は即ち道一なり、次の句

は乃ち石頭なり云云」と見ねし、姑らく此說に從て講解を下すべし、◎玄はフカシと訓す、元來クロシと云ふ字にて六入を玄と云ふとて黑き色を六入染めたるなり、故に深き意になりて幽奧の二義を兼ぬ見ねず窺はれぬ意ありて深遠なる義に用ひ、◎寶區は國內に同じ、字書に「寶は天子の封畿內の縣なり區は域なり」文選遂民傳論、註に「寶區は國の封域なり」とあり、◎潛符密證は潛に符信を付し密に證心を傳ふなり、會元遠磨、傳に「吾が滅後二百年に至り、衣は止りて傳らず、法は沙界に周し、道を明むる者は多く道を行ずる者は少し、理を說く者は多く理に通ずる者は少し、潛符密證、千萬有餘、汝當に闡揚し、未悟を輕ずること勿るべし云云」（初題、慈可）に出る、音義に「明教曰く密とは言に因て暗證するに非ず、眞密なり、註に外に信衣を傳へ內に密證を授く、乃ち吾が佛祖眞實祕密の法なり」とあり、◎比比は頻々と訓じて迫掛々々の義なり、比はシキリニと訓じて連と同じくツヽケテと譯す、◎專門は一種の學を家に傳へて外の事を交へぬことなり、專は一筋にて二三に分れざるの謂なり、張九齡詩に「家受專門學、人稱入室賢」の句あり、◎派はミナマタとて河の派るゝ所を云ふ、總て一の本流ありて而して他へ支出分流するの稱なり、◎等閑は輕々に見做して何ともなき意なり、千家詩卷上、朱文公春日詩に「等閑識得東

（五家之圖）



○洪覺範曰く曹溪の道は南嶽の石頭江西の馬祖に至りて分れて兩宗と爲る、雲門曹洞法眼は皆石頭を宗とし、臨濟潙仰は皆馬祖を宗とす、天下の叢林號して五宗と爲す云云。因に云ふ、潙仰宗は五世にして絶し、雲門宗は九世にして絶し、法眼宗は三世にして絶し、而して臨濟曹洞の二宗は的々相承して今日に至り、以て益〻其の盛なるを見る。

風面」註に「等閑は尋常なり」とあり、◎網羅は共にアミと訓ず、魚を漁するを網といひ鳥を捕ふるを羅と云ふ、今其の義を取て衆を經め集むるに用ふ、前漢書王莽傳に「天下異能の士を網羅す」網又罔に作る、史記太史公自序に「天下の放失せる舊聞を罔羅す」とあり、◎頌は頌古なり、象器箋經錄類に「頌の名は本と六詩風賦比興雅頌に起り、盛德を歌誦して以て神明に告る者なり、禪家の頌古の如きは則ち古則を擧して韻語と爲し、之を發明し以て人の爲にす、亦是れ佛祖の盛德を歌誦して其の美を揚ぐ、故に頌古と名く」とあり、◎暨はオヨブと訓ず及と同義なり、◎汪洋は韻會に「浩瀚の貌」晉義に「廣有の貌」と見ゆ、◎渾淳は渾澄淳朴の義にて玉の眞圓にして圭角なきが如く毛頭も句を練り語を煅はむとの意なく、本質の儘にて浮靡ならざるを云ふなり。

（講解）萬菴和尚の仰せに、少林の初祖達磨大師は衣鉢と大法とを二祖慧可大祖に傳へ二祖は之を三祖僧璨鑑智に、三祖は四祖道信大醫に、四祖は五祖弘忍大滿に、五祖は六祖大鑑能大師に、六祖大師に至つて衣鉢は止めて傳へぬ事となつた、所は衣鉢を傳ふるは爭の本となるとの遠き慮があるからの事ぢや、殊に衣鉢は唯付法の信を表するまでの事であつて、實際の法と云ふものは、以心傳心で、傳へる物や受取る物がある譯で無い、六祖壇經に「五祖復た慧能に謂て曰く、昔し達磨大師初めて此土に來る、人未だ之を信ぜず、故に此衣を傳へて以て信證と爲し、代々相承す、法は則ち心を以て心に傳へ、皆自悟自解せしむ、古より佛々惟〻本體を傳へ、師々密に本心を付す、衣は爭の端と爲る、汝に止めて傳ふる勿れ、若し此の衣を傳へば、命、懸ソの如くならむ」とある是なり、ソで外の行實と內の見解と相應して祖々的々の家業を世き、祖道の愈〻光輝を放ち子孫の益〻繁昌ならむことの意味を此に汲み取つたるものである、六祖大鑑の後、青原嫡子の石頭と南嶽嫡子の馬祖とは何れも六祖が正嫡の眞孫ぢや、昔し般若多羅尊者が達磨大師に十一首の偈を說いて一首の偈は具に寶林傳及び聯燈會要に出たり、懸かに三千年の佛敎隆替を豫讖せられしが、其の中に我が滅度三百二十年の後、法器菩薩出でむとて「震旦雖闊無別路、要假兒孫脚下行云云」の讖文があつた、是れは正しく馬祖石頭の出世に應當するのである、サテ馬祖石頭の二大士は斯く讖文に應ずるの大善知識ぢや、程に、幽玄の言や微妙の語が實地

に廣く傳つて、潛符密證として印可證明せられし者が比々として續いて大勢輩出した。師法既に衆くて學に一定の法門が無い、即ち能弘の師多きが故に所弘の法も亦多くなるのである、ソコで六祖曹溪の一源流が派に別れて遂に臨濟溈仰雲門法眼曹洞の五家と爲つた、水は方圓の器に任すれども其の水體は皆是れ一樣で、即ち宗派も其の機に由て斯く別れたれども其の法體に於てはチッとも優劣は無い、夫故五家各佳聲を擅にして力めて己が任とする所を行するのよ、爲開に一言を垂示するも尋常に一令を展出するも皆四方の學者を網羅する爲めである、ソコで叢林は宛ら鼎の湯の沸くが如く繁昌せるが、是れ却々苟且に然うなる譯でない。是に由て師學互に言話を酬和唱揚して微妙を顯はし幽玄を闡き、或は抑へて機を奪ひ或は揚げて用を縱にせしめ以て法道化門を佐け佑く、殊に語言話頭は沒滋味の公案と云つて冒味も鹽氣も無い、（或僧が趙州從諗に如何なるか是れ祖師西來意と問へば、趙州が庭前の柏樹子と答へ、茱萸が洞山守初に如何なるか是れ佛と問へば、洞山が麻三斤と答ふるの類）ソレは丁度木札の糞を裝鏹釘の飯を炊ぐ樣なもので丸で齒も牙も立つたものでない、此の無味の馳走を後輩に與へてシコ〳〵と咬み嚙はせるのであるが、學者は程能嗅ひ占めて愛で模本無味を得るのを之を目けて拈古と爲すよ、拈古とは古則を拈提するの義である、却説古人が

言行の甚だ高尚遐美なるものを偶に作つて後學に示すのを頌と云ふが、开は汾陽無德禪師が頌古百篇を作つたに始り（泉州雪峯義存禪師の頌古百則、汾陽無德禪師の頌古一百篇、雪竇重顯禪師の頌古百則、此を以て權與と爲す）と見ゆ、雪竇重顯禪師（智門光祚の嗣）に登て其の頌古の音律を宏大にし其の古德の深旨を顯はした、即ち碧巖集の頌古百則の如きをあつて、誠に汪洋乎と廣く浩にして涯むることが出來ない、後の頌古を作る者は雪竇の如くに筆を馳せ廻らし誇つて之を爲すことなれど、德道の奚若であらうかと云ふことには頓と心を寄せず、務めて文彩煥爛とキラッカせて相鮮かなるを以て美と爲し後生や晩進の者をして古人が渾淳と本質の儘優美にして斯道大全の旨を見ることが出來ぬやうに使た。（佛經頌に「頌古の作之を儒家に譬ふれば則ち詩典の如し、復た擬と數百戰なり、壺し宋國の初め汾陽に始る、是の時尊宿皆悉く渾厚純樸にして浮靡を尚ばず、天禧の間、雪竇辯博の才を以て其の音を佚宕にして抑揚縱妙を得ざることを奚し、然れども亦其の奚意を以て變弄して新を求め巧を琢し、其の宗風を壞じて古の淳金の作を失することを有り云云」と見ゆ、尚ほ、雪竇頌下卷心聞賞和尚の條下を參照すべし、）鳥乎予れ行脚盛りの時、叢林に遊で前輩即ち古人を見るに及むだ、开は古人の語錄でなければ取つて看ず、百丈の號令でなければ履み行はないのよ、豈とて特わけて古人の眞風を好む許りで有らうや、豈し今時の人は法範手本として夫れに倣ひ從ふに足らぬからの事ぢや、所望世の通人達士よ、我が斯く申す意を能く言語の外に知つて、大言放語とすること無

ければ可いのである。

萬菴曰。比見納子好執偏見。不通物情。輕信難廻。愛人佞己。順之則美。逆之則疎。縱有一知半解。返被此惡習所蔽。至白首而無成者多矣。己上並見智林集

△大意、納子偏見を執して、白首に至るも猶は顧ること無きを誡む。

（講解）萬菴和尚の仰せに、比ろ納子の所爲を見るに、好で偏頗な見を執して衆物の情に通せず、十信（信心、念心、精進心、慧心、定心、不退心、護法心、迴向心、戒心、願心なり、三藏法數に詳なり、以上不退轉の識見備はらぬが故に輕々に外境に馳緣せられて容易に本性に立ち歸らせ難い、唯、何歟なしに人の己れに媚ひ佞ふことを愛するのよ、ソレで唯々諾々として己れに順ふときは悪い者でも美め揚げ、侃々諤々として己れに逆ふときは善い者でも疎じ遠ざくるのである、斯樣ぢやから縱や一知半解といつて少々のお悟りが有つても、升は返つて此等の悪い習氣の蔽めに蔽はれて、終には白首老爺に至つても猶は一人分上と成ることの出來ない者が多いとなり。（鎮林曰く「大凡林下の士、多殷の見執あり、存心澄寂は是れ偏見なり、隨緣放曠は是れ偏見なり、但々歷々は是れ偏見なり、鋼壁を死守するは是れ偏見なり、規範を嚴護するは又偏見なり、或衣浪落にして以て放慢を恣にし、博覽多聞にして以て口辯を逞くす、多聞熱以て法門の盛大と爲し、殺豈莊嚴を以て佛法の輝光と爲す、（中略）未だ偏執の窠坑を脫することを能はず、龜毛逆に天涯を隔つ、歌者須らく己が見を拋ち舊習を放ち、明師に投じ良友を覓め、祖師を透過して、佛祖所證の田地に到らひとをを要すべし、若し然らざれば、萬菴の謂ゆる白首にして成る者なきに到らむ」と云へり。

本篇所載の位置、和刊本には下二篇の次に在り、藏本には正しく此處に置けり、私に案ずるに上の五篇は總て出據の書名を揭げず而して本篇に至つて「己上並見于智林集」とあるを見れば、藏本編輯の次序以て正とせざるべからず、況や前きに萬菴が「條陳傷風敗教爲害甚者一二流布叢林」といはれしは此等數篇を指すものとするをや、故に今藏本に從て本篇の位置を易ふること爾り。

萬菴曰。叢林所至。邪說熾然。乃云。戒律不必持。定慧不必習。道德不必修。嗜慾不必去。又引維摩圓覺爲證。貪嗔癡殺盜婬爲梵行。烏乎斯言。豈特起叢林今日之害。眞法門萬世之害也。且博地凡夫。貪嗔愛慾。人我無明。念念攀緣。如一鼎之沸。何由清冷。先聖必思大有於此者。遂設戒定慧三學以制之。庶可廻也。今後生晩進。戒律不持。定慧不習。道德不修。專以博學强辯搖動流俗。牽之莫返。予固所謂斯言。乃萬世之害也。惟正因行脚高士。當以生死一著辨明。持誠存信。不爲此輩牽引。乃曰。此言不可信。猶鴆毒之糞。蚍飲之水。聞見猶不可。況食之乎。其殺人無疑矣。識者自然遠

之矣。（眞三草堂一卷）

△大意、末世の衲子、三學を修せず、妄に大乘の語を曲解して自己の麁行を助く、實に是れ法門萬世の怨害なることを誡む。

（字解）貪嗔癡は之を三毒と云ふ、（毒は毒害の義にて其の能く出生し貪とは引取の心なり、世の善心を破壞するが故なり）貪とは引取の心なり、若し迷心を以て一切順情の境に對すれば、引取して厭くこと無きが故なり、嗔とは忿怒の心なり、若し迷心を以て一切違情の境に對すれば、便ち忿怒を起すが故なり、癡とは迷惑の心なり、若し一切事理の法に於て明了する所なければ、顚倒妄取して諸の邪行を起すが故なり、（三藏法數三毒の下に見ゆ）◎殺盜婬は身業の三惡なり、殺は殺生とて自ら殺し亦人を敎へて殺さしむ等、一切衆生の物命を斷害するなり、盜は偷盜とて他人の一切の財物を竊取するなり、婬は邪婬とて己が妻妾に非ずして欲事を行ずるを謂ふなり、（三藏法數十惡の下に出づ）◎梵行、佛出世以前に於ける印度の敎法は、梵天の親受せしものなりと云ひ、其の道を修するを梵行と云へり、是れ亦捨家棄欲の行にして彼に於て淨行なりとす、故に梵行を淸淨行道の義とす、佛、無上菩提の道を說き、無上正眞の淨行を指授し給ふに當り、僧は慣行の語を援用して梵行と稱せしなり、（本講義八十九頁參照すべし）◎凡夫、凡は凡庸なり、夫は扶なり、人の役となりて其

の勢を扶持するの謂にて、卽ち役に從ふ賤者の稱とす、故に無智輕賤なる人を呼びて凡夫とし、以て聖人に對するなり、大威德陀羅尼經に「生死に於て迷惑流轉して不正道に住す、故に凡夫と名く、梵には婆羅と云ふ、隋には毛道と言ふ、謂く行心の定まらざること、猶は輕毛の風に隨ひて東西するが如き故なり云云」とあり、◎人我、（本講義三百二十四頁に出づ）◎無明は十二因緣の一なり、過去世にて煩惱を起す位を云ふ、法界を了せず邪見妄執常に闇冥に在るなり、此の愚痴の爲めに起る妄念よりして來世の因を爲すなり、三藏法數に「過去世の煩惱の惑、本性を覆ひ、明了する所なきが故に無明と曰ふ」法華科註に「是の諸衆生、此の大乘に背き无明の闇を起す」とあり、猶は無明に多義あれど今此に悉せず、◎攀緣、攀の字體は樊に手を加ふ、樊は樹枝の相交るなり、今之に手を加ふるものは以て其の枝々を步するなり、左手に甲枝を取り右手に乙枝を執ちひに、左手丙枝に移れば右手隨て丁枝に移るが如く、彼此交互循環して不斷絕なるを攀とす、故に攀緣とは因緣の展轉して生じ來るの謂なり、大集經に「一切衆生盡く攀緣を離れ四梵行を得」とあり、◎戒定慧は之を三學と云ふ、三藏法數卷九に「學とは猶は飾のごとし、器飾らざれば卽ち以て美觀を成すこと無く、人學ばざれば則ち以て聖德を成ずること無し、故

に此に依て修する者は必ず聖果を證するなり、戒とは禁戒なり謂く能く身口意所作の惡業を防止す故に戒學と名く、定とは禪定なり謂く能く散を攝し神を凝して見性悟道す故に定學と名く、慧とは智慧なり謂く能く煩惱を斷除して本性を顯發す故に慧學と名く」音義に「非を防ぎ惡を止るを戒と曰ひ、諸緣を止息するを定と曰ひ、惑を破し眞を證するを慧と曰ふ、此の三者は入道の門泥洹の要なり、凡そ僧たる者此に於て宜しく心を盡すべし」とあり、◎正因は三因佛性の一なり、三藏法數卷九に「正は謂く中正なり中は一に正因佛性、二に了因佛性、三に緣因佛性なり、正因は因位にして餘の二位は果位なり、必ず雙照三諦具足す、故に正因佛性と名く」（中正とは邪を離るなり、雙照とは空を照し假を照すなり、空は謂く一切の相を蕩す、即ち是れ眞諦、假は謂く一切の法を立つ、即ち是れ俗諦、非空非假は即ち是れ中諦なり、故に三諦具足と云ふ）宗鏡錄八十に「正因は是れ本有なり、衆生覺らざるを以ての故に客塵の爲めに蔽はる、金の礦に在て金體現せず、要は其の功を假て方に金用を成すが如し（鑛冶の功を經て眞金の用を出す）此の正因佛性亦復是の如し、纏に在て現せず煩惱礦中に處る、須らく先づ了因の智慧を假るべし、有を知り開發す（有は本有なり）次に緣因に藉て方便助顯して方めて大用を成す」とあり、（正因今は修行位に約する故に因位なり、而して此處は彼の邪行者に對して正因を持出したる迄なれば、餘り深く穿たざるを以て可とせじか、）◎一著はヒトテと譯す、本と碁の辭にて安危此中に在り、◎鴆毒は廿三頁に釋す、◎虵飲之水は曾賢行

行願品十二に「智海廣して量り難し測らざれば反て謗を增す、牛の飲む水は乳と成り、虵の飲む水は毒と成る、智學は菩提を成じ愚學は生死を爲る云云」とあり。

（講解）萬花和尚の仰せに、叢林至る所此處も彼處も正しからぬ邪辟の說が熾然と盛な事である、其の說に乃ち云ふやう、戒律は强ちに持するに及ばぬ、定慧は强ちに習ふに及ばぬ、道德は强ちに修するに及ばぬ、嗜慾は强ちに去るに及ばぬと、是れは脫體現成眞妄不二、即ち是れ大道であるから別に斯る三學とか道德とかを區畫して强ひて選擇するに及ばぬとの意味を申したのぢや、又其の眞妄不二なる體はとて、維摩經の觀衆生品や（本經に「貪利弗言く復た經を離るゝを以て解脫と爲さゞらしめよ、天曰く、佛、增上慢の人の爲めに經を說て解脫と爲す、若し增上慢なき者には、佛、經を說て解脫と說き玉ふ」とあり、圓覺經の淸淨慧菩薩章（本經に「一切の障礙即ち究竟覺なり、乃至諸の戒定慧及び經を離るゝは俱に梵行たり、此れ大權の聖人跡を示し生を利す云云」とあり）などの言句を引き來つて之を證據立てとし、貪慾嗔恚愚癡の三毒や、殺生偸盜邪婬等の惡業を贊して、淸淨無慾の梵行と爲すのである、（維摩四觀は大乘經なれば大に見る所あるなり、苟も煩惱即菩提、生死即涅槃の當體を明ひる處の眼に非れば、必ず其の見解を誤ること、古人の云く「無差別の平等は惡平等にして是れ罪所空見なり」と、濫りに破大乘を行ひて因果を撥無せば乎、恐るべし恐るべし、）烏乎斯の橫なる妄言は豈とて特り叢林今日の弊害を起す許りであらうぞや、眞に是れ法門萬世の害毒となることぢや。且又博地とて廣い世の中の凡夫は、貪嗔や愛慾や人我

や無明や抔の妄念想念が攀緣と物に取付き廻うて止まぬ事なるが、开は宛ら一個の鼎の湯が沸々と煮返つて居るやうなものゝ、何に由てか能く之れが清冷にならうや。ソコで先聖即ち佛は其の必ず大に此に於ける者の三毒であることを思召れて、遂に之に對する戒律禪定智慧の三學を設けて、以て此の三毒の惡心を制止せられた。庶くは凡を轉じて聖と作すことが出來る、誠に是れ無上の大恩であるぞ。然るに今時の後生や晩進の衆は、戒律は持するに及ばじ、定慧は習ふに及ばじ、道德は修するに及ばじ抔と稱して、專ら博學强辯を恃とし以て庸流俗輩の心を搖し動せるのである、最う斯う惡邪見を執して居るから、如何なる陶鑄を施して之を率けども容易に本に返ることを莫い、予が固に謂ゆる佛語を曲解した斯の妄言は乃ち法門萬世の害毒ぢやと申せしは全く之が爲めである。惟本來の佛性を具備して居る正因行脚の高士よ、當に生死事大の一著を以て篤と心に辨明して、常に誠實を持し信義を存して斯る惡知識の爲めに牽き引かれぬ樣にせらるべし。乃ち萬菴が重ねて揚言して曰ふ、斯る邪說をば信じてはならぬぞ、是れは丁度鴆といふ毒鳥の糞や蛇が飲だ所の水と同じ樣なものゝ見たり聞たりしてさへも猶は其の毒氣に打れて可くないに況てや其の大毒な糞水を飲み食ふに於ては言はう樣なき危險な事で其の人を殺すこと疑ひ無い、啻に其の色身を失ふ位の段ではなく即ち人々の斯の慧命を斷らるゝのぢや、此の如くなるが故に識者は自然と如上の邪說を遠くるのであるとなり。

萬菴曰。草堂弟子。惟山堂有古人之風。住黃龍日。知事公幹必具威儀。詣方丈受曲折。然後備茶湯禮。始終不易。有智恩上座爲母修冥福。透下金二錢。兩日不尋。聖僧才侍者。因掃地而得之。掛拾遺牌。一衆方知。蓋主法者清淨。所以上行下效也。清集

△大意、主法の者清淨なれば、會下の衆必ず之に效ふこと有るを明す。

（字釋）公幹。公は私に對するの名、幹は事なマヒラカと訓ず、元來マガレチル、と云ふ字にて入組たる事となるより詳悉の義とす、芥隱筆記に『曲折は李廣傳に出たり、天子に軍を失ふを報ずること曲折にす、猶は委曲のごとし』とあり、李廣傳は前漢書卷五十四に見ゆ、◎透下は遺失の義なり、一說に『透は遺の誤字に非ざる乎』といへり、透は字書に『跳也、過也』とありて遺の義は見ねず、◎聖僧は僧堂の一老主として堂の中央に安置する所の像なり、其の像は古來一定せず、大乘の寺には則ち文殊を安じ、小乘の寺には則ち憍陳如若くは賓頭盧を安ずとぞ、象器箋塵像類に就て

詳にすべし、又聖僧に侍する者を聖僧侍者と稱す、此に才侍者と云ふは卽ち其の人なり、義堂日工集、四に『府君義湖問ふ、衣鉢侍者の次は是れ何の侍者ぞ、曰く聖僧侍者、卽ち秉拂侍者なり、常に僧堂に在て聖僧に侍する者なり、君曰く其の職貴と爲さむや賤と爲さむや、曰く此職多く道者を以て之に充つ、或は勤舊と雖も亦發心して自ら充むことを請ふ者之れ有り』とあり、勤舊は山門諸知事の退職したる者總て勤舊と曰ふ、蓋し知事は山門の世務を勤む、故に勤もいふ、己に其の職を退く、故に舊と云ふなり、◎拾遺牌、鏡堂圓禪師錄、示兄弟拾得物不掛拾遺牌者偈に『叢林百丈古清規、遺者應須掛拾遺、若也便將爲己有、亦名偷盜罪無疑』とあり、拾遺の字面は世典に『路不拾遺』とあるに基けり。

（講解）萬菴和尙の仰せに、草堂善清禪師が嗣法の弟子に、惟一山堂道震のみ古人の風采が有つた、山堂が黃龍山に住せし中、公幹として表立つたキットせし用事ある時は、知事の者が必ず チャムと僧たるの威儀を具へ、方丈卽ち住持の許に詣つて曲折なる指揮を受け然して後に茶禮湯禮を備ふるのである、知事が斯の如く謹勅にして始終易ることなかつたのは、畢竟山堂の風の嚴格なるに因りし譯ぢや。又知恩上座と云ふ者が有つて、亡母の爲めに冥界の追福を修した、其の時に堂內にて金貳錢を透下しかも九二日何とも云はず尋ねもせずに居た、然るに聖僧の

才侍者といふが地を掃除するに因て此の二錢の金を拾ひ得た、ソコで拾遺の牌とて何々を拾ふたが遺した者ないかとの掛札を出せしかば、一會の大衆方めて智恩が金を遺したと云ふことを知りしとなり。蓋し斯法を主る者が清淨嚴肅であれば會下に右樣の好話が起るである、誠に是れ上の行ひは下之に見效ふと云ふ所以ぢや。

萬菴節儉以小參普說當供衲子問有竊議者萬菴聞之曰朝饗膏粱暮厭麁糲人之常情汝等既念生死事大而相求於寂寞之濱當思道業未辨去聖時遙詎可朝夕事貪聲耶（眞牧集）

△大意、衲子惟生死事大を念ふて膏粱麁糲を論ずべからざるを明す。

（字釋）普說舊說に『普說は卽ち陞座なり、上堂も亦陞座なり、但普說には祝香を炷せず法衣を搭せず以て異と爲すのみ、普說は眞淨より始る、三佛も亦之を行ふ、大慧に到りて方に盛なり、普說は須らく是れ知見廣博の人にして始て得べし云云』大慧普說三に『一百年前本も普說なし、因に黙堂元祐の問、眞淨和尙、洞山歸宗に居する時、方丈を爲す、然れども古人箇の法門を立るも亦自心を爲す、大意は學者を開悟するを以て心と爲す、何を以て之を知る、見ずや大華嚴の離世間品に普賢菩薩二千の頌を瓶の如く、中に於て一問あり、曰く何等をか名けて普說に出處あり、普賢菩薩二千の頌を瓶の如く、中に於て一問あり、曰く何等をか名けて普說三世を爲す、答て曰く佛子菩薩摩訶薩、又云『普說とは一時の說、一切時に普きなり、或は十種ありて三世を說く云云』とあり。

日く昔く一切法を說くなり、或は日く普法を說くなり、普法とは卽ち普賢の法なり、隨緣眞如を普と曰ひ不變眞如を賢と曰ふ、隨緣不變圓融無礙の法門なり」と見ゆ、糸器笙說に詳なり、◎供は設なり供給なり養なり、◎饗はウクと訓ず享と同義なり、元來神明に物を供ふるを享と云ふ夫より轉じて納受の義となるなり、又モテナスと訓ず、客に物を振舞馳走することを饗應と云ふが如し、◎鹿糲は共にアラシと訓じて玄米の事なり、糲は勵賴粢の三音あり皆同義とす、篇海に「米精ならざるなり」史記刺客聶政傳に「用て夫人鹿糲の費と爲す云云」とあり、◎寂寞之濱、寂寞は共にシヅカと訓じて淋しく物音なき事なり、濱は古の濱の字にて水涯なり、藏本に濱に作れり、韓文十六に「猶は將に寬閑の野に耕し寂寞の濱に釣らむとす」とあり、◎道業云云の二句は佛眼遠禪師が三自省察の語にして諸祖偈頌、緇林寶訓等に見えたり◎貧饗は本講義三百五十六頁に釋あり。

（講解）萬菴和尙は節用儉約の賀ぞあつて、小參や普說を以て供養に當てられた、是れは大衆に馳走を饗應代りに小參普說して聽かせるのである、ソコで衲子間竊議すと申して、萬菴老師は餘り客嗇ぞは無いかと云ふやうに蔭にて非議する者が有つたのよ、萬菴之を聞かれて仰せらるゝやう、朝に膏粱として肥肉美穀の如

き旨き物を饗るとも、暮には麁糲として口觸の惡い物を厭がるのは人の常々の情ぢや、お前等は既に生死事大を念ふて其の理を究めむが爲めに遠々と此の寂寞たる淋しい處へ相求めに來たのである、左れば是非に道業未だ辨明せず聖者を去ること時遙なることを思はねばならぬ筈よ、ソレに記とて朝な夕なに食物を貪り饗るやうなことを仕事とす可けびやとて、其の不必得を誡められきとぞ。

萬菴天性仁厚。處躬廉約。尋常出示語句。辭簡而義精。博學强記。窮詰道理。不爲苟止而妄隨。與人評論古今。若身履其間。聽者曉然如目覩。衲子嘗曰。終歲參學。不若一日聽師談論爲得也。記聞

△大意、師たる者仁厚情密なれば、學者之を信じて其の意を二ッにせざるを明す

（講解）萬菴和尙は天性が仁慈敦厚ぞあつて、其の躬を處理することは淸廉儉約ぢや、尋常語句を出し示すに、其の辭は、至つて簡にして義は甚だ精し、博く學問を遂げ一度見聞せしことは忘れぬと云ふ强記の人で、能く道理を窮め盡して、苟にも究明半途にして妄に人に隨つて志を變ずることを致されぬ、人と古今の事蹟を評論するときは、吾身其の當時に在つて親しく其の間を履み行いた若きぞある、ソレ故その話頭を聽聞する者は、曉然と明かに目に就て實地覩たやうにある。

會裡の衲子嘗て申すやう、一年中參禪學道せうよりは一日老師の談話論評を聽聞して得たりと爲すには及ばじとなり。

萬菴謂辯首座曰。圓悟師翁有言。今時禪和子。少節義。勿廉耻。士大夫多薄之。爾異時儻不免做這般蟲豸。常常在繩墨上行。勿趨勢利。佞人顏色。生死禍患。一切任之。即是不出魔界而入佛界也。

法語

△大意　一寺の主たらむ者は規矩に遊ひ勢位に託せず、生死禍患に臨みて節義を變ずべからざるを明す。

（字釋）蟲豸は爾雅釋蟲部に『足ある之を蟲と謂ひ足なき之を豸と謂ふ』疏に『此は文を對するのみ散じて言ふときは足なきも亦蟲と曰ふ、月令に春の日其の蟲は鱗、鄭註に云龍蛇の屬と是なり』とあり、凡そ春日の暖氣なるに當りては種々の蟲豸の土中より頭を出すものなれば、今其の義を借りて出世住持するに比す、禪錄に『今年春氣早、蟲豸出頭來』と云へるは即ち是なり。◎繩墨は昔義に『規矩なり、木は繩墨に隨ふて直正なり、心は教化に隨ふて邪を離る、凡そ道德を行ひ教化を興す、須臾も忘る可らざるなり』とあり、猶は本講義二百八十頁を參見すべし。

（講解）萬菴和尚が其の從兄弟なる辯首座に謂て申さるゝやう、（藤は大潙法泰の嗣なる成都府昭覺藤）

圓悟―妙喜―萬菴（師師なり、圓悟師翁が嘗て言はれし事がある、末世今時の禪和子は、節義を操を守るの心少く廉耻を知るの念も勿い、ソ）

法泰―辯首座（以上圓悟の語もし、以下萬菴の語もす、爾云云は辯首座を指すなり、但し頭巾に依れば爾異時云云、亦圓悟の言を爲す、然るときは文に制律なきが如し、爾も異時萬一這般の蟲豸とて、蟲の春氣になつて土を出るが如く世に出て寺持と做ることを免れ）

ねば常々繩墨即ち直道の上に在つて一切事を行ずるやうにせよ、勢利の途に趨つて人の顏色に佞ふことを致す勿、生死禍患の境に臨では其の生死禍患の在る所の儘に一任するが宜い、左すれば生死畢竟一枚となるから、即今魔界を出でずして其の身その儘佛界に得入することゝなり。

辯首座出世住廬山棲賢。常携一笻穿雙屐。過九江、東林。混融老見之。呵曰。師者人之模範也。學止如此。得不自輕。主禮甚滅裂。辯笑曰。人生以適意爲樂。吾何咎焉。援毫書偈而去。偈曰。勿謂棲賢窮。身窮道不窮。草鞋猛似虎。拄杖活如龍。渴飲曹溪水。飢吞栗棘蓬。銅頭鐵額漢。盡在我山中。混融覽之有愧。月窟

△大意、納僧の境界は、見聞に因らざることを明す。

（字釋）節は音蛩竹杖なり、戴凱之竹譜に『竹の杖に堪へたるは節より尚きは莫し』とあり、節は邛竹とて本と邛山より出たり、鄉老多く以て杖と爲すよし羅浮山記に見えたり、節の一名を扶老と稱するも全く之が爲めなり、◎蘖は音臬、屠なり、草屠なり、◎滅裂は滅絶壞裂なり、莊子則陽篇の字面にて莊子の意は莽かたの粗略にして善類までも滅して仕舞ふに喩ふ、類書纂要に『滅裂とは輕易にして分破する也』とある、◎援毫、援はヒクと訓ず此方へ引き寄することなり、毫は筆なり、◎栗棘蓬は栗の實の毬彙に包まれたる如く毬彙あるの食物を云ふ、凡そ刺ある者皆棘と爲す、蓬は亂の義なり、音義に『楊岐、衆に示して云く、金剛圈を透得して栗棘蓬を呑得す、便ち三世の諸佛と手を把て共に行き、歷代の祖師と一鼻孔を共にす、其れ或は未だ然らずむば、參は須らく實參すべく、悟は須らく實悟すべし』とあり、◎銅頭鐵額は頭額の堅きこと銅鐵の如きにて卽ち英納の稱とす、碧巖七十則、評に『聚窟洲に獅子銅頭鐵額の獸を出す』とあり。

（講解）辯首座出世して南康府廬山の棲賢寺に住しつ、常に一本の竹杖を携ち一雙の蒙屐を穿て、萬菴の住地なる九江府下の東林寺に過らる、混融、然老之を見

て呵して申すやう、凡そ師家たる者は身を重々しうして人の模範たるべきものぢや、ソレに他出に侍者從僕をも召連れず、其の擧止の輕卒なること此の如くである、何とて躬自ら輕せぬと云ふことを得られやうや、斯くては主禮甚だ滅裂とバラバラに壞るゝぞと。辯公笑つて云ふやう、人の此世に生存する間は己が意に適ふを以て至樂と爲す、吾今此の如くなるも何の禮に違ふの咎あらうぞと、乃ち毫を援き執つて五律一篇の偈を書して而して去られた、其の偈に曰く、色を以て我を見て棲賢此に窮すと謂ふ勿、假ひ身は窮しても卽ち這箇の在る有つて斯道に於て窮する所はないぞ、脚下の草鞋は西より東より一日千里で其の猛々しうして宛ら虎に似たり、手中の拄杖は天を撑へ地を撑へて其の活々して恰も龍の如きぢや（前聯は境界の自在なるを云ふ、）渴きたる時は曹溪の水を飲で喉を潤すことなるが差虎溪に勝るぞある、飢たる時は栗棘蓬を丸呑にして腹を脹かすことなるが敢て富を誇る譯ではないぞ、（後聯は得道の自然に任せて自由なるを云ふ、曹溪水は六祖の法水に比し、栗棘蓬は楊岐が法食の險崖なるに喩ふ、）畢竟するに大丈夫なる頭額の衲僧でなければ這は六ケ敷い仕事である、左れば銅頭鐵額の漢は他に能く幾人かある、靈く我が山中に集ひ居るぞとの偈にでありければ、混融老之を覽ていと愧づることと有りきとぞ。（月窟集は頭書に「增續傳燈卷一、惡諸の法嗣なる何山の月窟慧清禪師、此

人の集まるを見ねたり

辯公謂混融曰。象龍不足致雨。畫餅安可充飢。衲子內無實德。外特華巧。猶如敗漏之船。盛塗丹雘。使偶人駕之。安於陸地。則信然可觀矣。一旦涉江湖。犯風濤。得不危乎。月巖集

△大意、衲子の內に實德なくして、外に華巧を恃ひ者を誡む。

（字釋）象龍二句は宋朝文鑑四十八、司馬光進五規狀に「象龍以て雨を致すに足らず、畫餅以て饑を療するに足らず」とあり、象は似なり、藏本に像の字に作る、義に於て異なるなし、◎充はアッと訓ず、數に備ふるまでに其の內へ入れ置くことなり、◎丹雘は本講義八十六頁に出づ、◎安は安着安置の義にてオクことなり。

（講解）辯公混融に謂て申さるゝやう、象つたる龍は何程巧に出來たりとも雨を致す譯には行かぬ、畫いたる餅は如何に旨く出來たりとも安とて飢の料に充て塡むべきや、今の衲子たる者、內に實地の道德なくして外に華言巧語を心恃にするのは、丁度穴の明いて水の漏れる船に丹雘と云ふ美はしい彩色を塗着て、人形の船頭をして之に駕らせて陸地に置かさせる樣なもので、一寸外見したときは信然立派な船として觀らるべきものぢや、左りながら一旦其の船に乘つて江河湖海を涉り風濤の難を犯さば、何して危ないと云ふことが出來やうぞやとなり

辯公曰。所謂長老者。代佛揚化。要在潔己臨衆行事。當盡其誠。豈可擇利害。自分其心。在我爲之。固當如是。若其成與不成。雖先聖不能必。吾何苟乎。月巖集

△大意、衆に臨むの要は己が利害を見ず、但其の誠意を盡すべきを明す。

（講解）辯公の仰せに、世の謂ゆる長老と云ふは、佛祖に成代つて敎化を宣揚するものゝ、畢竟するに己を潔白にして、衆に臨み事を行ふて、是非に其の誠を盡すべきに在るのぢや、濫レ己は自利にして、臨レ衆行レ事は利他なり、而して盡レ其誠は自他不二の謂なり、豈して斯くは吾が利なれば之を爲さむとか、斯くは吾が害なれば爲さずとか抔と、己が利害を擇分て自らの心行を二ッにすることが出來やうや、長老たる我に在つて之を爲すことは固に當に是の如く利害を擇ばず分上の通りにすべき筈よ、若し斯樣にして所化の弟子が法器と成ると成らぬとは卽ち所化其の者にあれば、能化の先聖方と雖も、固より必然斯う法器と成らしむると云ふことは豫定の出來ぬのである、吾れ何とて其の成ることを無理苟にせむやとなり。

辯公曰。佛智裕和尙住西禪。衲子務要整齊。惟水菴和尙。賦性冲

澹奉身至薄昂昂然在稠人中曾不屑慮佛智因見之呵曰奈何蠢苴如此水菴對曰某非不好受用直以貧無可爲之具若使有錢亦欲做一兩件皮毛同入社火既貧固無如之何佛智笑之意其不可强遂休去月窟

（五百三十八）

△大意、衲子は洒々落々底にして、手を其の間に挾む可らざるを明す。

（字釋）佛智裕は慶元府育王寺の佛智端裕禪師なり、師は呉越王の裔、法を圓悟に嗣ぐ、◎水菴は臨安府淨慈の水菴師一禪師なり、婺州馬氏の子、法を佛智に嗣ぐ、◎澹は沖澹泊なり、沖は沖に同じくムナシと訓す、老子道德經に「大盈は沖きが若し」とあるが如き是なり、音義に「沖は和なり澹は恬靜なり」とあれど今は取らず、◎昂昂然は突き立ちて著しき貌を形容したるなり、昂はアガと訓ず文選四十七、袁彥伯の三國名臣序贊、銑註に「昂昂は出群の貌」音義に「孤高自如の貌」とあり、◎不屑慮、音義に「屑は輕苟なり又顧なり」正字通に「凡そ事物に遇ふて輕視して意を加へざるを不屑と曰ふ」とあり、◎蠢苴は藏本、音切に「蠢は藥の音、苴は七閭切」とあればヤクショの音なり、音義に「上は郎假切、下は音鮓」鮓は側切とあればラサの音なり、ラサの音に呼ぶを正しとす、堅瓠集に「今人、人の事を作して道理に中らざる者を謂て蠢苴と曰ふ」事文類聚別集六、字義部に「蠢苴は泥の熟せざるなり、中州の人、蜀人の放誕にして軌轍に遵はざるを謂て川蠢苴と曰ふ」とあり、頭書には脫字誤字あり、此に之を訂す、川蠢苴とは川は蜀川なり、蠢苴は泥土の塊り合はぬ貌とす常話に川僧蠢苴、浙僧瀟洒と云ひて蜀の僧はシドケナク、浙の僧はシトヤカナと云ひ傳へたり、シドケナシとは取亂して居る事にて著物など取締なく著做したるを云ふ、◎直はタヾと訓ず但なり、孟子梁惠王、上篇に「直百步ならざる耳」とあり、◎件はクダリと訓ず裝束などの一揃をいふ語なり、一件は猶は一領のごとし、一領も亦ヒトクダリと讀めり、翛然上人の入唐記に「衣裳一件」の語あり、件は說文に「分なり牛に從ふ牛は大なり故に分つ可し」六書故に「物別るゝなり、又件條の件に名く、俗に物數を號て若干件と曰ふ」とあり、◎社火は音義に「俗に會伴を呼ぶ也」とあり、社は正字通に「團結して事を共にする者亦社と曰ふ」字典に「後世賓朋會聚するを結社と曰ふ」と見ゆ、火は十人を云ふの說あれど、此には同夥合火の義に見るべし。

（講解）辯公の仰せに、圓悟の法嗣なる佛智端裕和尙は福州府下の西禪に住しつ、當時會裡の衲子は皆務めて衣服を立派に整ひ齊ふることを肝要とせしが、惟水菴師一和尙のみは賦性が沖澹泊であつて、身を裝ふことは至つて薄く常に弊

衣を纏ふて居た、左りながら昂々然と突き立つて多人數の中に在り、曾て物のかずとも思はで卽ち平氣の有樣なりき。師の佛智和尙事の因に水菴の斯る樣を見て之を呵して仰せらるゝやう、奈何ぞ蓋苴とシドケナキこと此の如くなるやと、水菴對て申すやう、某とても（某は和刊本に其に作り、今藏本に據て改む）受用の華美を好まぬのではない、直貧乏なるをもて之を爲す可き金錢の具へが無いからである、若し某として金錢あらしめたならば、亦一枚や二枚の裘を做つて皆の衆と同樣に其の社火入りを致さうと思ふのである、何分にも既に斯くまで貧窮であつて固に之を如何とも致方が無いとて、暗に皮毛を做るを云つて衆が獸皮もて身を飾るのを嘲つたのぢや。ソコで佛智老師は之を聞いて唯笑はれた、其の强ひ勸むることの出來ないものと意召して遂に其の儘に打棄つて置かれしとぞ。

以上、藏本第三卷の終りとす。

佛智謂水菴曰。住持之體有四焉。一道德。二言行。三仁義。四禮法。道德言行。乃教之本也。仁義禮法。乃教之末也。無本不能立。無末不能成。先聖見學者不能自治。故建叢林以安之。立住持以統之。然則叢林之尊。非爲住持。四事豐美。非爲學者。皆以佛祖之道故。

是以善爲住持者。必先尊道德。守言行。能爲學者。必先存仁義。遵禮法。故住持非學者不立。學者非住持不成。住持與學者。猶身之與臂。頭之與足。大小適稱而不悖。乃相須而行也。故曰。學者保於叢林。叢林保於道德。住持人無道德。則叢林將見其廢矣。（寶錄）

△大意、道德仁義の本末、及び住持學者の相須つ所以を明す。

（字釋）四事は供養の方法に於ける四種なり、之を四事供養とす、三藏法數十七に『衣被飲食臥具醫藥』とす文繁きをもて略す、遺敎經に『四供養に於て量を知り足るを知れ』道霈の夾註に『四供養は卽ち四事なり、衣服飲食湯藥臥具を謂ふ』とあり、◎適稱は共にカナフと訓す、適は宜しきを得たることにて稱は釣合ことなり、但し適の字に釋的の二音ありて嫡の字と通ずるときに的の音なれども、カナフ、ユク、タヾ〳〵などの義のときは釋の音なり、故に適宜適當の如きは皆釋の音に讀むべきを往々的と讀み來れり、是れ亦急に改め難きに似たり。

（講解）佛智端裕和尙が其の法嗣なる水菴師一に謂て申さるゝやう、住持の體要に四個の目がある、一には道德ぢや、道德とは日用當に行すべき所の道と尋常涵養する所の德とを云ふのである、二には言行ぢや、言行とは後學を開發するの言

と躬に履みゆく所の行とを云ふのである、三には仁義ぢや、仁義とは慈愛惻隱の仁と裁制宜しきに合ふの義とを云ふのである、四には禮法ぢや、禮法とは節臘省會の禮と規矩號令の法とを云ふのである、サテ此の道德言行の二ッは乃ち教の本であつて仁義禮法の二ッは乃ち教の末ぢや、若し末のみ有つて本なければ其の教を立つることが出來ぬ、本のみ有つて末なければ亦之を成就さすことが出來ぬ、左れば本末共に備つて始めて斯道を興隆すべきである。先聖卽ち百丈禪師の如きは慈眼もて學者の自ら治ることの出來ぬを見る、故に叢林を建て〻以て學者を安むじ、住持を立て〻以て之を統轄させる、然うなれば則ち叢林の尊い所以は住持あるが爲めのみではない衣服飲食臥具醫藥の四事供の豐饒善美に四方より聚むるは學者あるが爲めのみではない、皆是れ佛祖の道を成就させむが爲めの故ぢや、是を以て善く能化の住持たる者は必ず先づ道德を尊び言行を守るである能く所化の學者たる徒は必ず先づ仁義を存し禮法に遵ふである、夫れ故に住持は學者が無けねば教を立つることが出來ず、學者は住持が無けねば德を成ずることが出來ぬ、左れば住持と學者とは丁度身と臂との如く頭と足との如く、其の身臂頭足の大小が程能う適稱て違ひ悖らず、乃ち住持と學者と相須ち合ふて行はれるのぢや、故に先哲も斯く曰はれた、學者は叢林を保ち叢林は道德を保つと、如何にも其の通りで、住持の人道德ないときは、叢林のオッツケ其の廢亡に歸するを見るより致方なからうとするのである。（本文の主點は道德に存すれば、其の重き道德の一を擧げて、他の百行仁義禮法を略して之を結ぶ所謂省略の法なり。）

因に云ふ、藏本には本篇と次篇との位置を後先にし、次篇佛智曰を佛智裕和尙曰に作り、以て第四卷の首とす。

佛智曰。駿馬之奔逸。而不敢肆足者。銜轡之禦也。小人之强橫。不敢縱情者。刑法之制也。意識之流浪。不敢攀緣者。覺照之力也。烏乎學者無覺照。猶駿馬無銜轡。小人無刑法。將何以絕貪慾治妄想乎。（奥三郷居士法語）

△大意、學者の意識攀緣を制するは、猶ほ銜轡の奔馬を禦ぐが如くなるを明す。

（字釋）銜轡は音咸秘なり、銜はクツワともクツバミとも訓ず口食の義なり、元來フクムと訓む字にて口にくはふる義より轉ず、是れ馬の口に含ませて御する時に用うる具なり、必ず轡を添ふものとす、轡の釋は六轡の下に出せり、（字書に銜は金に從ひ行に從ふ、俗に銜に作るは非なりとあり。）◎刑法は刑事に係はる法律にて罪人に科する刑罰の事を規定

せるものなり前漢書刑法志に「聖人既に明哲（哲に同じ）の性を躬にし必ず天地の心に通じて、禮を制し敎を作し法を立て刑を設く」とあり、◎意識は八識中の第六識なり（八識とは一に眼識二に耳識三に鼻識四に舌識五に身識六に意識七に末那識八に阿賴耶識なり、三祝法數三十一に宗鏡錄を引て之を明せり）、意法爲めに緣して意識を生じ、意識は根に依りて而して意根を生じ、識に因りて能く分別す、能く眼耳鼻舌身の五根が所緣する色聲香味觸の五塵境界を分別するを以て意識と名く、凡そ前五識は各境に應じて起る別名なれども第六意識は分別の總名にして二六時中不斷起りつゝあるものなり、猶ほ意識の釋は所立の宗乘に依て較その義を異にする場合もありて片紙に悉すべきにあらず、◎攀緣は前に釋せり、◎覺照は本覺慧照とて凡夫なれば始覺の方なくとも本覺は具有し居るものなれば、其覺照の力が即ち雲間より日光の漏るゝが如く煩惱々裡に在りながら時時照すが故に之を覺照の力と名くるなり。

（講解）佛智裕和尙の仰せに、駿足な馬の奔逸と駈出して敢て歩足を肆にせぬものは、銜轡のあつて繫ぎ制して自由に令せぬからのことである、小智な人の强横と强く横にして敢て情欲を縱にせぬものは、國に刑法のあつて制し止めて氣隨に令せぬからのことである、第六意識のフイ〳〵と寄る瀨なく流涙して敢て攀

緣と物に取付き廻つて狼狽せぬものは、本覺常照の力で能く振返つて觀るからの事ぢや、嗚呼、學者の覺照ないのは、丁度彼の奔る駿馬を止るの銜轡なく、我儘なる小人を制するの刑法ないやうなものである、將又何を以てか能く貪慾を絕ち妄想を治められやうぞやとなり。（與三郷居士法語は佛智裕和尙が妙喜の法弟居士に與へる所の法語なる鄕頭書に存せり。）

水菴一和尙曰、易言、君子思患而豫防之、是故古之人思生死大患防之以道、遂能經大傳遠、今之人謂求道迂闊、不若求利之切當、由是競習浮華、計較毫末、希目前之事、懷苟且之計、所至莫肯爲周歲之規者、況生死之慮乎、所以學者日鄙、叢林日廢、綱紀日墜、以至凌夷顚沛、殆不可救、嗟乎可不鑑哉。（雙林寶錄）

△大意、古人が生死の大患を防ぐを述て、今人が富利を求ひることを誡む。

（字釋）易云云は ䷾ 離下坎上 水火既濟の卦なり、（既濟は水の既に濟れるなり、此卦を既濟と名づけたるは、水の性は水を下るものにて、其の用を爲すは必ず上るに在り、火の性は本も上る者にて其の用を爲すは必ず下るに在り、今離火下りて下にあり、而して坎水上りて上に在れば水火其の用を爲す即ち是れ既濟と名くる所以なり）、象下傳に「水火上に在るは既濟なり、君子以て患を思ふて豫め之を防ぐ」とあり、是れ孔子の說き玉ふ所にして坎水が離火の上に在るときは、離火炎

上して以て相濟成するの功を爲す、故に此卦を既濟と名く、然れども君子は此象を用ゐ、坎の險を見れば則ち既濟の餘、必ず禍患の事あるを思ひ、離の明を體すれば能く豫め方に濟るの時に當りて、其の患を防ぐの備へを爲すものなり、◎迂闊は共にウトシと訓ず、迂は廻はり遠きことにて、闊は間の懸け離れたることなり、即ち迂遠疎闊の義とす、趙岐孟子題辭に「時君咸之を事に迂闊なりと謂ふ」（本史央記孟子列傳に錄る、頭書に見ゆ）又李華弔古戰場文に「王道をば迂闊なりとして爲すこと莫し」とあり、◎切當は切近的當なり、◎苟且は假初の義にて暫時の間に合せなり、韵會に「草率なり」と見ゆ、◎凌夷は三百五十五頁に釋す。

（講解）佛智の法嗣なる水菴師一和尚の仰せに、易の既濟卦の彖傳に斯く言つてある、君子は患の生ずるを待つて防ぐにあらず、平常無事の日に後の患の有らむことを思ふて豫め之を防ぎ置くものぞやと、是の故に古の人は皆生死の大なる患を思ふて之を豫防するに斯道を以てし遂に能く廣大に經營し久遠に流傳せられたのである、今の人は道を求るの迂闊と廻り遠なる事よりは、利を求ることの切當とヒッタリして慥なるには及ばぬものぞやと謂ふて居る、由是互に競ふて浮べの華を見習ひ、毫末の利を計り較べて、俗に謂ゆる後の百より今五十と云

ふやうに、唯日用目前の事を希ひ求めて、苟且なる一すの計を懷く許りで、此處も那邊も肯て立身行事に滿一年の規程を爲す者が莫い、然るを況てや生死事大の遠き慮を爲す者に於ては猶更なからうよ、斯う云ふ譯ぢやから學者日に鄙く蹙林日に廢れ大小の規矩は日に墜ちて、何から何まで丘凌の漸く平夷なるやうに次第々々に道の頹れ頽沛に及ひだ、最う斯うなつては殆ど救ふて防ぎ止めることが出來ない、嗟乎明けき鑑で物の美醜を見分る如く、篤と此の道理を鑑みねばなるまいやとなり。

水菴曰、昔遊雲居、見高菴、夜參謂至道、逕挺不近人情、要須誠心正意、勿事矯飾偏邪、矯飾則近詐佞、偏邪則不中正、與至道皆不合矣、竊思其言近理、乃刻意踐之、遽見佛智先師、始浩然大徹、方得不貧平生行脚之志、興二堂一書

△大意、納衣下、洗除すべきの事を知れば則ち大に辨道に利あるを明す。

（字釋）逕挺云々は本講義三百三十七頁に出づ、◎矯飾は心になき事を上邊に飾ることなり、（矯はイツハルと訓ず、元來ヌミモ訓ジテ矢ヲタヒルヨリ出タル字ニテ心ニ思フコトヲタメ抑ヘテ顏色ニ出サデ思ハヌ風ヲスル也、夫れよりイツハルの義あり、後漢書章帝紀に「俗吏外貌を矯飾す是に似て非なり」とあり、）◎刻意は頭書に

出たるが如く莊子外篇刻意篇の字面なり、刻はキザムと訓じて木を削りて角を立つることにて其の意を鋭くするを云ふ、和刊本にサダムの訓を付したり刻にサダムの訓なけれども亦決定するの義より此の訓を施せしなるべし、◎浩然は廣大の貌孟子に出づ、◎大徹徹は トホルと訓ず底まで徹はり抜くることにて徹底と連用す。

（講解）水菴一和尚の仰せに、予昔し南康府下の雲居に遊方して、高菴善悟禪師佛眼の夏の夜參を見るに、其れに謂はるゝやう、至極の大道は卽ち人々具足の靈性なるが、毫も擬議すれば謂ゆる對面千里の看となるよ、ソレで逕庭と遙かに隔つて世間に在るべき人情話ではない、何でも其の心を至誠にし其の意を至正にして、矯飾と矯り飾り偏邪と偏り邪なるを事とすることの勿い樣にするのを須めるのが肝要で、若し矯飾なるときは詐り佞ひに近く、偏邪なるときは中道の正しきを得られじ、是れ皆至極の大道と合體せぬものゆへとて、斯くは一場の垂語があつた。予退いて、竊かに其の夜參の言句を思ふに如何にも道理に近い、乃で憤然意を鋭くして之を心地に蹈み行ふて、居た、卽ち顧はず躬行實踐したのである、後に我が佛智先師に相見するに逮ぶで夜參の言句と渾理の境と益〻冥合圓融し、始めて浩然とオッピライて大悟徹底した、是に於て方に平生行脚の素志に負かぬことを得たりきとなり。（眞月堂住持は水菴和尚より警策の妙法思惟の法嗣なる杭州淨慈の月堂道昌禪師に與ふる所の書なり。）

水菴曰。月堂住持。所至以行道爲己任。不發化主。不事登謁。毎歲食指。隨常住所得用之。衲子有志充化導者。多却之。或曰。佛戒比丘持鉢以資身命。師何拒之。弗容。月堂曰。我佛在日則可。恐今日爲之。必有好利者。而至於自鬻矣。因思月堂防微杜漸深切著明。稱實之言。今猶在耳。以今日觀之。又豈止自鬻而已矣。（法語）

△大意　古人道の爲めに聲利貧枯を忘るゝことを明す。

（字釋）化主は本講義二百十六頁に釋す。◎登謁は王公の門に登りて謁見を請ふなり、謁はマヒスと訓ず君にまみえたしと申上ることなり、其れより轉じてまみゆることに用ふ、◎食指は拇指の次の指にて俗に人差指といふ、其の之を食指と呼ぶものは食する時偏に用ふる所の指なるを以てなり、左傳宣公四年傳に「子公の食指動く」註に「第二指なり」又疏に「手の五指の名は一に巨指、俗に親指と云ふ、二に食指、三に將指、俗にタカ〳〵指と云ふ、之を將指とするが爲なり、手の物を取る、中指之が長たり、故に將指の名あり、四に無名指、俗に藥指、又紅差指といふ、此の指にて藥を又は紅などを溶くるによりて此の名あり、五に小指なり」とあり、但し此に食指と云ふは

食物の義に見るべし。◎持鉢は托鉢を他人の淨信に托して布施せしむるの意なり、の事にて行乞の異名なり、象器箋雜行類に「城市に乞食するを持鉢と曰ふ」とあり、今は乞食の名稱を避けて專ら持鉢托鉢の文字を用ふ、◎自鬻は孟子萬章上篇の字面なり、鬻はひさぐと訓ず賣なり。

（講解）水菴和尚の仰せに、月堂道昌禪師は何れに住持しても、皆佛祖の道を行ずるを以て自己の責任とせられ、檀越を勸化する者を出さず王公などに謁見するを事とせず、一年中の食物は常住の所得に隨つて之を受用せられた、即ち所得の多い時は豐にし少い時は約かにするのである、衲子の中に勸化の任に充てられたいと志願する者あれば大抵之を受付られじ、或人申すやう、昔し世尊は諸の比丘を戒めて鉢を持し食を乞ふてツレで色身壽命を資け命せらる、（金剛經に「爾時に世尊食時に衣を著し鉢を持して舍衛大城に入て乞食し玉ひて其の城中に於て次第に乞ひ已て還りて本處に至り飯食し訖る云云」蓋ほ諸經律中に往々見はれたり、）ソレに師は何とて之を拒むで容さゝるやと、月堂之に答へて我が佛世尊の世に在し日は則ちツレで可いのであつたが恐くは末世の今日に之を爲せば、必ず利を好む者即ち公に假つて私を濟さむとして自ら之を商賣とするもの有るに至らむとを申されける。因て月堂禪師が豫め事の萌し起らむとするの微を防ぎ常に物の次第次

第に發し始るの漸を杜ぐの深切著明なることを思ふ、其の實に稱ふの言は今猶は我が耳に殘つて忘れざるが、今日を以て之を觀れば益〻甚しく、又豈に止自ら其の法を商賣にする許りであらうやとなり。

水菴謂侍郎尤延之曰。昔大愚慈明谷泉瑯琊結伴參汾陽。河東苦寒。衆人憚之。惟慈明志在於道。曉夕不怠。夜坐欲睡。引錐自刺。嘆曰。古人爲生死事大。不食不寢。我何人哉。而縱荒逸。生無益於時。死無聞於後。是自棄也。一旦辭歸。汾陽嘆曰。楚圓今去。吾道東矣。（西湖記聞）

△大意　古人の刻苦終に能く淇基を成し、以て後昆を激發することを明す。

（字釋）尤延之、姓は尤名は袤字は延之、遂初居士と號す、道を水菴一禪師に問ふ、宋孝宗の朝に仕へて官侍郎に至る。◎河東は一統志二十一に「汾州は河東道に屬す」とあり。◎不食は强ち食せぬと云ふに非ず、食事を打忘れて其の間も虛しく費さざるを云ふ。◎不寢は强ち睡らざるの義に非ず、睡眠の時間をも惜みて安穩に寢ねざるを云ふ。◎荒逸は荒醉逸遊なり、音義に「情を恣にし意を放にして、怠惰荒淫流蕩して返ることを無きなり」とあり。

（講解）水菴和尚が侍郎の官に居る尤袤字は延之といふに謂て申さるゝやう、昔し大愚守芝、石霜慈明、芭蕉谷泉、瑯琊慧覺の四師が伴侶を結び遙々と故山を出で去つて、汾陽太子院の善昭禪師許へ往いて參叩した、（此事既に高僧頌の章に出づ、）サテ汾陽の地は北の方河東道に屬して居るから苦しい寒氣で、若壯りの大衆達も皆之を忌みと畏れた事ぢや、惟慈明のみは其の志が斯道一片に在つて暑い寒いは苦にならず、朝は早く起き夜は遲く寢ねて撓み心の出ることなく、夜坐に睡氣の起らむとすれば、錐を以て自ら其の身を刺して覺せるやうにした、嘗て嘆息して曰ふやう、古人は生死事大の爲めに、食ふことも寢ることも打忘れて工夫究明せられれた、抑も我は如何なる者ぞや、古人より見れば懸かに劣根機の者である、而るに荒逸と遊びに耽つて氣隨氣盛にして居られやうや、生て現時に何の益もなく死して後世に名の聞ゆることも無いのは、是れ自ら其の受け難き人身を打棄ると云ふものぢやと、（昔客陶侃傳に侃常に人に語て曰く、大禹は聖者、乃ち寸陰を惜む、衆人に至ては當に分陰を惜むべし、豈に逸遊荒醉す可けむや、生て時に益なく死して後に聞ゆることも無きは是れ自ら棄るなり、）と、自ら警めて精進勇猛に修行して遂に汾陽の道を得たりき、一旦汾陽許を辭して故國へ歸省しかば、汾陽乃ち嘆美して仰せられけるやう、楚圓慈明號の今下山して東へ去つたぞ、是ぞは吾が道已に東方へ行て仕舞ふたのぢやとて、

深く慈明の得道を褒められきとぞ。（後漢の郭立、事に馬融が門下に從ふ、三年にして事成り辭し歸る、融、喟然として曰く、郭生今去る、吾が道東すと、後漢書列傳二十五に見ゆ。）

因に云ふ、慈明禪師引錐自刺の事、又禪關策進に出づ、我が鵠林翁が天下の衲僧を走殺したるの神機は全く此に發したりきと云ふ、故に曰く學道の人此等の章を師して當に自慚自警すべしと、翁の吾人を誡ひる亦深切なりと謂ふべし。

水菴曰古德住持率己行道未嘗苟簡自恣昔汾陽每嘆像季澆漓學者難化慈明曰甚易所患主法者不能善導耳汾陽曰古人淳誠尚且三二十年方得成辨慈明曰此非聖哲之論善造道者千日之功或謂慈明妄誕不聽會有梵僧託夢汾陽勉令法施啓迪後來不三年果有六人成道者汾陽嘗有頌曰胡僧金錫光爲法到汾陽六人成大器故我爲敷揚（四湖記聞）

△大意、學人得力の遲速は、主者の親疎に由るを明す。

（字釋）苟簡は苟且簡略の義なれば丁寧ならずして疎略なるを云ふ。◎造はイタルと訓ず字書に『詣也』と註すれども亦差別あり、詣は此處より彼處に往くことにて造は彼處より此處に來ることなり、故に押し着けて此方のものに成る迄に爲

たるを造とす學業の上達するを造詣と云ふは進み到る義なり、◎妄誕は虛妄高誕なり、妄は驗なきの言なり、誕はイツハリと訓じて物事を大袈裟に云ふことなり、◎會は折節折柄など〳〵譯す、藏本を檢するに本文會有梵僧より啓迪後來に至るの十六字なし、而して「而汾地多冷、因罷夜參有異比丘、謂汾陽曰、會中有大士六人、奈何不說法」の二十九字あり、◎法施は敎法を回施するの義、名義集に「淸淨心を以て人の爲めに演說するを法施と名く」金光明經に「法施は自利を兼利し能く衆生をして三界より出で〳〵諸煩惱を斷じ總身を成就す」とあり、◎啓迪は本講義三百八十七頁に釋あり、◎故我爲敗揚は藏本に勸請爲敗揚に作れり、私に案ずるに藏本の如くせば一個悉く胡僧勸請の意になりて面白からず、和刊本の如くなれば轉句にて胡僧勸請の意盡き、結句にて之を結成して汾陽が化門を闡揚するの意となりて全篇大に通暢を覺ゆるに似たり。

（講解）水菴和尙の仰せに、古人大德方の住持は、先づ己を卑き立て〳〵斯道を行ずるのであつて、未だ嘗て苟簡と疎略にして自ら恣にはせぬ、昔し汾陽の無德善昭禪師は、每に嘆息して、像季の今日は人情が澆く漓うして學者をば化度仕難いと云ふて居られた、會下の慈明之を聞いて申すやう、像季の今日と雖も銘々の靈性

に替りは無いから、化度することは古と同じく仕易いが、唯一患ふる所は法を主る者が、諄々然と善く導くことを得せないのみであると、汾陽の仰せに、古人は淳朴誠實の賀であるに、夫すら尙は且つ二十年三十年の長い歲月修行して、方めて大事を成就辨明することを得た位ぢや、ソレに何とて然う無造作に遣れるものかと申された、然るに慈明は道に造らひとするの志が急なるから猶は重ねて曰ふやう、汾は聖人賢哲の至論では無い、善く大道に造詣する者は千日とて先づ三年の功を積めばソレで成就するものであると、或人慈明の說は妄誕とて理なしの法螺ぢやと謂て聽き入れなかつた、折しも梵僧とて天竺異樣の比丘が有つて錫杖を振ふて至り、夢を汾陽住持に託けた、是れは當時汾陽が寒氣に堪へ遣らぬより夜參を罷めて居たのを激勵させむ爲めに、衆中に六人の大士があるに何故說法せぬのかとの事を以て爲たのである、乃ち汾陽をして撓まず勉めて大法を回施して後來の學者を啓迪かせた、夫より汾陽が誘導の善きにや因りけむ滿三年にもならぬ中に果して六人までも斯道を成辨した者が有つた、六人の六の字を唯一數の六に（のみ若眼する勿れ、三年の短日月を出でざるに六人の多き道者を出すに至るの恐なり、而して果の字は不三三年一有三六人の所方に關鎖するなり、）六人と申すは卽ち慈明、大愚、瑯琊、谷泉、及び法華舉の全舉禪師、大聖泰の嶋泰禪師の六大士である、

慈明が先きに謂ゆる千日の功とは此に至つて妄誕ならざることを得た。汾陽嘗て上堂して二十言の頌偈が有る、其の頌に曰く、異な胡僧が金の錫杖を光して、大法の爲めに遙々と此の汾陽まで遣つた來た、彼れは我れに託して云ふやう、會中六人の大士は皆是れ大器を成ずる底の漢ぢや程に能く鉗鎚を加へよと、夫れ故に我れ此の化門を豁開して敷演宣揚するのであるぞとなり。（下の文は傳燈所載の汾陽が傳に就て記したるものなるべし。）（下に及傳傳の三字あり、然れは藏本に謂ゆる汾地多冷云云以下の文は藏本には本篇の出據を示したる西湖記聞）

（參照）林間錄下曰、汾陽無德禪師、北地苦寒、因罷夜參、忽有梵僧乘雲而至、問所以不說之意、師以衆僧不可夜立爲詞、梵僧曰、時不可失、此衆雖不多、然中有六人、異日爲大宗師、道蔭人天、可開大慈爲法施、不可懸也、言卒而沒、師明日上堂曰、胡僧金錫、光爲法到、汾陽六人成大器、勸請爲敷揚、時大愚芝、慈明圓、瑯琊覺、法華舉、諸公咸在、會下矣。

投子淸和尚圖水菴像求贊曰、嗣淸禪人、孤硬無敵、晨昏一齋、脇不至席、深入禪定、離出入息、名達九重、談禪選德、龍顏大悅、賜以金帛、力辭者三、上乃嘉嘆、眞道人也、草木騰煥、傳予陋質、炷香請贊、是所謂靑出於藍而靑於藍者也。（見圖）

△大意　古人進修の功積み、密參の力充ち、至尊の歸仰に逢ふて、以て晩進の道情を激するを明す。

（字釋）無敵は孟子梁惠王上に「仁者は敵なし」とあり、◎脇不至席は脇とは胸の側面、肩腋の下にて臥するとき席に著く所なれば、横になりて睡眠せるを云ふ、十祖脇尊者より起りし事なり、西域記に「唐には脇と言ふ、自著に我れ若し三藏の理に通じ三界の欲を斷じ六神通を得、八解脫を具せざれば、終に脇を以て席に至らしめじと曰ふに由り、故に脇尊者と號す」とあり、◎深入禪定は禪定とは梵漢兩舉の語なり、禪又定と譯す、心を一境所に接して散亂せしめざるの謂なり、金剛經註に「能所生せざる是を禪定と名く、禪定は卽ち是れ淸淨心也」法華安樂行品に「深く禪定に入て十方佛を見る」顧祿に「深く四禪九定に入らば、死するが如く呼吸を見ず」と云へり、（四禪九定は法界次第に出づ、）◎離出入息は深く禪定に入るの相を示すなり、維摩觀衆生品に「滅盡定に入て出入の息の如し」（滅盡定とは受想の心滅し出入の息盡くるなり、肇が註に「心、內に馳動して、息、外に出入す、心寂靜ならざるが故に息出入なき也」とあり、凡そ息の高さは妄想多くして心寂靜ならざるが故なり、）◎九重は皇居を稱す、天子の居は垣墻深奥なるを欲して九重の門を備ふ、（九門の名は頭書に見ゆ、）是れ天に九重の天あるより之に擬し

たる者にて九は陽數の極なり、今は門の數に拘らず唯禁中を九重と稱すべし、◎選德は南朱、孝宗建る所の殿名なり、洪景盧命を奉じて記を作る、事文類聚續集五に見ゆ、◎龍顏は天顏なり、韻府に『天子の相なり』とあり、字の出處は頭書に在り、◎上は天子の稱なり、前漢武帝の朝に其の臣司馬遷、史記を編述するに當りて、下賤の口より天子と稱することを憚り、凡そ上は尊重する所なればとて君を上と書き或は主上今上と呼びたるより傳へて天子の稱となれり、事物紀原卷一に見ゆ、◎傳子陋質は水菴自ら謙するなり、是れ圖像を傳ふるは表にして法を傳ふるは裏なり、而して其の重きは却て裏に存す、◎青出於藍は荀子勸學篇に『君子曰く學は以て已む可らず、青は之を藍に取る、而して藍より青し、氷は水之を爲す、而して水より寒し』（頭書に引く所は文字小異あり、史記三王世家に『傳に曰く青采、藍より出づ、而して質の藍より青き者は敎の然らしむるなり』淮南子俶眞訓に『藍を以て青を染ひれば則ち藍より青し』）又故事成語考師生部に『青は藍より出で〻而して藍より勝るは門下の師傅より優るを謂ふ』音義に『青色は乃ち藍中の靛に由て之を染む、（靛は音電アヰノハナ）に浮ぶ者を靛花と爲す』とあり、其の色返て藍より深し、弟子學で止まざれば師に勝れり、乃ち末の本に勝るなり』とあり、凡そ弟子の師より拔出したるを出色とか

出藍之才とか稱するは皆荀子を本とす、

（講解）舒州投子山の仰山嗣清和尚が、其の師水菴老漢の眞像を畫いて自贊を求めた、（弟子が師の像を畫して師に自贊を乞ふは藍し古法なり、）水菴直に贊して曰く、（其の贊辭に自己の事を云はず、專ら乞ふ者の德を稱す、亦一法なり、）嗣清禪人は孤硬と獨り手剛くして之と敵對するものは無い、晨昏一齋を一日に一食より致さず、脇をば席に着けず二六時中不臥の身である、禪定とて常に坐禪觀法を修して深く寂靜三昧に住して居るから、兀たること頑石の如く九で死人同樣で、ソレで出入の息を離るゝと云ふのぢや、畢竟入息は陰界に居らず出息は諸緣に涉らないのである、其の名聲は遠く九重の上まで達して、時の天子孝宗の敕に應じて禪を內宮の選德殿に談じた、乃ち天子の顏は殊の外麗しくて、爲めに手厚う金帛の類を賜はりしが、夫をば再三御辭退申したので、天子は益〻其の德を嘉して御嘆美遊ばされた、是れ眞に得道の人であつて威德の餘光は吾山の草木まで躍り騰つて煥乎と光明を放つたぞ、ソレに私の樣な陋質者の法を傳へ像を圖して、玆に恭しく香を炷て自贊を請ひ求めぬ（以上四言十六句、以下古語を以て結ぶ、）是れは古に謂ゆる青色は素と染草の藍の中の青によつて染りたるものなれど其の色は反つて藍よりは青い者ぢやと云へるが如何にも其の通り師匠優りの弟子ぢ

やとて藍を以て水菴自己に比し青を以て嗣清に比せられたのである。見圓悟本に圓を蓋に作れり。

水菴曰。佛智先師言。東山演祖嘗謂耿龍學曰。山僧有圓悟如魚之有水。鳥之有林。我丞相紫嵓居士贊曰。師資相可。希遇一時。始終之分。誰能間之。紫嵓居士。可謂知言矣。比見諸方尊宿懷心術以御衲子。衲子挾勢利以事尊宿。主賓交利。上下欺侮。安得法門之興。叢林之盛乎。既三梅山洞一番

△大意　師資の相遇すること水魚の如くなれば則ち法道の興盛に至るべきことを明す。

（字釋）我は古文の翼の字なり。◎丞相は前漢書百官表の註に『丞は承なり相は助なり』とありて萬機の廣大なるをば其の君を助けて承け掌るの意なり之に左右あるは我國從來の左右大臣の如し。◎紫嵓居士姓は張名は浚字は德遠紫嵓居士と號す南宋高宗の紹興中に相に拜し魏公に封せらる道を圓悟に問ふ。◎師資は老子經第二十七章の字面にて頭書に出せるが如し資はタスケと訓じて元來財寶を以て元手を爲てやる義なり故に不善人は善人の資と云ふも不善人の爲めに

は善人が入用の品になることなり、音義に『師は人の模範なり人の長と爲りて物を訓ふる規なり資は助なり己身の行業を助發す、又師は道を以て弟子に傳へ、弟子は學を師に資る也』とあり（後說は資持即ち弟子學を師に取るに目くるに由れり、猶ほ釋氏要覽上に師資編あり參照すべし）。◎誰能間之此の四字は左傳隱公三年、傳に出づ間はヘダツと訓じて中に物を置き隔つる意なり論語先進篇に『孝哉閔子騫人其の父母昆弟の言を間せず』註に『非間の言あるを得ず』とあり。◎心術は心の物に觸れ事に從ひて行く所を云ふ故に禮樂記に『感に應じ物に起て動く然して後に心術形る』となり、又前漢書禮樂志師古註に『術は道徑なり心術は心の由る所なり』と見にたり。

（講解）水菴和尙の仰せに我が佛智先師の言に東山演祖が（演祖は白雲の子にして佛智の祖父（ヂイ）に當り、水菴の曾祖父（ヒイヂイ）に當る、師白雲、演祖、圓悟、佛智、水菴と系す）嘗て耿龍學延禧に謂て申されけるやう山僧が圓悟あるは丁度魚の水あつて自由に鳥の我あつて自在なる樣なものぢやと、是れは魚水あれば則ち游ぎ水なければ則ち死す、鳥我あれば則ち飛び我なければ則ち落つるとの謂ひで、實に東山が圓悟を賴むの意の至つて切なることが見らるるである。（以上佛智の物語にして以下水菴の言と見るべし）故に當時丞相の官に居た紫嵓居士といふが圓悟老漢の爲めに贊して曰ふ、師の東山と資の圓悟と機々相投合して、其の希れに

遇ふたのは謂ゆる千歳一遇よ、此の師資二人が始終の分は素よりヒタリとして密切なるから、誰とて能く其の中を間つる者あらうやと、四百四句紫嵓居士の如きは誠に言を知りたる即ち道理に明るき人と謂ひつ可きぢや。比ろ諸方の尊宿として師家方を見るに、胸に心術を懷いて以て納子を支配し、納子も亦心に勢利を挾として以て尊宿に諂ひ事ふ、斯く主も賓も雙方から己を利せむとし、上も下も互に欺き侮ることを致す、ソレで安して法門の興起し叢林の盛大なることが出來やうぞや。與梅山・潙二書は水菴より與ふる所の書なるも潙は未だ其の傳記を詳にせず、

水菴曰。馴人以言。惟要深切。言不深切。所感必淺。人誰肯懷。昔白雲師祖。送師翁住四面。叮嚀曰。祖道凌遲。危如累卵。毋恣荒逸。虛喪光陰。復敗至德。當寬容量度。利物存衆。提持此事。報佛祖恩。當時聞者。孰不感慟。爾昨來召對宸庭。誠爲法門之幸。切宜下身尊道。以利濟爲心。不可矜己自伐。從上先哲。謙柔敬畏。保身全德。不以勢位爲榮。逐能清振一時。美流萬世。予慮光景不長。無復面會。故此切囑。（見二投子二書）

△大意、主者の德輝輔、益大ならば輔謙下し、賓價輔高遠ならば輔辭讓して、以て

道果を保全すべきを明す。

（字釋）四面は一統志十四に「安慶府の四面山は太湖縣の西、一十里に在り、形ち方にして銳なり、四面一なるが如し」とあり、◎累卵は至て危きことの譬なり、漢書鄒陽傳に「累卵より危し」師古、註に「累卵とは其の將に隤れて破碎せむとするを言ふなり」とあり、累は圓き物のかさなりたる字にて薄き物には多く用ゐず、◎毋は如彼するな、如斯するなの勿の字義にて動作を禁止する辭なり、但し勿の字よりは重し、◎此事は單に佛心宗にて稱する語なり、直に自己本分の事を指して一大事と云ふと雖も教家の說に類するに非ず、◎感慟、慟當に動に作るべし、◎爾昨來、和刊本に昨の字を脫す、今藏本に據て之を補す、◎宸庭は帝居にて天子の玉座に定め玉ふ處を稱す、宸はフカキイヘと訓ず、貫達カ曰く「室の奧き者なり、後人、帝居を稱して宸と曰ふ」增韵に「帝、北辰の宮に居す、故に宸に從ひ辰に從ふ」とあり、（高乘の君は北辰の宿る處を定めて衆星を拱（ふ）するが如く、四極の民人咸く來朝服從せしむるの義を取る、故に北方に居て南面し玉ふものなり）◎矜己自伐は老子二十二章に「自ら伐らず故に功あり自ら矜らず故に長し」とあり、矜は本講義八十一頁に釋せり、伐は字書に「自ら其の功を稱する也」とありて手柄自慢をすることなり、◎囑はツクともアツラフルとも訓じて付囑、囑托などゝ連用す。

（講解）水菴和尚の仰せに、本篇は水菴が法子の投子嗣清に示す所の書なれば其の心して見るべし。人を感動させるに言の葉を以てせむには、惟深切とて道理の聯として浮付ぬやう慇懃にするのが肝要ぞ、若し言の葉が深切ならざれば、其の感動させる所が必ず膚淺で染込ぬから、ソレでは人誰か納得して我に懐かうぞや。昔し白雲端師祖が東山演師翁を送つて、師祖は高祖父（オカヒヂ）師翁は曾祖父（ヒヂ）と云ふが如し皆水菴より見るの言なり、安慶府下の四面山に住持させつ五祖演初めて四面に住するのこと、普燈錄八に見ゆ、其の時に染々と叮嚀に申されけるやう、佛祖の妙道は凌遲と次第々々に頽れ衰へて、其の危い樣は宛ら積み累ねたる卵の今にも墜て碎けんとする樣なものぞ、此の危急な時節に當つて、自ら荒醉逃遊を恣にし盛に貪重の光陰を費ふて、復た本有の至德を敗ることを致す毋、是非に胸量態度を寬容と押廣いて、一切の物を利濟し四來の衆を存撫し、此の一大事を提起扶持して佛祖の大恩を報ずべしとの言を以てせられた。古に云く「仁者は人を送るに言を以てす」と、如上白雲の語、深切思到なりと謂ふ可き也、當時此の深切な言を聞いた者は孰とて感動せぬぞ有らうぞ皆大に感動したとの事ぢや。爾投子よ昨來に召されて宮中に入つて說法したのは孝宗の敕命に應じ逸德殿に於て法を說きしことは已に水菴が傳聞に見ゆ、誠に是れ法門の大幸である、切に宜しく其の身を謙下し斯の道を尊崇て、他を利益濟度するをもて心とすべし、縱や天寵を得るとても己れが賢

に矜り自ら其の功に伐つてはならぬ、從上の先哲方は謙り柔に敬み畏れて、其の身の正を保ち己が德の美を全うせられ、始より彼の浮雲の如く權勢高位を以て更々面目とは致されぬぞ、斯う云ふ譯ぢやから自然に其の光輝が發して、遂に能く清き聲が一時に振揚し美き譽が萬世に流傳するのである、予は最早老年に及むだので往先光景の長からぬを思ひ量るに、復た爾に面會することが無からうも知れじ、夫故に今此に返々も此の事を囑へ置くぞとなり。見投子、投子、此はシメスと訓して示し見するなり。

水菴少倜儻有大志。尙氣節不事浮靡。不循細檢。胸次岸谷。徇身以義。雖禍害交前。不見有殞穫之色。住持八院。經歷四郡。所至兢兢業業。以行道建立爲心。淳淵伍年。退西湖淨慈。有偈曰。六年灑掃皇都寺。瓦礫翻成釋梵宮。今日功成歸去也。杖頭八面起清風。士庶遮留不止。小舟至嘉禾。天寧。未幾示疾。別衆告終。行狀

△大意、古人至る所專ら祖道を振揚し、叢林を建立するの意を明す。

（字釋）倜儻は音惕蕩なり、卓異不羈の義として人に卓れ異りて物事に羈絆せられざるを云ふ。羈は繫がるゝことなり、◎胸次は上ノアヒダと訓ず、胸中と云ふに同じ、

莊子田子方篇に「喜怒哀樂、胸次に入らず」註に「次は中なり」と見ゆ、◎岸谷は音義に「岸は露岳なり谷は兩山の間の流道なり、蓋し胸次冲虛にして高岸空谷の川を容るゝの量あるが如し」老子十五章に「曠として其れ谷の若し」翼註に「谷の若しとは虛にして藏す所なき也」とあり、◎徇は二百四十四頁に釋す、◎殞穫は憂悶不安の貌、又困迫失志の貌、禮記儒行篇に「貧賤に隕穫せず」又家語に出づ、註に「隕は墜の隕るが如く而して飄零す、穫は禾の穫るが如く而して枯槁す」とあり、◎灑掃は禮、內則曲禮等の字面なり、註に「灑は水を灑ぎ以て塵を斂むるを謂ひ、掃は地を掃ひ以て塵を去るを謂ふ」とあり、◎皇都寺は淨慈寺を云ふ、淨慈は臨安に在り、臨安は孝宗の都する所故に皇都、寺と稱す、◎嘉禾、天寧は藏本に秀、之天寧に作る共に妨ざるが如し、一統志三十九に「嘉興府五代の時、錢氏奏して秀州を置き嘉興縣を治す、宋に浙西路に屬す、政和の間名けて嘉禾郡と爲し、慶元の初め州を陞して嘉興府と爲す」又「天寧寺は府治の北に在り宋の治平中に建つ」とあり、◎示疾は凡そ知識には疾病なきものなれども、世間に對して疾を煩ふて見すると云ふの義より示すと云ひ其の死を示寂と稱するなり、左れば凡僧には用ふべきに非す。

（講解）水菴和尚は少壯の時より倜儻と人に勝れ物に絆されずして大なる志あり、氣骨節操を尚びて浮華奢靡を事とせず、細々しい規則に添ひ若て檢束せられず、高岸空谷の氣流を容るゝ如きの量を以て己が胸次とし、其の身を以て義の在る所に徇ひ付て一切之が義と云ふを離れない、假ひ頻々と禍害の目前に交るに至るとも、殞穫と憂へ悶ゆる樣の顏色あることを見ぬ、殊に其の出世以來、八院四郡の名稱未だ考へず、識者の示教を待つ、其の至る所何れに於ても住持し四郡を經歷せられけるが、日夜兢々と恐れ業々と危みて、大道を流行し叢林の頹れたるを建立するをもて心と致されたッテ南宋孝宗の淳熙伍年に臨安西湖の淨慈寺を退かれつ、時に辭世の意を寓したる退山の一偈が有る、乃ち其の偈に曰ふ、六年の間灑掃とて水を灑ぎ塵を掃ふて此の皇都の淨慈寺に掃除坊主となつて居た、ソコで久しく荒れ廢れたる瓦や礫のガラ〳〵あるのを取片付て翻つて帝釋梵天宮の樣にサッパリと致したよ、是れは水菴が一寺の主と爲つて法道を振ひしことなれども掃除に託けて斯樣に云ふたのである、ッテ今日聊か功も成就したと云ふものぢや程に何處へか歸り去ると致さう、拄杖頭邊には四方八面に颯々たる清風を起したれば去住自在であるぞと、此の清風の字は瓦礫灑掃等の字より來りたるものにて、ツマリ境界の洒々落々十方無盡なる場合を申したので卽ち歸路の活消息ぢ

や・ツコを大衆は申すに及ばず士庶人咸く路を造り留ひれども止り給はで、飄然一葉の小舟に乗じて、嘉禾の天寧寺に至られた、夫より未だ幾程もならざるに疾病を示し衆に別れて坦然と終を告げられさとぞ。（行實は即ち水菴の行狀實記なり。）

月堂昌和尚曰。昔大智禪師。慮末世比丘驕惰。特製規矩以防之。隨其器能。各設攸司。主居丈室。衆居通堂。列十局頭首之嚴肅如官府。居上者提其大綱。在下者理其衆目。使上下相承。如身之使臂。臂之使指。莫不率從。是以前輩遵承翼戴。拳拳奉行者。以先聖之遺風未泯故也。比見叢林衰替。學者貴通才賤守節。尚浮華薄眞素。日滋月浸。漸入澆漓。始則偷安一時。及玩習既久。謂其理之當然。不謂之非義。不謂之非理。在上者惴惴焉畏其下。在下者睽睽焉伺其上。平居則甘言屈體。以相媚悅。得間則狼心詭計。以相屠獪。成者爲賢。敗者爲愚。不復問尊卑之序。是非之理。彼既爲之。此則効之。下既言之。上則從之。前既行之。後則襲之。烏乎。非彦聖之師。乘願力。積百年之功。其弊固則莫能革矣。（與二舜和尚一書）

△大意　叢林の弊害上下共に浸潤して醫す可らざることを嘆す。

（字釋）・通堂は孟子離婁章下に謂ゆる通國の如し、朱註に「通國は一國の人を盡す也」とあり、即ち通堂は一堂の僧を盡すの義にて僧堂若くは衆堂と云ふに同じかるべし、◎十・局は官義に「今の十局は即ち百丈清規中の兩序要なり、餘は蓋に據らず、謂ふは兩堂首座書記、藏主、知客、都管、監寺、副寺維那、典座なり」とあり、（兩序は東序西序なり、兩堂は僧堂後堂なり、首座以下維那に至るの職位は前に出づ、典座は齋粥を主るものと爲す、局は分ギルと訓じて本と牀座を典主するの職、禪門にて大衆の齋粥を主るものと爲す、）基盤の目の一々限界したるを云ふ字なり、爾雅釋言に「局は分なり」註に「分部を謂ふ」禮、曲禮に「左右局あり」註に「軍の左右部分あり」とあり、又和名津保禰といふも宮中に別に隔てたる室若くは室を有したる女官を呼ぶものにて皆區分を立つるの義とす、◎翼・戴はタスケイタダクと訓ず、官義に「上は恭敬なり下は頂戴なり」とあり、◎拳・拳は器に盛りたる水を抱へて傾け去てざるが如く大切に奉け持つを云ふ、◎奉・行は奉承し修行すること、とにて、信受奉行と連用す、◎惴は之瑞切、詩、秦風黄鳥篇に「其の穴に臨て惴々として其れ慄る」朱註に「惴々は懼るゝ貌」とあり、（頭書所引の詩は詩の小宛也、）◎睽は音奎、斜めに視るなり、◎甘・言は欺きたらすことなり、言の耳を悅ばすを甘と云ふ、詩經に「盗言孔だ甘し」とあり、◎屠・獪は音義に「宰殺を屠と曰ひ殺戮を獪と曰ふ、又害なり」字書に「獪は狡獪なり又擾なり」と見ゆ、

◎彥聖は大學第十章の字面なり、彥とは俊美とて威儀正じくして他に秀美せらるゝを云ひ、聖とは、通明とて衆理に通達したるを云ふ。

（講解）雪峰妙湛の法嗣なる月堂道昌和尚の仰せに、昔し百丈大智禪師は遠く末世の比丘が懶惰怠惰ならひことを氣遣はれて特に規矩を製へてソレで懶惰に流るゝのを防ぎ止められたサテ其の規矩の大要を云へば、銘々が器量才能に隨ふて夫々司る役を設けたるものゝ主者は方丈の室に居り大衆は通堂の内に居る、而して十務の局に各一人の頭首を列ねて其の局を司らしむることの威儀整肅なるは、宛ち國政を執る官省府衙の井然と條理あつて相犯す可らざるが如きである、上に居る主者は其の大綱を提げ下に在る大衆は其の衆目を理ひることを致す斯樣に上下をして規矩通りに相承けて、身の兩臂を自由に使ひ兩脚の十指を自在に使ふやうに使爲るのであるから上能く下を率ゐ下能く之に從はぬと云ふことは莫い、是を以て前聖方が其の規矩を遵承翼戴して拳々と大切に率け行することは、先聖卽ち大智禪師の遺風が未だ全く泯びぬからの故ぢや然るに比ろ見るに叢林漸く衰へ替れて學者は道の末卽ち用なる才學に通ずると貴で道の本卽ち體なる節操を守るを賤とし、浮面の華美なると尙で眞實の素朴なるを溯しとす、斯の如く日に滋し月に浸して次第に澆漓の末世に入りしど。始の程は則ち動行の中よりソット一時の安息を取つて滿足とすれども、ソレが死習と慣染つて歲月既に久しきに及では、幾等安息でも何とも思はぬのみか其の理の當に然らすべき筈と謂ふのである、卽ち心の底から之を非義とも謂はねば又之を非理とも謂はぬ樣に至るのよ、ソコで上に在る主者は惴々焉と愛へ慎れて其の下の衆を畏れ、下に在る大衆は睽々焉と斜に視て其の上の際を伺ふ、平生無事の日には則ち言語を甘うし身體を屈めて以て相親び悅ばし、油斷隙間を得ては則ち狠惡の心態機の計もて相居り猶す斯る有樣であるから理非如何に拘らず、其の成る者をば賢者とし之を稱揚し其の敗る者をば愚者として之を嘲笑するのであつて復た上下尊卑の次序や善惡是非の道理を問はぬ、彼に在て既に之を爲せば此に於ても亦之に効ひ、下に居る者既に之を言へば上に在る者も亦之に從ひ前の人既に之を行へば後の人も亦之に襲せることを致す爲乎佛菩薩の再來なる彥聖の師が、衆生の爲めに其の苦を拔かひとの悲願力に乘じて、百年の長き功を積まるゝでなければ、其の惡く成固つたる弊害をば則ち能く急に革め正すことが出來ないのである。

（死蘇和尚者は月堂和尚より警策演の注釋なる龜州四藏の雲峯和尚に與ふる書なるにや。）